

図137 B区 SD-601出土遺物実測図2 (縮尺1/1・1/2)

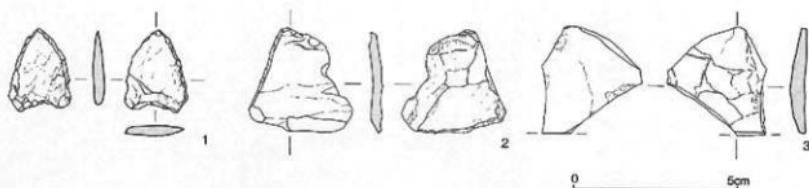


図138 B区SD-601出土遺物実測図3(縮尺2/3)

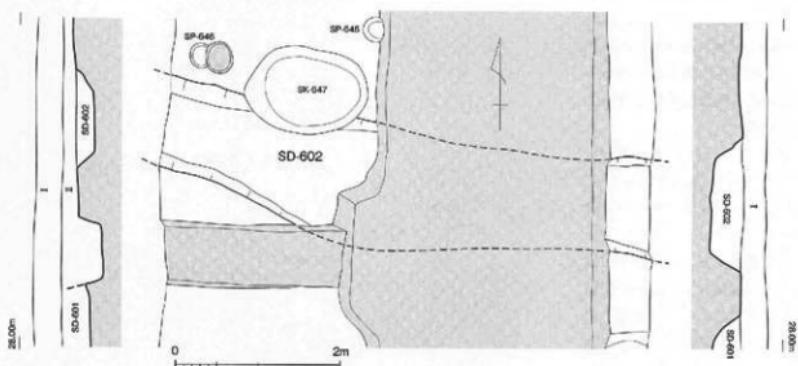


図139 B区SD-602遺構実測図(縮尺1/60)

で破壊されている。搅乱部を挟み東側では北西方向にのびるが、西側では北東方向から南西方向にのびた後、一度屈曲し北西方向へと続く。かなり蛇行しながらのびる溝である。底面はほぼ平坦で、大きな凹凸は見られない。埋土は茶褐色～黒褐色砂質シルトで、最上部には、小さな角礫や粗砂が混じるやや灰色みをおびた茶褐色砂質シルト層が堆積していた。

出土した遺物には、弥生土器(図142-1～10)、土師器(図142-11)、須恵器(図142-12)がある。2は溝底から出土。他は埋土中から散発的に出土している。1は壺の口縁部から肩部の破片で、口縁部は短く、肩部は大きく張り出す。2は壺の口縁部破片で、端部を上方に摘みあげ、端面に2条の四線文を施す。頸部と肩部との屈曲部外面には、突帯を貼り付け、指頭による押圧刻目が施される。内面屈曲部直上には沈線が1条巡る。弥生中期後葉に比定できる。3は壺の口縁部の破片で、横ナテによって端部近くで、外方に少し折れ曲がり、端部は丸くおさめる。4は鉢の口縁部破片。5は壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面にはヘラ状工具の角を押捺した刺突文が巡る。6は壺の底部破片で、縱方向に擦過痕が見られる。7も壺の底部で、内面はケズリ調整が施され、板状工具の押さえつけ痕

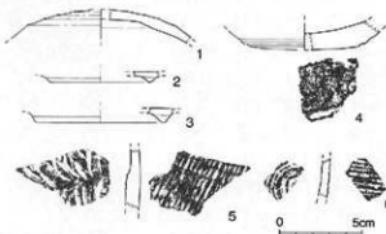


図140 B区SD-602出土遺物実測図(縮尺1/3)

れ曲がり、端部は丸くおさめる。4は鉢の口縁部破片。5は壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面にはヘラ状工具の角を押捺した刺突文が巡る。6は壺の底部破片で、縦方向に擦過痕が見られる。7も壺の底部で、内面はケズリ調整が施され、板状工具の押さえつけ痕

が残る。8は高坏の脚部破片で、柱部下部から大きく外方に裾が開き始める部分にある。9は壺の底部片。平底である。10は壺の底部で丸みをおびた小さな底面をもつ。外面にはタタキ痕が残る。弥生後期後葉～終末に比定できる。11は土器器表の肩部破片。12は古墳後期の須恵器の壺または壺の肩部破片である。他に、弥生土器あるいは土師器の壺や壺の胴部破片が30数点、古墳後期の須恵器壺身あるいは壺蓋の胴部細片が1点出土している。

こうした埋土以外にも、SD-603の最上面に堆積した茶褐色砂質シルト質土層からも遺物が出土している(図143)。1～15は弥生土器。1は壺の口縁部から頭部破片で、端面に凹線文が2条施される。2は壺の口縁端部片で、端部をわずかに摘み出す。3は壺の肩部破片で、外面にはヘラ状工具を用いた刺突文が施される。4～6は壺の頸部～肩部の破片で頸部の付け根に突帯1条を貼り付ける。4・6の突帯には指頭、5の突帯には板状工具による刻目が施される。7・8は壺の底部片で、7は平底、8は上げ底気味である。9～11は壺の底部破片。10・11は上げ底。12は鉢の口縁部破片で、口縁部は斜め上方に直線的に伸びる。13は鉢の肩部上半部の破片で、口縁部は外方に大きく屈曲する。14は高坏の脚端部片である。15は上げ底気味を呈する鉢の底部片である。いずれもは弥生中期後葉～後期前葉に比定される。

16～29は古墳後期の須恵器で

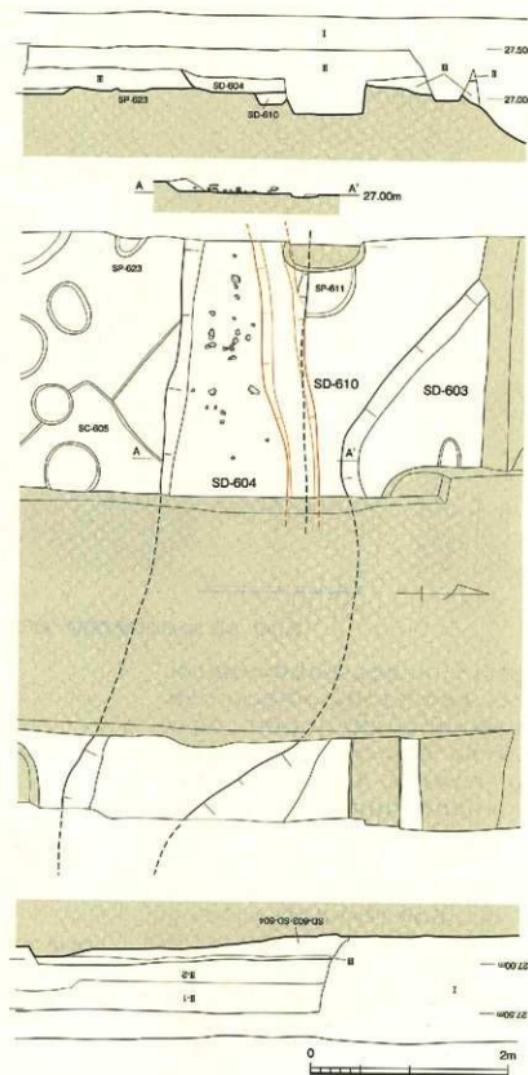


図141 B区 SD-603・604・610造構実測図(縮尺1/50)

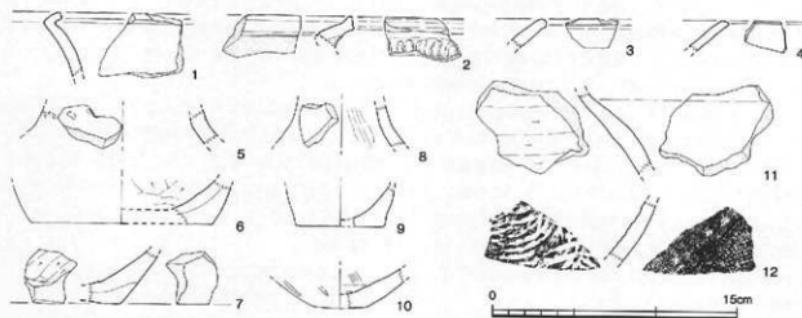


図142 B区 SD-603出土遺物実測図（縮尺1/3）

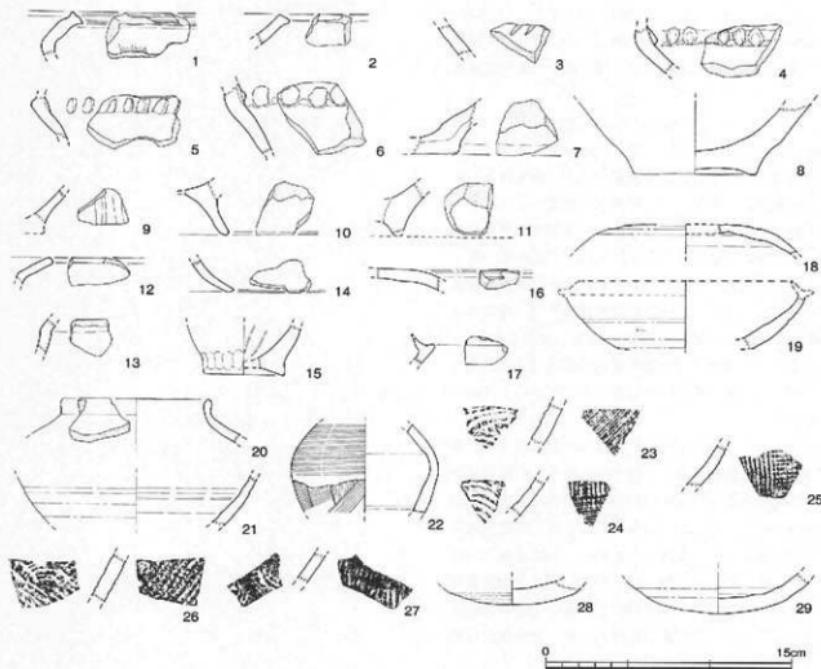


図143 B区 SD-603上面出土遺物実測図（縮尺1/3）

ある。16・18は壺蓋の天井部破片。17は壺身の口縁部から受け部破片。口縁端部を欠損する。19は壺身の肩部から底部片である。20は短頸壺の口縁部から肩部破片。21は壺の肩部下半の破片。22は穿孔がないため壺としたが、壺の可能性もある。肩部から肩部外面にはカキメ調整、底部外面は不定方向へ板状工具によるケズリ調整が施される。23~27は壺または壺の肩部破片。28~29は壺の底部片で、29は丸みをおびる。この他に、弥生土器・土師器の壺や壺の肩部小片、弥生中期後葉に見られる口縁端部を上方に摘みあげた壺の小片、近世陶磁器の破片2点が出土している。近世陶磁器片は、上層部のII層からの混入品と考える。

以上の出土遺物と埋土の特徴から、SD-603は古墳後期に比定できる。

SD-604

B区北部 DG・DH-38・39区に位置し、SC-605・SC-606を切り、SD-603に切られている（図141、図版27）。東西方向にのびる溝で、幅1.28m、深さ15cmを測る。

埋土は、やや灰色をおびた茶褐色シルトで、小礫・粗砂が混じるが、SD-603の埋土ほどはない。

遺物は、埋土下部、底面付近や底面に貼り付いた状態で、須恵器や土師器の小片が点々と出土した。

溝底付近および底面に張り付いた状態で出土した遺物には、図144-2~4・6~11・13~15がある。2~4・6~9は弥生土器。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。2は壺の口縁部破片で、端面には凹線文が2条以上施される。3は壺の口縁端部の破片。4は壺の肩部破片。6は壺の平底の破片である。7・8は上げ底の壺である。9は壺あるいは鉢の上げ底の破片である。

10・11・13~15は須恵器。10は壺の底部破片で、平底である。外底面にはヘラ切り痕が残る。11は壺蓋の天井部片である。13は壺身の底部片。14は短頸壺の口縁部から肩部片で、張り気味の肩部から、頸部が直立し、口縁端部は尖り気味におさめる。15は壺あるいは壺の肩部破片である。11・13~15はいずれも古墳後期に比定できる。図示した以外にも、弥生土器の大型壺の肩部破片1点、壺や壺の肩部破片が十数点出土している。

この他、埋土下部から、図144-1・5・12が出土している。1は弥生土器壺の口縁部。端面には幅広の凹線文が4条施される。5は弥生土器壺の頸部から肩部

破片である。1は弥生中期後葉、5は弥生中期に位置づけられる。12は古墳後期の須恵器壺蓋の天井部破片である。他に、弥生土器の壺や壺の肩部破片10点がある。

以上、溝底面に貼り付いた状態で出土している遺物には、弥生土器と古墳後期の須恵器がある。ただし、図144-10は、平底の壺で、こうした形態の壺は古墳後期にはない。古代の須恵器と考え、SD-604の時期を古代と考えておく。

SD-610

B区北端のDH-39区に位置し、SD-604底面で検出した（図141、図版27）。東西方向にのびる溝で、幅35~45cm、深さ26cmを測り、断面は逆台形状を呈する。

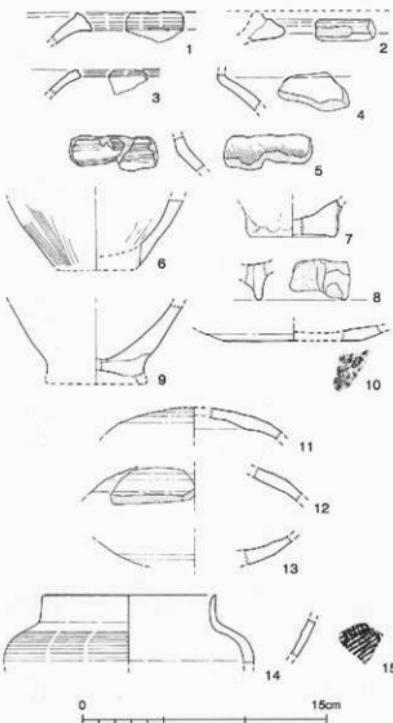


図144 B区 SD-604出土遺物実測図（縮尺1/3）

SD-604に切られ、SP-611を切っている。

埋土は、SC-605やSC-606に近い、やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトである。

埋土から散発的に遺物が出土している。5点を図示した(図145)。1は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部付け根には、指頭による刻目を施した突帯が1条巡る。2は平底と考えられる底部近くの壺の胴部下半部の破片である。3は壺の口頸部破片で、口縁端部は欠損する。4はミニチュア高杯である。1~4は弥生中期~後期。5は古墳後期の須恵器壺身の破片である。口縁部内面にあまい段をもつ。この他、弥生土器あるいは土師器の壺や壺の胴部破片が5点、近世陶磁碗の口縁部破片が1点出土している。近世の陶磁器片1点は、SD-610が近世のSP-611と切り合い関係にあることから、混入品と判断した。

以上、SD-610は古墳後期の溝と考える。

SD-627

B区中央部のDH-36・37区に位置する。北西から南東にのび、搅乱部分で屈曲し、さらに東にのびる。幅1.1m~1.9m、深さ90cmを測る。逆台形に近い断面をもち、底面は緩やかに窪む。

遺物は、埋土上面から弥生中期の壺頸部片・胴部片が各1点、埋土から近世の陶磁器2点と土師器小片が少量出土している。

SD-627は近世の溝である。

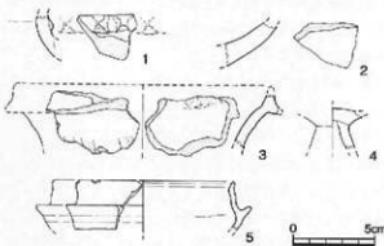


図145 B区 SD-610出土遺物実測図(縮尺1/3)

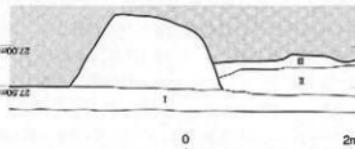
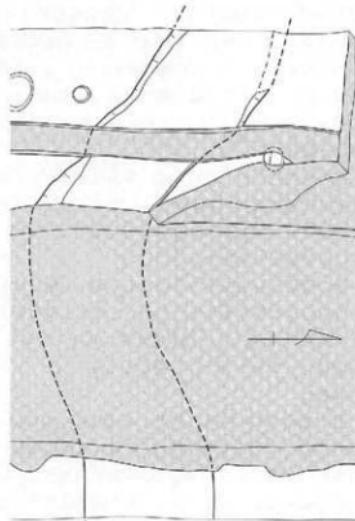


図146 B区 SD-627遺構実測図(縮尺1/60)

5 土壙

B区では18基の土壙が出土した。いずれも埋土aの遺構であるが、SK-663・666・675・684・690・695・697・705・710・713・725・732・733・735・739の15基は弥生時代、SK-647・662・693の3基は古墳時代の土壙である。

SK-647

B区南部のDH-33区に位置する（図147）。SD-602と切り合う。長径1.5m、短径1.1mの不整形な長楕円形を呈し、底面は東から西にかけて低くなり、もっとも深い部分で28.7cmを測る。

埋土の上部は粗砂層、下部は灰褐色シルト層である。

埋土上部の粗砂層の中位から、近世陶磁器片2点、弥生土器あるいは土師器の胴部破片4点、土師器塊1点が出土している。土師器の胴部破片の中には、古墳後期と考えられる土師器壺の破片がある（図148-1）。直線距離で6m離れたDI-31・32区Ⅲ層中から出土した破片と接合する。

下部の灰褐色シルト層からは、須恵器壺身もしくは無蓋高杯の胴部破片（図148-2）、外面に回転ヘラケズリが施された須恵器壺の破片が1点出土している。ともに古墳後期の遺物である。

下層の遺物は古墳後期のものであるが、上層には古代～近世の遺物が含まれる。しかし、埋土上部は切り合うSD-602と共に、下部も灰色系の埋土cであり、SD-602に伴う中世～近世の土壙と考える。

SK-662

B区南端部のDH-32区に位置する（図147）。SD-601・SP-658に切られ、SP-659を切っている。東西に細長い長楕円形の土壙である。東端部は擾乱で破壊されている。推定長径1.15m、短径70cm。中央部に深さ7～16cmほどの円形の掘り込みをもつ。掘り込み部分は径50～65cmを測り、ほぼ中央で立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は復元径20～22cmで、黒褐色砂質土に径1cm大のにぶい黄褐色砂質土の塊が混じる。②・③は掘り形埋土にあたる。②層は黒褐色砂質土。③層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が混じり、全体に明るい色調である。

埋土から出土した遺物には、弥生土器の壺（図148-3・4）、高杯（図148-6）、壺（図148-7）がある。3・6は掘り形埋土の③層から出土している。3は、口縁

部が外方に大きくひらく壺で、弥生中期に比定できる。4は底部近くの胴下半部の破片である。6点の破片が接合するが、接合する破片間でも焼成具合や色調が異なる。焼成失敗品の可能性があるが確定できない。5と同一個体と考えられる。6は、高杯の壺部破片で、外面には凹線文が施され、直下に板状工具の角を押し当てた刺突文が巡る。7は「く」字形に短く緩やかに屈曲する口縁部をもつ。口縁上面がわずかに内湾する。弥生後期前葉のものと考える。7はⅢ層出土遺物と接合している。

この他、SK-662上面のⅢ層部分からは、弥生土器壺の底部（5）、土師器壺の口縁部（8）が出土している。5は、前述したように、4と同一個体の可能性が高い。8は、口縁端部は面取り調整を施し、古墳後期に比定できる。

確実に埋土から出土した遺物は弥生中期～後期前葉の時期幅をもつ。したがって、SK-662は弥生後期前葉に埋積した遺構と考える。なお、Ⅲ層部分から出土した古墳後期の壺（図148-8）については、Ⅲ層中に掘り込まれた遺構に伴う可能性を考えておきたい。

SK-663

B区南半部のDH-32区に位置する。北端部を攪乱で破壊され、SP-664・665に切られる。残存長125cm、最大幅45cm、深さ10cmの浅い船底状を呈する土壙である（図147）。埋土は黒褐色砂質土で、下部にはにぶい黄褐色砂質土が少量混じる。埋土の遺物の多くは、底面よりやや浮いた状態で出土している。鉢の口縁部破片（図149-2）、磨石（図150-1）がある。図149-2は、口縁部が頸部から大きく外反する。弥生後期前葉～前葉に比定できる。図150-1は、花崗岩製で、両端部に擦痕を観察できる。

SK-663上面のⅢ層部分から出土した遺物には、弥生土器の壺（図149-1）、須恵器の壺身（図149-3）がある。1は、やや不安定な小さな底部である。弥生後期、3は、古墳後期の壺身の底部破片がある。また、埋土からは、炭化物片が多く出土した。炭化物周辺の埋土を持ち帰り、水洗選別を行い、一辺5mm未満の炭化材を確認できた。樹種等については分析を行っておらず不明である。

Ⅲ層部分から出土した遺物は、切り合い関係から考

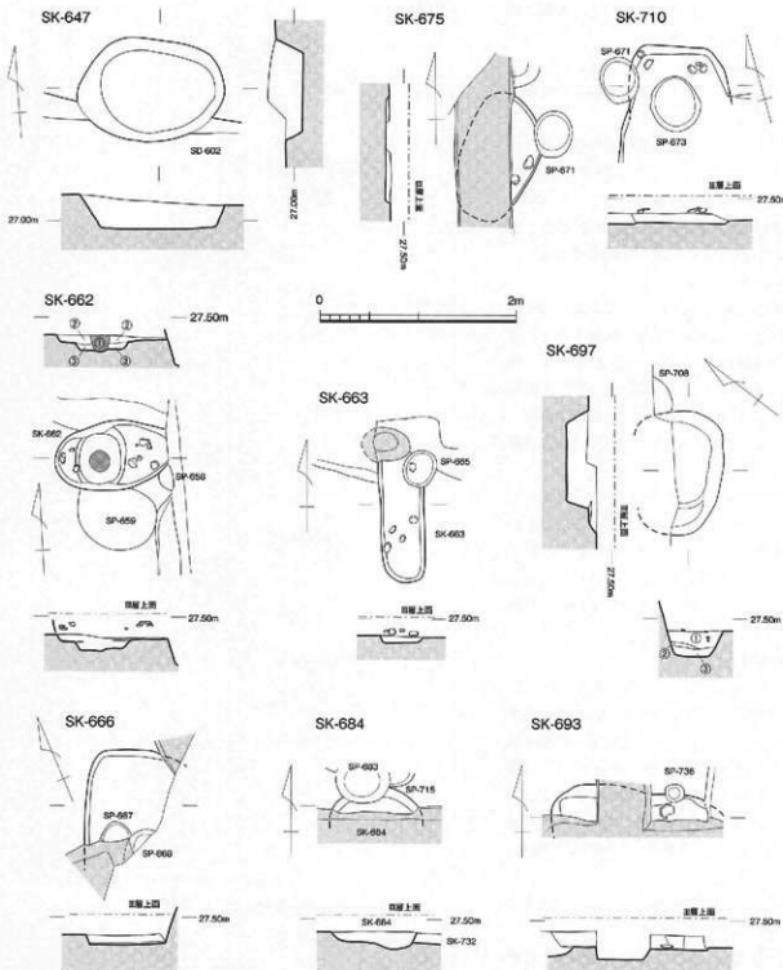


図147 B区 SK-647・662・663・666・675・684・693・697・710遺構実測図（縮尺1/50）

え、上部遺構に伴う可能性が高い。埋土の出土遺物は、破断面が磨滅した小片が多いが、いずれも弥生後期までの遺物で、埋土 a に分類できるので、SK-663は弥生後期の遺構と考えた。

SK-666

B区南東部のDH-31区に位置する。隅丸の長方形あるいは方形の土壙と考えられる（図147）。遺構の大半は調査区外へのびる。最深部で10cmを測る。SC-670を

切っている。底面はほぼ平坦で、底面では SP-667・SP-668を検出した。

埋土は黒褐色砂質土で、直径2~5cmの花崗岩円礫や、径1cmほどにぶい黄褐色砂質土塊が点々と混じる。

埋土から弥生土器の壺や壺の底部破片が4点出土しているが、小片で図示できない。また時期的な特徴も明らかでない。しかし、弥生時代後期前葉のSC-670を切ることから、SK-666はそれ以降の土壇と考える。

SK-675

B区南端のDI-32区に位置する。SP-671に切られ、西半部は搅乱で破壊されているが、小型の隅丸方形の土壇と考えられる(図147)。残存長11m、幅30cm。深さは最深部で5cmを測る。底面はほぼ平坦である。

埋土は、黒褐色砂質土で、径10cm大の花崗岩の円礫が多く混じる。

埋土中から炭化物の小片が少量出土しているのみで、遺構の時期を考えることができる遺物は出土していない。しかし、埋土は埋土aに分類でき、SP-671に切られるところから、SK-675は弥生時代の土壇と判断した。

SK-684

B区南端のDH・DI-31区に位置する。大部分を搅乱で破壊されているため、北半部の一部しか残存していないが、径35cm以上の精円形の小型土壇と考えられる(図147)。底面は、西半部で10cmほどの深さであるが、中央付近から東へ向かって落ち込み、最深部で18cmを測る。SP-683に切られ、SK-732を切っている。

埋土は、黒褐色砂質土で、径4~5cm大の花崗岩の円礫が点々と混じる。

埋土中から、弥生土器壺・壺底部小片が10点ほど出土している。その中の1点は、北側に約2.5m離れたSK-739から出土した壺の破片と接合する(図169-5)。弥生中期後葉～後期初頭に比定できる。

埋土は埋土aに分類でき、弥生中期後葉～後期のSP-683に切られること、出土遺物の接合関係から、弥生中期後葉～後期初

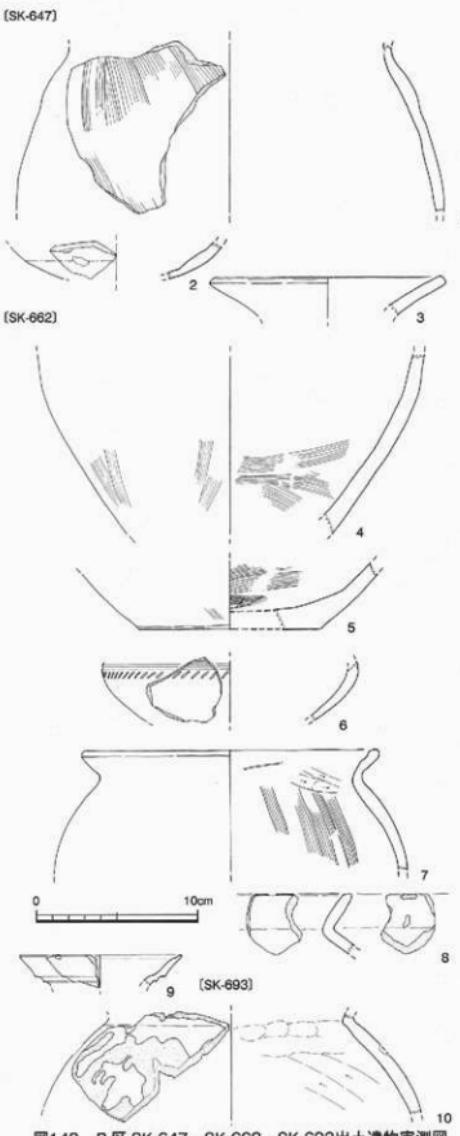


図148 B区SK-647・SK-662・SK-693出土遺物実測図
(縮尺1/3)

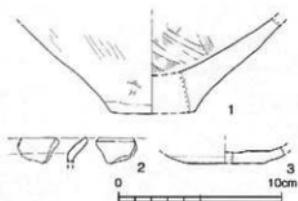


図149 B区 SK-663出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

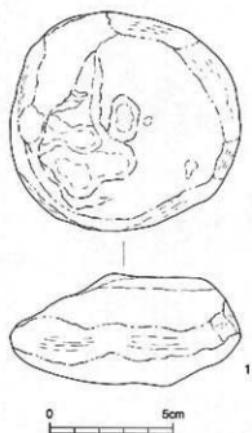


図150 B区 SK-663出土遺物実測図2 (縮尺1/2)

頭の土壠と判断した。

SK-690

B区南端のDI-31区に位置する。一部を擾乱で破壊されているが、長辺3m、短辺2m、深さ45cmの隅丸長方形の土壠である（図151、図版29-2）。底面は、中央が緩やかに窪む。SC-687・713、SK-689・693・705、SP-677・678・702・709に切られ、SK-735を切る。

埋土でも上部は暗褐色砂質シルトである。これに対して、埋土下部は砂礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1cm～10cmの明黄褐色・灰白色砂質土塊を大量に含む。

埋土上部には焼土や炭化物片が混じる。一部を水洗選別した。炭化物は、多くが一辺5mm未満の炭化物片

だが、中には一辺1cmほどの木片がある。

遺物は、埋土上部で西半部を中心として出土している。出土遺物の接合関係を見ると、図152-1はSK-705・713出土の破片と接合する。6はSC-752を構成するSP-704やSK-705・713・725の破片と接合する。図153-4・9は古墳時代後期の掘立柱建物を構成するSP-688②～④層出土の破片と接合する。

図152-1は、壺で、図153-3と同一個体である可能性が高い。胴部中位に焼成破裂痕が残る。弥生中期後葉。2は、壺肩部片で、外面には重弧文が施文される。弥生前期のもので、混入品と考えられる。3は、壺の口縁部破片で、口縁端面に2条の凹線文が施文される。4も壺の口縁部破片。口縁部直下に小さな梢円形でクレーター状に窪む焼成破裂痕が残る。5は平底の壺底部。6は、壺の下半部で、外面は焼成破裂痕が見られ、内面は焼成状態が悪く、暗灰色を呈する。底部側面には焼成不良の部分がみられる。

図153-1は壺の強く「く」字形に屈折する口縁部の破片。口縁端部を上方に摘み出す。2は壺の口縁部破片で、「ハ」字形に頸部がすばまり、大きく口縁部が外反する。3は壺の底部から胴部下間にかけての破片で、底部は平底。4は壺の下半部で、底部はわずかに上げ底状を呈する。5～7も壺の底部片。上げ底といふより脚台底に近い。8はわずかに上げ底状の壺の底部破片。9は、深鉢形のミニチュア土器。底部は上げ底状で、口縁部は端部を折り曲げ、外面側に折り込んでいるため、口縁部に粘土紐を貼り付けたような形状を呈する。10は鉢の口縁部破片である。11も鉢の口縁部破片。口縁部は大きく屈曲する。

図154-1・2は砂岩の亞円礫を利用した台石である。1の上面と側面の一部には敲打痕が集中して残る。2の上面には研磨痕が観察できる。

この他、壺の肩部破片3点、上げ底の壺の底部破片5点、弥生土器の小片が約100点出土している。

以上の出土遺物は、弥生前期の壺の肩部片を除き、いずれも中期後葉に比定できる。また、切り合い関係からは、B区南半部の遺構の中でも最古段階に位置づけられる。以上から、SK-690は弥生中期後葉に比定できる。

SK-693

B区南端のDI・DJ-3区に位置する。擾乱溝を挟んで東西の残存部分を確認できた（図147）。調査段階ではSK-683としていたが、別遺構に同じ遺構番号を付

していることに気がつき、SK-693と遺構番号を変更した。南半部は搅乱で破壊されているが、長径1.8~2 mの長円形の土壙と考えられる。深さは23cmを測る。底面には小さな凹凸があらわれる。SP-736に切られ、SC-689、SK-690、SP-691を切っている。

埋土は2層からなる(図118)。上部の①層は、暗褐色砂質土で、灰白色砂質土が混じる。径1mm前後の砂砾や径1cm前後の円礫を含む。下部の②層は、砂砾と円礫が混じる暗褐色砂質土で、明黄褐色土のレンズ状ブロックが混じる。

埋土①層中から須恵器甕(図148-9)、底面から浮いた状態で土器器の甕の胴部破片(図148-10)が出土している。9は、口縁端部に内傾する段をもち、外面には口縁部と頸部との境に鋭利な突帯をもつ。10は、SP-702から出土した破片と接合する。ともに古墳中期に比定できる。この他、弥生土器の甕や甕の胴部小片15点がある。また、埋土②層から、弥生中期~後期と考えられる甕や甕の胴部小片が各1点ずつ出土している。

以上、図示した須恵器甕や土器器甕が遺構の時期を示す遺物と考え、SK-693は古墳中期の土壙と判断した。

SK-695

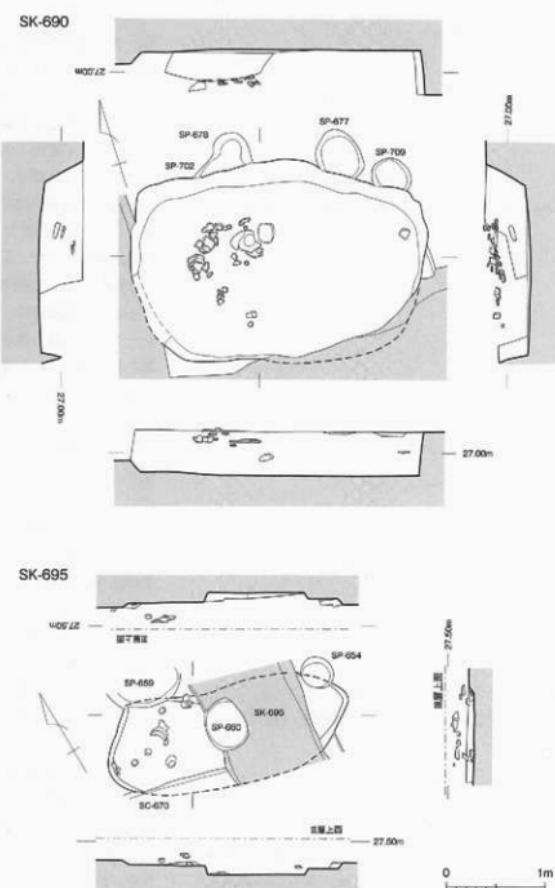


図151 B区SK-690・695遺構実測図(縮尺1/50)

B区南端のH-32区に位置する。長径2m、推定短径1m前後の歪な長方形の土壙である(図151)。SC-670、SP-654・659・660に切られ、SP-724・745を切っている。中央東よりを搅乱で破壊される。底面は西から東に徐々に低くなる。

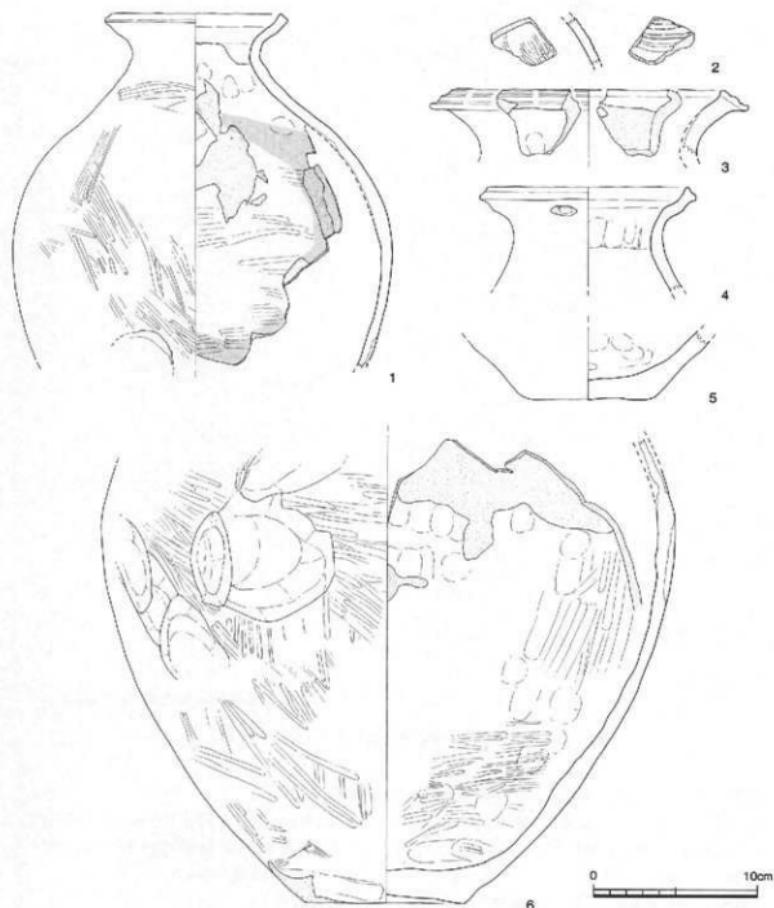


図152 B区SK-690出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

埋土は、黒褐色砂質土で、不整形のにぶい黄褐色砂質土の大きな土塊が多く混じる。

出土遺物の多くは、西半部の埋土から底面より浮いた状態で出土している。弥生土器（図155-1・2・4～6）、花崗岩の円礫を利用した磨石（図156-1）が

ある。図155-1は、長頸壺の口縁部～肩部の破片で、口縁部は直立気味にのびた後、端部近くでさらに外反し、端部は尖り気味におさめる。2は、「く」字形に口縁部が屈折する壺で、口縁端部をわずかに上方へ摘み上げる。4は、大型壺の頸部破片で、外面に沈線文

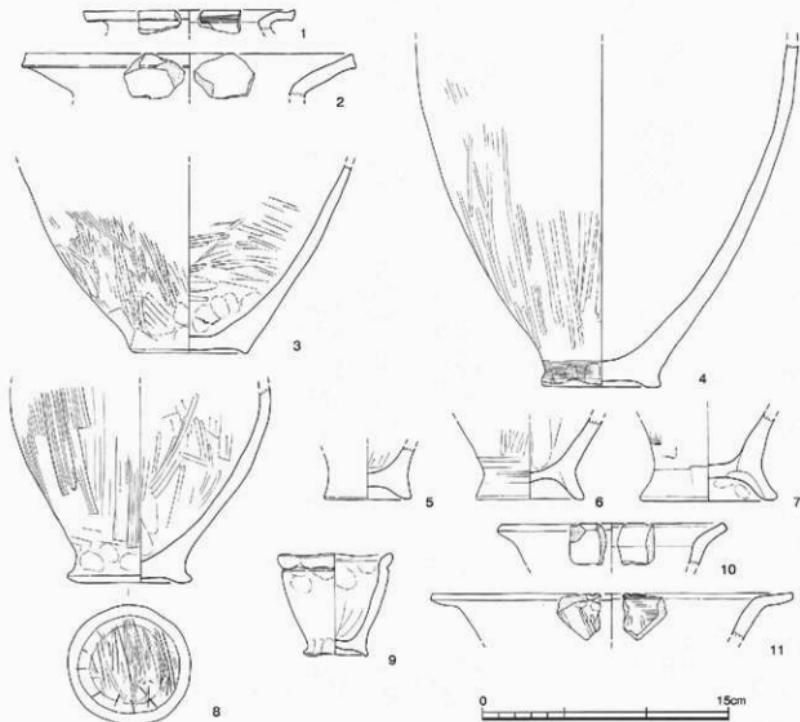


図153 B区SK-690出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

4条が巡らされる。5は鉢の肩部片。6は、壺の底部の破片である。平底。この他、高坏の破片がある。2・6は弥生中期後葉～後期前葉に見られるもので、1・4・5は後期前葉に比定できる。

SK-695上面のⅢ層部分で出土した遺物として、図155-3がある。壺の「く」字形口縁の破片で、端部を上方に挿み上げる。この他、Ⅲ層部分からは、弥生土器の壺や壺の胸部破片13点、壺の口縁部小片2点、高坏の脚端部小片1点が出土している。壺の口縁部小片の1点は、「く」字形口縁で、端部を下方に挿み出す。弥生後期初頭のものと考えられる。

また、埋土とⅢ層部分から、炭化材が少量出土している。長辺1cm、幅及び高さ5mmほどの炭化材が含まれる。

れる。

SK-695は、弥生後期前葉のSC-670に切られること、弥生後期前葉までの遺物が出土していることから、弥生後期前葉の土壤と考える。

SK-697

B区南端のDI-31・32区に位置する。調査区壁沿いで出土し、北側は調査区外にのびるが、長軸長1.2m前後の楕円形の土壤と考えられる(図147、図版30-1)。深さは26cmで、南西部がテラス状の底面となっている。SK-739とSP-708を切っている。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。②層は、黒褐色砂質シルトで、暗灰色砂質土が混じり、①層よりも明るい土色である。③層は、黒褐色砂質シルトで、多

量の暗灰色の粗砂、砂礫や小石が混じる。

遺物は①～③層の各層から出土している。とくに、①層の遺物が多い。

①層出土の遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部小片數十点がある。その中で、図示できた遺物は、以下の5点である(図157-5～11・13・14)。5・6は甕の胴部の上半部片で、「く」字形口縁がつくものと考える。7は壺の平底の破片、8は底部近くの壺の胴部下半の破片である。9～11は甕の底部片で、9は脚台状の上げ底、10・11は平底。13・14は高環脚部片。14の脚裾には3条の凹線文が施されている。いずれも、弥生中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えられる。

②層からは、弥生土器の壺の胴部破片1点が出土しただけである。

③層からは、土師器や弥生土器の壺・甕の破片が8点出土し、3点を図示した(図157-1・2・4)。1は土師器甕の口縁部破片である。口縁先端付近の破片で、古墳中期に比定できる。2は甕の口縁部片。「く」字形に口縁部が屈折し、端部を上方に摘みあげる。口縁屈折部の内面には、沈線状の段が巡る。4は、壺の肩部破片で、頭部は直立気味に立ち上がる。

この他、埋土から出土した遺物には、弥生土器の甕

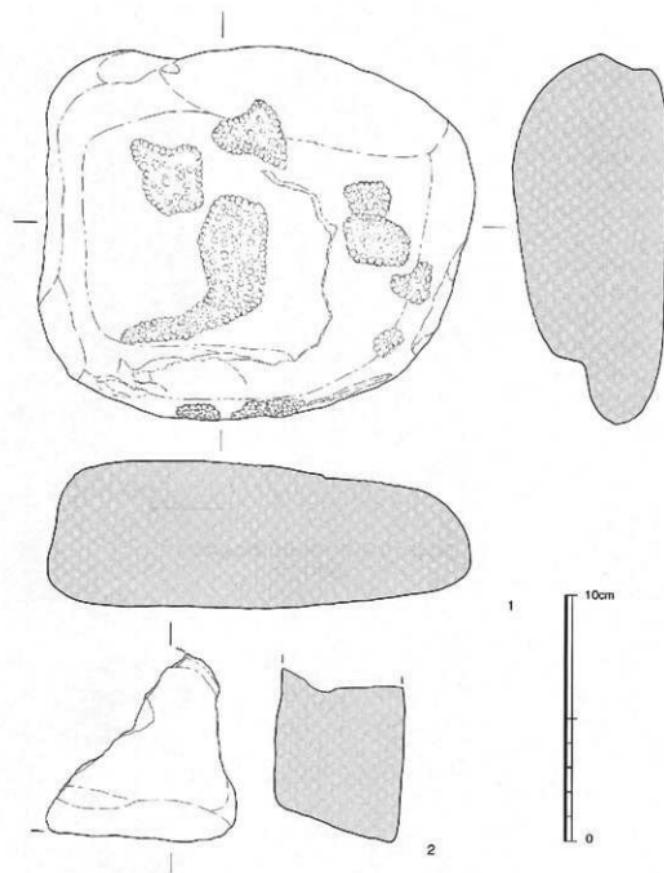


図154 B区SK-690出土遺物実測図3 (縮尺1/2)

(図157-3)と鉢(図157-12)がある。3は、逆L字形に屈折する口縁部をもち、口縁端部を上方に摘み上げる。胴部中ほどにヘラ状工具を刺突して施す短斜線文が巡る。弥生中期後葉に比定できる。12は、逆L字形の口縁部をもち、端部は面取りする。弥生後期前葉に位置づけられる。また、SK-697の埋土から出土した破片の中には、下部の遺構であるSK-739の破片と接合するものも含まれる(図169-9)。さらに、①層

から炭化物米と
考えられるもの
が1点出土して
いる。

出土遺物は、
弥生中期後葉～
後期前葉のもの
がほとんどであ
るが、1点だけ
古墳中期の土師
器甕(図157-1)
がある。切り合
い関係も含め
て、SK-697は
古墳中期の土壤
と考える。

SK-705

B区南半部の
DI-31区に位置
する。南半部を
搅乱で破壊され

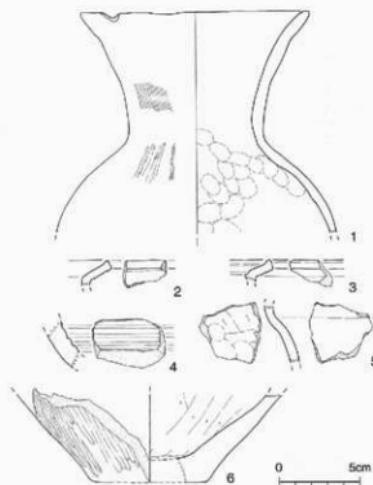


図155 B区SK-695出土遺物実測図1
(縮尺1/3)

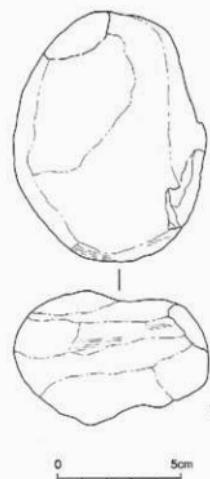


図156 B区SK-695出土遺物
実測図2 (縮尺1/2)

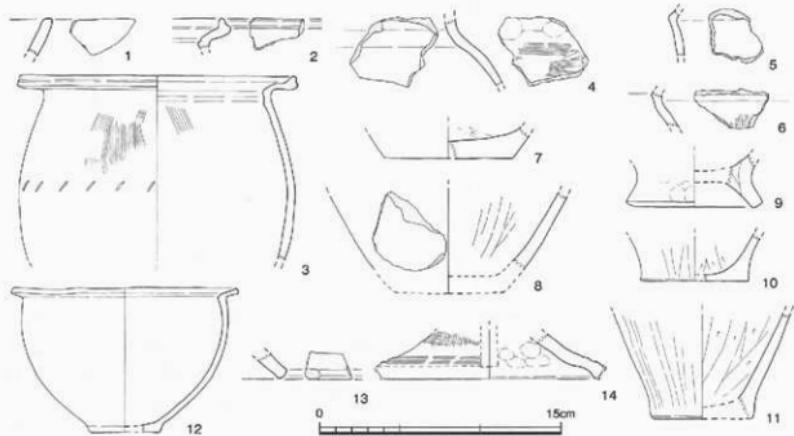


図157 B区SK-697出土遺物実測図 (縮尺1/3)

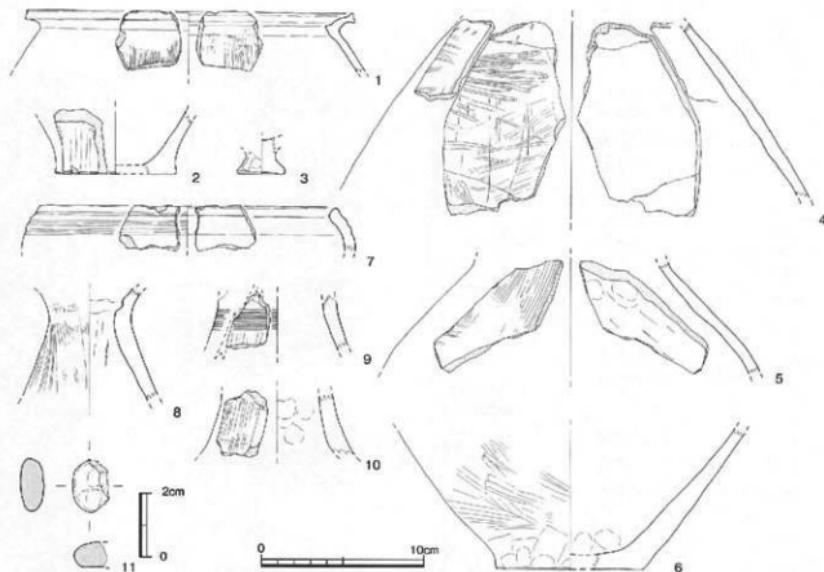


図158 B区SK-705出土遺物実測図1 (縮尺1/3, 2/3)

ている。残存長1.1m、幅1.5m、深さ40cmを測り、不整な隅丸方形の土壇と考えられる(図159、図版31-1)。SK-713とSP-728を切り、SP-681に切られている。

埋土は、灰褐色砂質土を主体とし、黄褐色や明黄褐色、灰黃褐色の砂質土の径2cmほどの塊が大量に混じる。

遺物は床面から浮いた状態で、埋土上部から中位で、北から南にかけて放り込まれた状況で出土している。出土遺物を図158に図示したが、図158-3・8・9・11は埋土上部～中部から出土している。

図158-1は、弥生土器の壺の口縁部破片で、口縁部は「く」字形に屈曲し、口縁端面は凹線状に窪む。2は平底の壺の底部破片。3は、深鉢形のミニチュアの底部。裾が張った平底をもつ。4・5は壺の肩部破片で、4の肩部外上面には刻目が施される。6は壺の平底破片。7は高壺の口縁部破片。緩やかに内湾する形態で、端部は面をなす。外面には3条の凹線文が巡る。8～10は高壺の脚部破片である。9は外面に9条

の沈線を施し、沈線を挟んだ上下二段に千鳥状に未貫通の矢羽根状透孔を施す。10には長方形透孔が2ヶ所認められる。11は土製品で、欠損しており全体形は不明。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。

図示した土器以外に、「く」字形に屈曲する壺の口縁部破片、外面にミガキ調整を施す胴部破片などが十数点、弥生土器と考えられる小片約70点がある。

出土遺物の接合関係を見ると、下部遺構のSK-690・713から出土した破片と接合するもの(図152-1・6)や直接切り合い関係のないSK-739から出土した破片と接合するものがある。

図160-1は堆積岩の円礫を利用した台石、2は堆積岩の台石である。

また、埋土からは不定形の炭化物片が出土した。水洗選別を行ったが、炭化物の微細片が確認されているにとどまる。

以上、出土遺物は弥生後期前葉までの時間幅で捉えられる。遺物の出土状況を見ると、埋土上部～中位に

放り込まれた状況が見られることから、SK-705は弥生後期前葉の土壙と考えられる。

SK-710

B区南端のDH・DI-32区に位置する。南半部をSC-670によって切り取られるが、長方形あるいは方形の土壙と考える(図147)。残存長55cm、幅90cm、深さ10cmを測る。SC-670・SP-671・673に切られている。

埋土は、黒褐色砂質シルトで、径2~3mmの丸い明黄褐色塊が少量混じる。花崗岩が風化して径1cmの大の砾となったものが多くみられる。

出土遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部破片、口縁部の細片約10点がある。いずれも遺構検出までのⅢ層部分からの出土。その中で、図161-1は、弥生土器の甕の胴上半部の破片である。2は、高坏の脚端部の破片で、端部を拡張して凹線文を2条施す。ともに弥生中期後葉に比定できる。

SC-670に切られること、出土遺物から、SK-710は弥生中期後葉の土壙と考えられる。

SK-711

B区南端のDH-31区のⅢ層上部で、弥生土器・石器・炭化物が径1mほどの範囲で集中して出土した。この時点では、遺構の掘り形を確認できなかったが、Ⅳ層上面で長辺1m、幅50cmの隅丸長方形の土壙を確認できた(図162、図版32-1)。深さは6~15cmで、底面は北に向かって徐々に深くなる。Ⅲ層部分で出土した弥生土器・石器・炭化物は、この土壙に伴うものと考えられる。SP-706に切られ、SP-714を切っている。

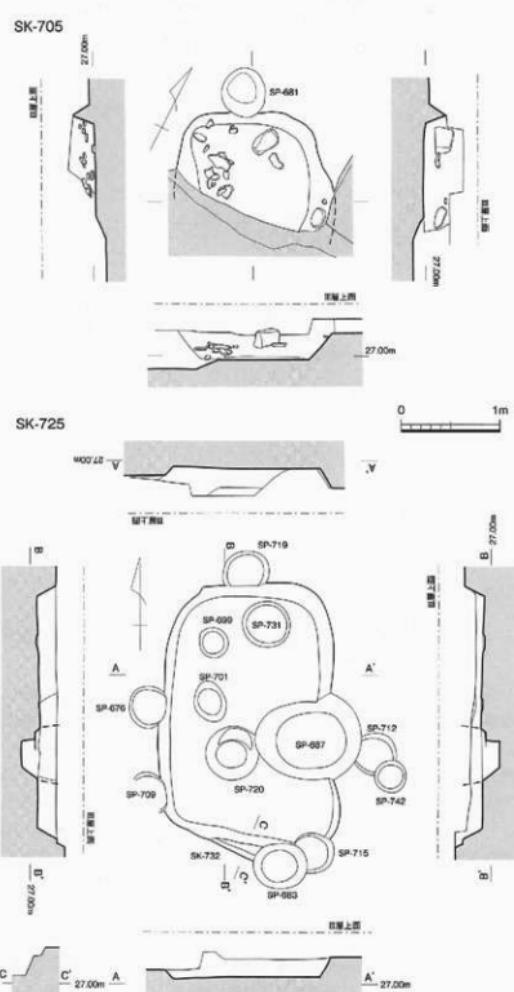


図159 B区 SK-705・725遺構実測図(縮尺1/50)

埋土は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

SK-711の掘り形を確認する以前に、Ⅲ層中の炭化

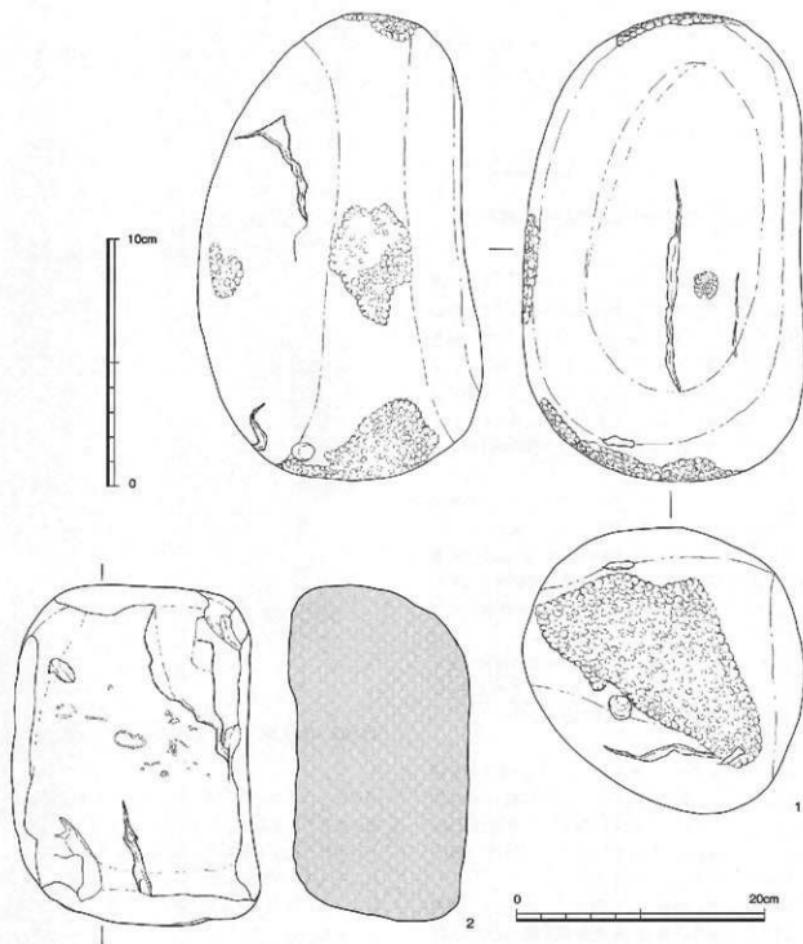


図160 B区 SK-705出土物実測図2 (縮尺1/2・1/4)

物屑とその下部から、100点近くの土器片が出土している。炭化物とともに一緒に廃棄されたと考えられる。

出土土器は、いずれも弥生土器である（図163）。1は、壺の頸部～肩部の破片で、頸部と肩部との境に刷

毛目工具の小口部を押圧する短斜線文が巡る。2・3は壺の底部破片。2は平底、3はやや不安定な平底である。4・5は壺の口縁部破片。横ナデを施す結果、端部が外下方に突出する。6は、口縁部が上外方に短

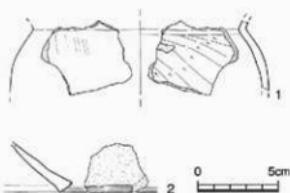


図161 B区SK-710出土遺物実測図（縮尺1/3）

くのび、端部をわずかに上方へ摘み上げる。7は、壺の口縁部破片で、端部は上方に摘み上げる。8・9は、壺の口縁部破片。8は端部を欠損するが、上方に摘み出す。9の端部は面取りされる。10・11は高杯。10は壺部に面取り調整を施した口縁部の破片で、外面に3条の凹線文が施される。12は台付き鉢と考えた。いずれも、弥生中期後葉～後期前葉までの時間幅で捉えられる。

図164-1は砂岩の円礫を利用した叩き石。2は花崗岩の砥石。3は花崗岩塊を用いた台石である。

炭化物を持ち帰り、水洗選別した。長辺1.5cmを測る炭化材が目立つ程度で、5mm未満の炭化材が大半を占め、残存長辺1.5cmの種実や炭化米の可能性をもつ資料を各1点確認できた。

出土遺物は、弥生中期後葉～後期前葉に比定できるが、後出するSC-670が弥生後期前葉と考えられ、SK-711は弥生後期前葉の遺構と考える。

SK-713

B区南端 DI-31区に位置する（図119）。南半部を搅乱で破壊され、SK-705・SP-677・681・702・709に切られ、SC-689・729・730を切っている。残存長2m、幅2.1m、深さ44cmの隅丸方形あるいは長方形土壙と考える。底面はほぼ平坦である。

埋土は、暗褐色砂質土を主体とし、径1cm大の黄褐色砂質土や灰黃褐色砂質土の土塊が大量に混じる。径2cm大の円礫の碎片が多く含まれる。床面付近から炭化物がかたまって出土した。

遺物は埋土中から出土している。弥生土器の壺や壺の胴部破片約20点がある（図165）。1は、壺あるいは鉢の胴部上半の破片である。頭部で大きく外方に屈曲する。2は壺の胴部上半の破片。3は壺の上げ底の底部片である。4は、鉢あるいは高杯の口縁部片で、口

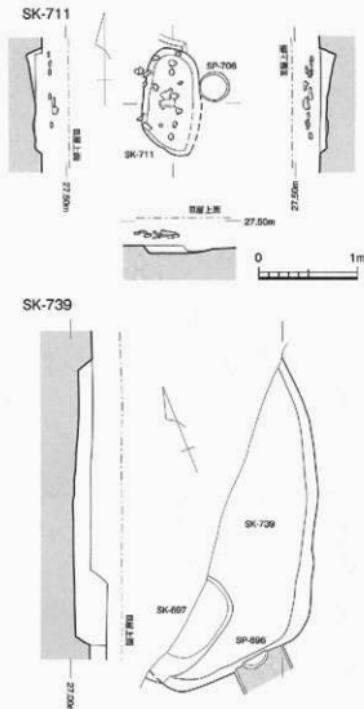


図162 B区SK-711・739遺構実測図（縮尺1/50）

縁端部を面取りする。5・6は、鉢の口縁部破片で、端部は丸くおさめる。

いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。また、SK-690・705から出土した破片と接合するものもある（図152-1・6）。これらは下部遺構からの混入品である。

出土遺物から、SK-713は弥生後期前葉の土壙と考える。

SK-725

B区南端のDH-DI-31・32区に位置する。長辺2.5m、短辺1.7m、深さ28cmの隅丸長方形の土壙である（図159、図版31-2）。SC-729・730とSP-718・722・723を切り、SC-670、SP-676・683・687・699・700・

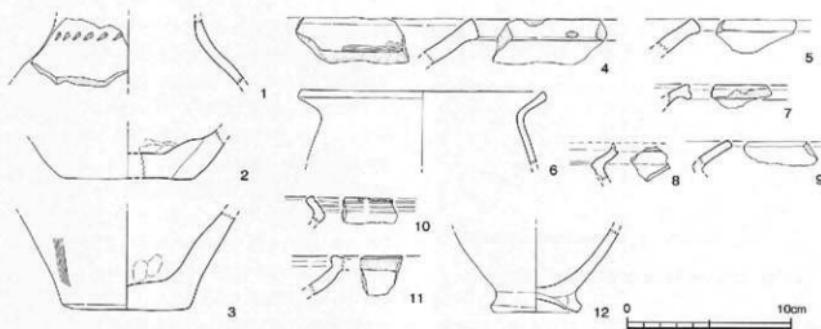


図163 B区SK-711出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

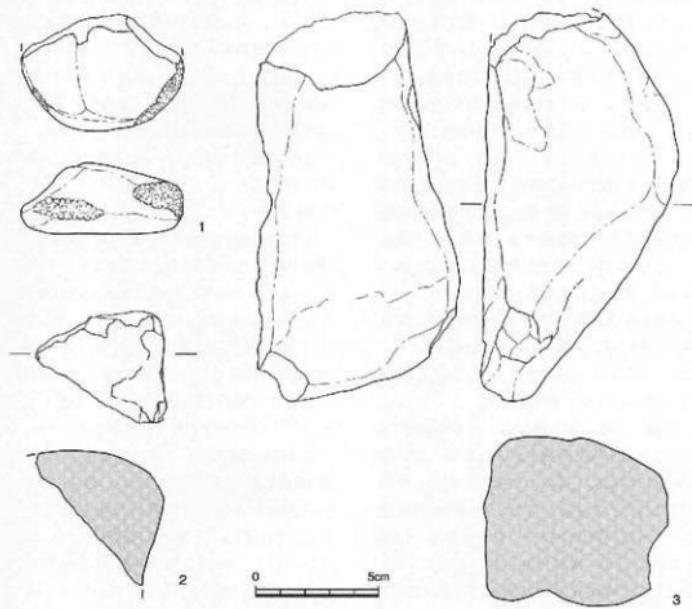


図164 B区SK-711出土遺物実測図2 (縮尺1/2)

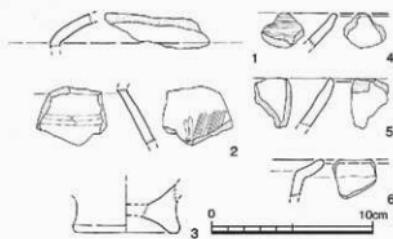


図165 B区SK-713出土遺物実測図（縮尺1/3）

701・709・715・719・720・731に切られる。SK-732とも切り合うが、先後関係は不明である。底面は平坦で、目立った凹凸はみられない。

埋土上部は黒褐色砂質シルト。下半部には親指先～拳大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。

遺物は、埋土上部、中部、下部、最下部で取り上げを行っている。図166に示した遺物の中で、1・5・9・15・17は埋土上部、2・6・11・13・14は中部、4・18は下部、3・8・16・19・20は最下部から出土している。この他に、埋土として取り上げた遺物に、7・10・12がある。また、埋土上部から弥生土器の壺や壺の胸部破片20数点、中部から弥生土器の壺や壺の胸部破片約5点、下部から40点弱の弥生土器の壺や壺の胸部小片、最下部から弥生土器壺や壺・鉢の破片十数点が出土し、埋土として取り上げた遺物には弥生土器の壺や壺の口縁部、胸部細片が約8点ある。

出土した遺物の接合関係を見ると、上部遺構であるSC-670と接合関係にあるもの（図166-9）や、SK-690・705・713・SP-704から出土した破片と接合するもの（図152-6）が含まれている。

図166-1は、壺の口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端面には3条の凹線文が施される。2は、壺の肩部破片で、外面には板状工具の小口部分を押捺した短斜線文が2段にわたって巡る。3は、直口壺の口縁部～頸部の破片である。頸部中程で一旦すばり、口縁部が少し外方に広がり、端部を丸くおさめる。4は、壺の口縁部破片で、端部を上方に摘み上げる。5は、壺あるいは鉢の口縁部破片で、口縁端部を面取りする。6は鉢の口縁部小片で、端部をわずかに上方に摘み上げる。7は、壺あるいは鉢の口縁部破片で、口縁端部を面取りする。8は、壺の口縁部破片で、口縁端部を

面取りする。9は、壺の口縁部～胴部上半の破片で、口縁端部を上下に拡張し、横ナデ調整を施す。肩部に刺突による短斜線文を施文する。10・12は壺の胴部上半部の破片。11は、鉢の胴部破片である。13は鉢の胴上半部の破片。口縁下端部の一部が残存し、外方に突出する。14は、壺の底部近くの胴下半部の破片。15は、壺の底部破片で、外表面が剥離している。16は平底の壺の底部破片。17は、高坏の坏部破片で、口縁部は直立し、端部は面取りされている。18は、比較的大型の高坏の脚部破片と考えられ、内面には円盤充填を何わせる粘土の貼り付け痕が残る。19は、高坏の脚部の破片で、脚裾に凹線文が4条巡り、上部には未完通の矢羽根状透かしが施される。20も高坏の脚部の破片で端部を欠損する。

以上の出土土器は、いずれも中期後葉～後期前葉の時間幅の中で捉えられる。

また、埋土上部とSP-720周辺から炭化物片が出土している。炭化物片の中には約1cm四方のやや大きめの炭化材が数点みられる。

以上の他に、切り合い関係にあるSK-732と帰属が曖昧になった遺物がある（図167・168）。これらも、弥生後期前葉までの時期幅で捉えられる。

出土遺物の検討から、SK-725は弥生後期前葉の土壤と考えられる。

SK-732

B区南端のDI-31区に位置する。SK-725と切り合う。遺構の切り合いに気づかず調査を進めたが、底面の高さが違うことから、別遺構としてSK-732とした。掘り形の50cmほどしか残っておらず、SK-725に切られると思ったが、確定はできなかった。SK-666・684、SP-683・715に切られている。底面はほぼ平坦である。

搅乱部の壁面で埋土を確認した。埋土は、黒褐色砂質土で、炭化物片が点々と混じる。

遺物は、SK-725と一緒に調査したため、SK-732に帰属する遺物は明確でない。取り上げ状況から、SK-732に伴う可能性が高い遺物を図167・168に図示した。図167-1は、壺の口縁部破片で、口縁端部を上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。2は、壺の肩部破片で、頸部の付け根に低いベルト状の突帯を貼り付ける。3は、壺の口縁部破片で、端部は外方にわずかに摘み出す。4～6は壺の胴上半部の破片。4は口縁屈折部の内面に浅い段状の沈線が巡る。5は口縁屈折部の少し下方に突帯を巡らせる。6は、頸部の付

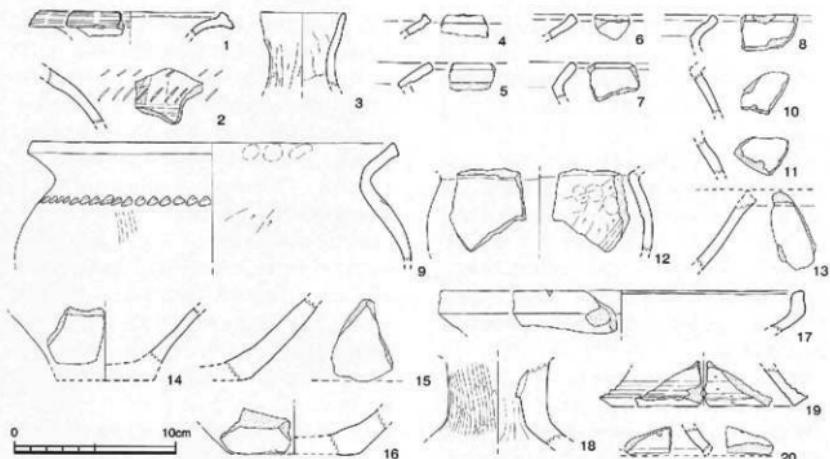


図166 B区SK-725出土遺物実測図（縮尺1/3）

け根に指頭による刻目を施した突帯を貼り付ける。7は平底の蓋の底部片。図168-1は緑色片岩の剥片である。

出土土器は、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。SK-725との切り合い関係からも、SK-732は当該期の土器と考えられる。

SK-733

B区南部のDI-31・32区のSC-730の床面で確認した。掘り形は判然としていない。浅い土盤で、SC-730の壁面の崩れ土部分である可能性もあるが、埋土の質が若干異なるので、SK-733とした（図121）。SC-729・730・SK-739に切られる。

埋土は、黒褐色砂質土で、砂性が強い。埋土aに分類できる。

遺物は出土していない

埋土の特徴と切り合い関係から、弥生後期前葉以前の土器と考えておきたい。

SK-735

B区南端のDI-31区に位置する。南北方向に25cm程の掘り形ラインが確認されたのみで、形状については不明（図121）。深さは17cm。SK-690・705・713に切られる。

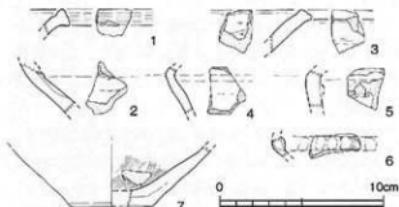


図167 B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図1（縮尺1/3）

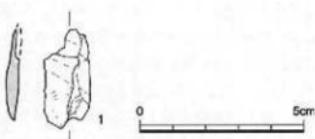


図168 B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図2（縮尺2/3）

埋土は、暗褐色砂質土と黄褐色砂質土の不定形の塊が混じりあう。埋土aに分類できる。径1～3mmの砂

縛が含まれる。

埋土中から弥生土器の壺の肩部破片が1点出土しているだけである。

切り合い関係と埋土の特徴から、SK-735は弥生時代中期後葉～後期前葉の遺構と考えておく。

SK-739

B区南部のDI-31・32区の調査区塙沿いで出土した。遺構の大半は調査区外にのびる。調査段階にはSK-705としていたが、遺構番号が他の遺構と重複していたことに気づき、SK-739に変更した。一辺3mほどの隅丸形の土壤を考える(図162、図版30)。SK-697、SP-674・696・708に切られ、SP-698・SK-733を切っている。深さは33cmを測り、底面は緩やかに中央部に向かって低くなる。

埋土は、灰褐色砂質土を主体とし、小指先大の黄褐色や明黄褐色の砂質土塊が大量に混じる。

SK-735からは100点以上の弥生土器が出土している(図169)。埋土の上部～中部と下部に分けて取り上げている。埋土でも下部から出土した遺物は図169-4～7・10・15・16、上部～中部出土のものは1・3・8・9・11～13・17である。

出土した遺物の接合関係を見ると、9はSK-739を切るSK-697出土の破片と接合する。また、13は直接的な切り合い関係ないSK-705出土の破片と接合関係にある。

埋土下部出土の図169-4は、壺の肩上半部の破片で、外面には刷毛目工具の小口部を押捺して短斜線文を巡らす。5は、壺の肩部～底部の破片で、平底。6は、壺底部付近の破片である。7・10は、壺の口縁部破片。7は内溝するタイプ、10は口縁端部を拡張して端面に2条の凹線文を施す。15は平底の壺の破片。16は、高坏の脚部破片で、外面上部に7条の沈線文、下部に矢羽根状透しが施される。この他、図化していないが、平底の底部破片、ミガキ調整を施す小片8点、刷毛目調整を施す小片4点ほか約50点の肩部破片が出土している。7・10・15・16は弥生中期後葉～後期前葉に比定でき、他も同じ時間幅で捉えられるものである。

埋土上部～中部出土の図169-1は、壺の頸部破片で、屈曲部外面に幅広で低い突帯を貼り付けて刻目を施す。3は壺あるいは壺の小破片。8は、壺の口縁部破片で、口縁上面がやや内溝する。9は、壺の口縁部～肩部上半の破片である。口縁部の内外を横ナギ調整した結果、口縁端面が凹線状に窪む。11・12は、壺の肩

部上半～口縁部下半の破片。13は、壺の肩部下半の破片で、外面には煤が付着し、下半部は被熱に伴う表面の剥落が目立つ。17は高坏の脚部付近の破片。1は弥生中期後葉～後期、8・9は中期後葉～後期初頭、11～13は中期後葉～後期前葉、17は後期前葉に比定できる。図示したもの以外に、端面に凹線文を施す壺の口縁部破片、壺の口縁部破片、柳状工具による刻目を施す肩部破片、ミガキ調整が施される肩部破片7点、肩部小片約50点が出土している。

SK-739上面のⅢ層部分から出土した遺物として、SK-739に伴うと考えた壺の肩部破片(図169-2)、壺あるいは鉢の口縁部破片(図169-14)がある。2は、頸部の付け根には刺突文が施文される。14の口縁端部は面取りされる。ともに弥生後期中葉に比定できる。

この他、埋土中から、小指先大の不定形の炭化物片が出土している。

以上、埋土下部の出土遺物は弥生中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えられるので、SK-739は弥生後期前葉の遺構と考える。

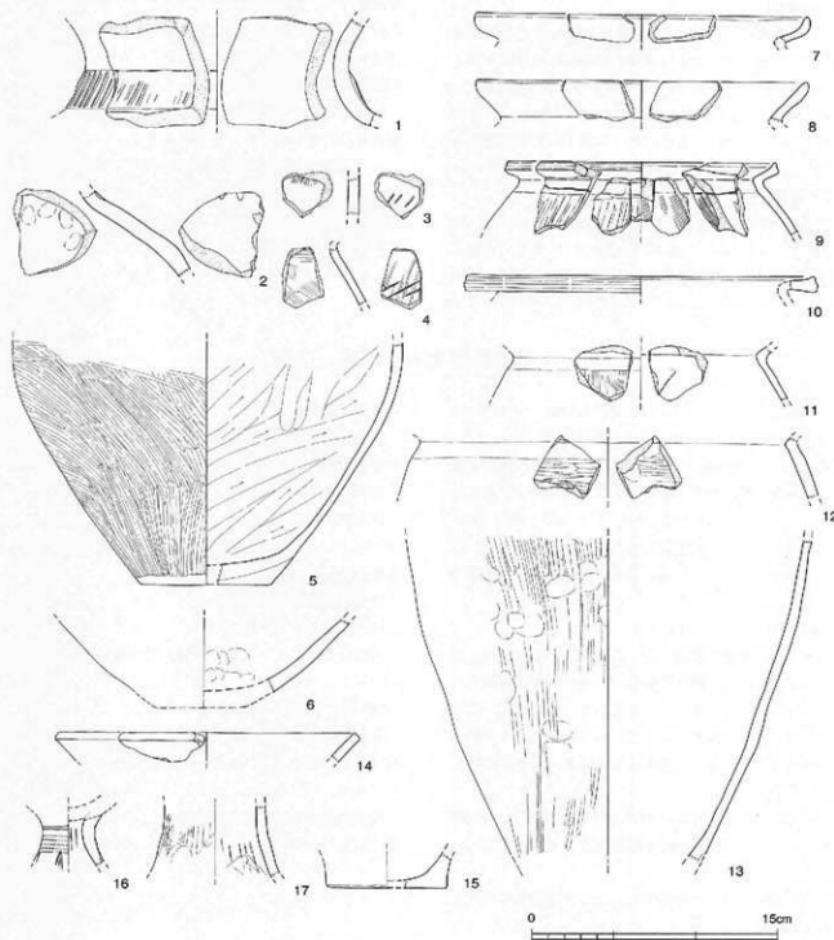


図169 B区 SK-739出土遺物実測図（縮尺1/3）

6 炭化物集積

SX-669

B区南端のDI-31区で、Ⅲ層を精査しながら掘り下げていく過程で、径5cm未満の角張った炭化物片や土器片が、約50cm四方にわたって広がる状況を確認した。掘り形ラインなどは認められず、SX-669として遺物の取り上げや記録化を進めた。IV層上面でも掘り込みを伴った遺構は確認できなかったので、掘り形があつてもⅢ層中に収まるものと考えられる。

SX-669では、弥生土器片が約30点出土している（図170-1～3）。1は、壺の口縁部破片で、「く」字形に折れる口縁で、端部を上方に摘み上げる。2は、壺の

肩部破片で、外面に刷毛目工具の小口部を押捺した短斜線文が巡る。3は、壺の肩部破片で、頸部との境には強い横ナデ調整が施されて凹む。いずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SX-669周辺の土を水洗選別した。長辺1cm、幅4mmほどの炭化した木材片などがある。

出土遺物は弥生中期後葉～後期初頭のものであるが、SX-669の下部で出土したSC-670が弥生後期前葉に位置づけられることから、後期前葉以降の遺構と考えられる。

7 立柱痕跡をもつ柱穴・小穴

B区では多くの小穴が出土している。その中で、SP-608・626・656・683・715・716・723・724・731・737では、立柱痕跡を確認できた。しかし、周辺に掘立柱建物や柵列などを構成する柱穴や杭穴はみられない。これらに、SP-607・609・611・637・659・661・702を加えて、代表的な柱穴・小穴として報告する。この他の小穴については、巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SP-607（図171、図173-1）

SC-606の床面で検出した。長径74cm、短径70cm、深さ12cmの梢円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は確認されていない。埋土は埋土aに分類でき、上下の①・②層とともに、黒褐色砂質シルトで、径2mm大ほどの角張った小砾を多く含む。②層の方が①層より黒みが強い色である。

埋土中から、弥生後期前葉の壺の口縁部破片1点（図173-1）を含む、壺や壺の肩部破片5点が出土している。

出土遺物と埋土の特徴から、弥生後期前葉の小穴と考えておく。

SP-608（図171）

DH-38区で出土した。SC-605を切る。径42～45cm、深さ15cmの円形掘り形をもち、北東より径19cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の

②層は、黒褐色砂質シルトで、砂砾が多く混じる。

遺物は出土していないが、埋土に砂砾が多く混じる特徴と、切り合い関係から古墳後期の遺構と考えた。

SP-609（図171）

DH-38区に位置する。東半部は搅乱で破壊され、SC-605を切っている。径56cm、深さ10cmの円形の掘り形をもつ。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。②層は、①層に比べて茶色みをおびる。

遺物は出土していないが、切り合い関係から古墳後期と考えられる。

SP-611（図171、図172）

B区北半部のDH-39区に位置する。西半部は搅乱で破壊され、南半部はSD-604・610に切られ、全形は不明である。残存径46cm、深さ2.5cmの掘り形をもつ。

埋土上部から29点の遺物が出土している。多くは近現代の瓦片や陶磁器・土器片である（図172-1～11）。

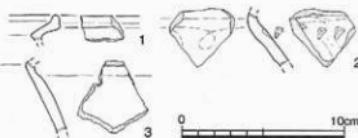


図170 B区 SX-669出土遺物実測図（縮尺1/3）

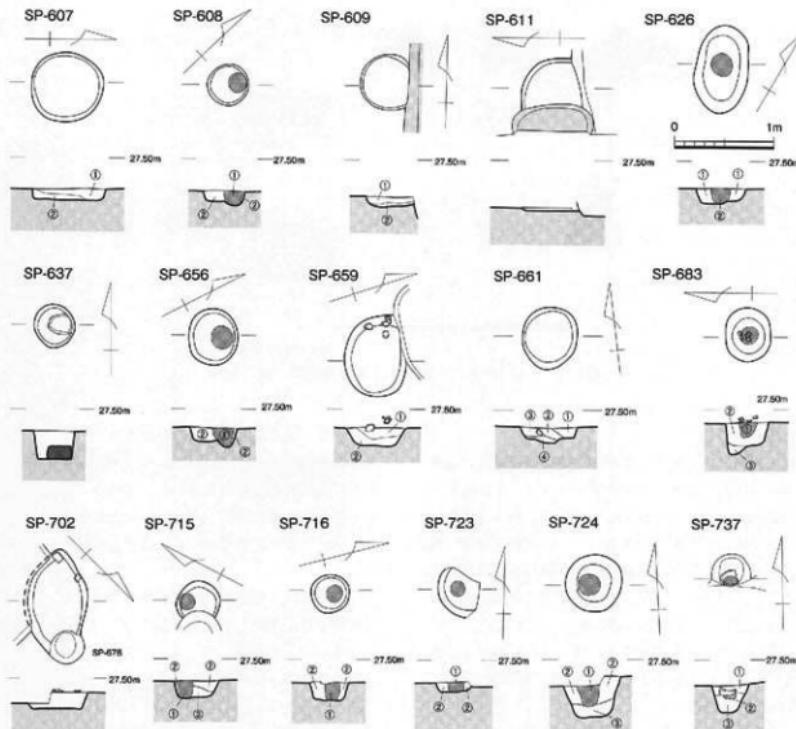


図171 B区 SP-607・608・609・611・626・637・656・659・661・683・702・715・716・723・724・737遺構実測図（縮尺1/50）

1・2は、須恵質土器の壺または甕の腹部破片で、いずれも古代の遺物である。3は、備前焼の壺の口縁部破片。口縁端部は丸く折り曲げられ、玉縁状を呈する。4は、古代の土師器皿の底部破片。6は、陶器の鉢の口縁部破片で、口縁部内面に突帯が巡る。5・7・8は擂り鉢。5は陶器、口縁端部を外方に拡張する。7・8は備前焼。7は、口縁部片で端面に2条の凹線が施され、内面下半部に擂り目が施される。8は、胴部破片で、内面に7条1単位の擂り目が施される。9は、陶器製の人形で、胴部は中実。10は陶器の蓋。天井部に直径約2cmのつまみをもつ。11は陶器の壺口縁部片。

端部は面取り気味に丸くおさめられる。他に、赤色質岩の剥片と、鉄滓1点が出土している。

SP-611は、出土遺物から近世・近代に下る遺物がある。しかし、切り合い関係からは古墳後期以前と考えられる。

SP-626（図171、図174-3～6）

B区のほぼ中央部のDH-35・36区で出土している。長径90cm、短径53cm、深さ16cmの長楕円形の掘り形をもち、中央部で径19cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡にあたる①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、小石や砂礫が非

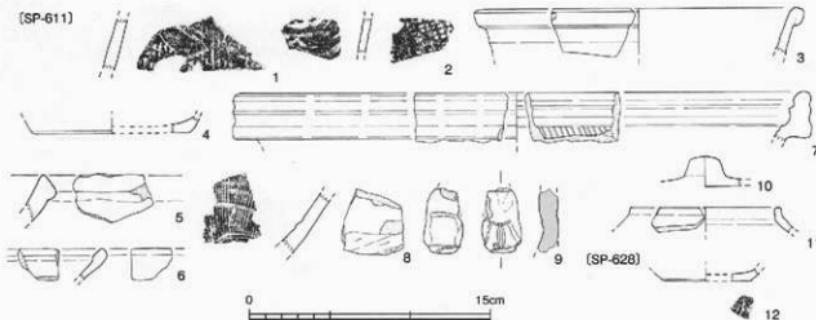


図172 B区SP-611・628出土遺物実測図（縮尺1/3）

常に多く混じる。

出土遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部破片13点がある。4点を報告する（図174-3～6）。3は弥生土器の壺の肩部破片、4は甕の底部に近い胴下半部の破片、5は鉢の肩部破片である。いずれも弥生中期～後期のものである。6は口縁部が短く伸びる土師器の甕である。古墳後後に比定される。また、②層から近代の瓦片、弥生土器の甕の小片が出土している。

埋土の特徴は、黒褐色であり埋土aに分類できるが出土した近世の遺物があるので、近世の柱穴と考える。

SP-637（図171）

B区中央部のDH-36区に位置する。径40～43cm、深さ28cmの歪な円形の掘り形をもつ。

埋土は砂礫が多く混じる灰褐色シルトで、埋土cに分類できる。底面に礎板と考えられる長辺25cm、最大幅25cm、厚さ11.6cmの扁平な花崗岩が据えられている。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から、古代以降の柱穴である可能性が高い。SP-637の北側には、近世と考えられるSB-743が存在する。掘立柱建物を構成する柱穴には、SP-637同様に根石が据えられている。このことから、調査区西側にかけて、SP-637を伴った掘立柱建物が展開していると考えられる。

SP-656（図171、図173-3～5）

B区南端のDH-31・32区に位置する。SC-670を切る。径50～58cm、深さ19cmの梢円形掘り形をもつ。径20cmの立柱痕跡をもつ。

立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質土で、径2cmほどの

小石が2・3点混じる。また、径1cm大のにぶい黄褐色砂質土塊が点々とみられる。①層の先端部は尖っており、杭状の柱が打ち込まれたと考える。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土がうすい縞状となって混じる。①・②層ともに埋土aに分類できる。

②層からは、弥生中期の甕の胴部破片2点、壺の胴部破片1点が出土している。しかし、小片で、図示できなかった。この他、埋土として取り上げた遺物に、弥生土器の壺や甕の胴部破片約10点がある。その中で3点を報告する（図173-3～5）。3は、長頸壺の頸部～肩部の破片で、弥生中期～後期に位置づけられる。4は、壺の頸部小片で、頸部と肩部との境に突帯が巡っていたが、剥離・欠損している。弥生中期後葉～後期前葉。5は、壺の肩部破片で、弥生後期前葉～中葉に比定できる。

出土遺物と埋土の特徴、SC-670を切っていることから、弥生後期前葉～中葉の柱穴と考える。

SP-659（図171、図173-6）

B区南半部のDH-32区で出土したSK-662に切られ、SK-695を切る。掘り形は、長径84cm、短径65cm、深さ19cmの長円形で、底面はほぼ平坦である。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。下部の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が比較的多く混じり、全体に明るい土色となっている。

埋土から弥生土器の壺や甕の胴部破片約10点が出土しているが、図化できるものはない。上面のⅢ層部分

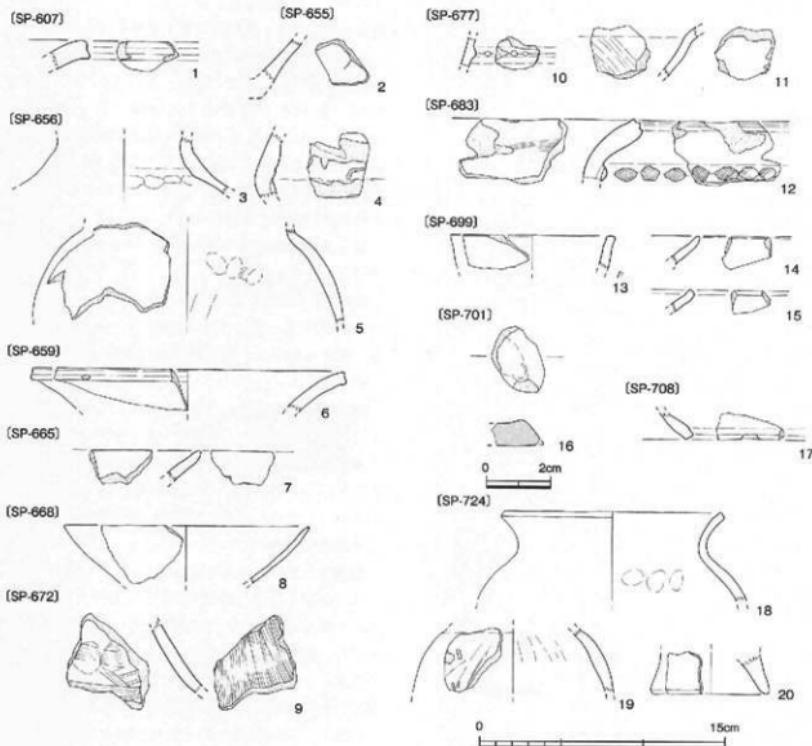


図173 B区SP-607・655・656・659・665・668・672・677・683・699・701・708・728出土遺物
実測図(縮尺1/3、2/3)

からも、弥生土器片3点が出土しており、2点を報告する(図173-6)。6は、口縁端面と下端部を同時に強く横ナデするため端面に3~4条の凹凸が生じている。また、弥生土器の甕の底部が出土したが、SC-670から出土した破片と接合する(図115-28)。

出土遺物と切り合い関係から、SP-659は弥生後期中葉～古墳中期の遺構と考えられる。

SP-661(図171)

B区南半部のDH-32区で、SC-670の埋土上面を精査する過程で検出できた。径54cm、深さ15cmの楕円形の掘り形をもつ。

埋土①層は、黒褐色砂質シルトで、少量のにぶい黄褐色砂質土が混じる。②層は、にぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルトの小指先大の塊が点々と混じる。③層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が少量混じる。④層は、にぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルトの径1cm大の塊が点々と混じる。

埋土から、弥生土器の壺や甕の胴部片4点が出土している。いずれも弥生中期～後期。しかし、弥生後期中葉に位置づけられるSC-670を切ることから、弥生後期前葉以降の小穴と考える。

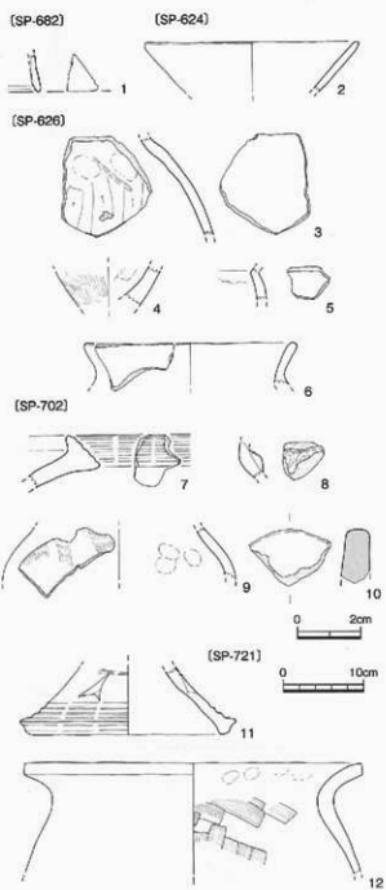


図174 B 区 SP-624・626・682・702・721出
土遺物実測図 (縮尺1/3, 2/3)

SP-683 (図171、図173-12)

B区南端のDI-31区に位置する。SK-684・725・732やSP-715を切る。長径55cm、短径46cm、深さ24cmの長梢円形の掘り形をもち、径17cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質土で、炭化物の

小片がごく少量混じる。掘り形壺土の②層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

遺構検出面の上部のⅢ層から、弥生中期～後期の壺の胴部6点、壺4点などが出土している。いずれも小片で、壺1点を図化できるにすぎなかった(図173-12)。12は、「く」字形に外反する口縁部で、口縁端面に2条の凹線文が施される。頭部の付け根には突帯が貼り付けられている。突帯には平織りの布を巻いた指頭を押し当たる刻目が巡る。

切り合い関係と出土遺物から、SP-683は弥生後期前葉以降の柱穴と判断した。

SP-702 (図171、図174-7~10)

B区南半部のDI-31区に位置する。SP-678に切られる。残存長辺80cm。最大幅62cm、深さ16cmの長梢円形の掘り形をもつ。

埋土は、径2~3mmの砂礫が多く混じる暗褐色砂質土で、灰白色砂質土・黄褐色シルトが含まれる。

埋土から、40点近くの弥生土器や土師器の破片が出土している。ただし、下部遺構の埋土との違いが明瞭でなかったため、本来下部遺構に伴う遺物を含んでいる可能性も残る。

図化できたのは4点の遺物である(図174-7~10)。7は、弥生土器壺の口縁部破片で、端部を上下に拡張し、口縁端面に5条の凹線文を施す。8は、壺の肩部破片で、頭部の付け根に突帯を貼り付け、指頭で刻目を施す。9は、弥生土器の鉢の肩部破片。10は、土製品で、大半を欠損するが、端部の一部のみが残存する。この他に、SK-693から出土した古墳中期に比定される壺の胴部破片が出土したが、SK-693出土の破片と接合した(図148-10)。

以上から、SP-702は古墳中期の小穴と考える。

SP-715 (図171)

B区南端のDH・DI-31区で出土した。SP-683に切られ、SK-725・SK-732を切る。径44cm、深さ18cmの円形の掘り形をもち、中央北より径16cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が薄く縞状に混じる。掘り形壺土の②層は黒褐色砂質土、③層は暗灰色砂質土である。

埋土から、弥生中期～後期と考えられる壺や壺の胴部破片3点が出土している。

切り合い関係と出土遺物から、SP-715は弥生後期の柱穴と考えられる。

SP-716 (図171)

B区南端のDH-31区に位置する。SK-725と一緒に調査を進めたため、混乱がある。SK-732を切り、SC-670に切られる。径39cm、深さ18cmの円形掘り形をもち、径16cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

掘り形埋土である③層から、縱方向にヘラミガキを施した壺の胴部破片1点、刷毛目調整を施した壺の胴部小片が1点出土している。

出土遺物や切り合い関係から、弥生後期の柱穴と考えられる。

SP-723 (図171)

B区南部のDH・DI-31区で出土した。SK-725とSP-687に切られる。掘り形の1/4ほどしか残存しないが、径17cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

埋土中から、弥生土器の壺や壺の胴部破片3点が出土した。切り合い関係から、弥生後期の遺構と考える。

SP-724 (図171、図173-18~20)

B区南半部のDH-32区に位置する。SC-670・SK-695の下部で検出した。径56~58cm、深さ42cmの楕円形の掘り形をもつ。

埋土①層は、黒褐色砂質シルトで、径2cm前後のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。立柱の抜き取り後の流入土である。底面から、立柱痕跡の径は20~22cmと推定できる。②・③層は掘り形埋土。②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が混じる。③層は、にぶい黄褐色砂質土で、少量の黒褐色砂質土の小塊が点々と混じる。

埋土から、弥生土器の壺や壺の破片が16点出土している。3点を報告する(図173-18~20)。18は、壺の口縁部～肩部の破片で、口縁端部に面取りを施す。弥生後期中壺～後葉に比定できる。19は、壺の肩部破片で、頸部の付け根には凹みが巡る。外面及び内面上部には板状工具によるケズリ調整が施される。20は、壺の上げ底片で、弥生中期後葉のものである。

調査当初はSP-724がSC-670に切られると考えていたが、整理作業の段階でSP-724出土土器に弥生後期後葉に下るもののが含まれていることを確認した。

SP-724がSC-670に切られているとすれば弥生後期前葉以前の位置づけとなり、出土遺物と離断が生じることになる。

SC-670埋土出土遺物の中に土師器が見られることから、SC-670埋土中には未確認の掘り込みが存在したと想定されるため、本来はSP-724がSC-670埋土を掘り込んでいたと考えられる。そのため、SP-724は弥生後期後葉の遺構と考えておく。

SP-737 (図171)

DI-31区に位置する。調査段階では、SP-684としていたが、遺構番号が重複しているの気づき、SP-737に変更した。南半部は擾乱で破壊されている。径40cm、深さ28cmの円形の掘り形をもち、径15cmの立柱痕跡を確認できた。埋土①層は、暗褐色砂質土で、灰白色の径1mm前後の砂礫が混じる。立柱痕跡である②層の上部にみられることから、SP-737廃棄後に流入した土層と判断した。暗褐色砂質シルトである。掘り形埋土の③層は、径1mm前後の砂粒が混じる暗褐色砂質土で、不定形の明黄褐色土塊が多く混じる。

①層から出土した弥生土器は、SK-739出土の破片(図169-5)と接合する。SP-737が廃絶した後に流れ込んだものである。③層からは、外面にヘラミガキ調整を施した壺片、炭化物片が数点出土している。

出土遺物から、弥生中期～後期の遺構と考えられる。

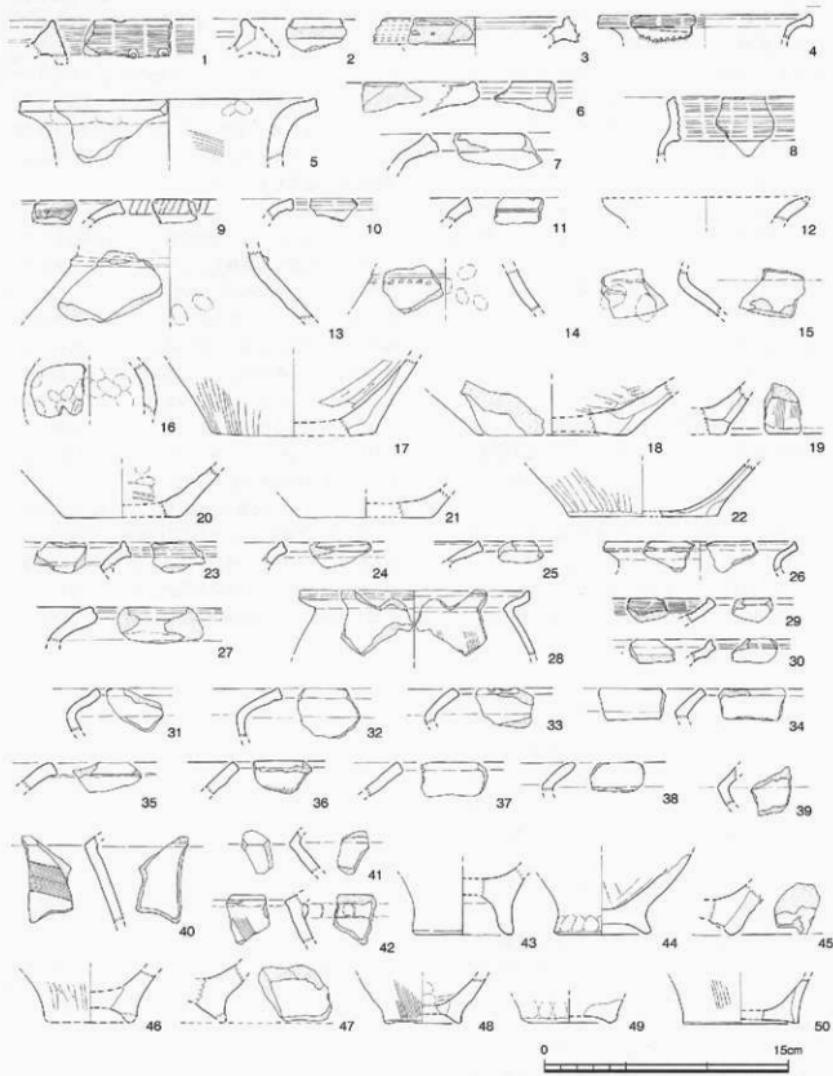


図175 B区Ⅲ層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

8 III層出土の遺物

B区では、北部のDH-38・39区と、南部のDH-DI-31・32区でIII層が部分的に分布する。このIII層を掘り下げ中にも遺物が出土した。とくに、南部では掘り形ラインを検出できていないものの、炭化物や土器片が多くみられ、遺構埋土である可能性が高い。III層は、1mグリッドを設定し、III層下部で遺構検出できたものについては、個々の遺構の報告を行う中で報告を行った。以下では、その他のIII層から出土した遺物を報告する。

III層出土の遺物は、大半が弥生土器であるが、古墳時代の土師器や須恵器、古代・中世の遺物が少量混じ

る。

図175-1~50、図176-1~22は弥生土器である。図175-16はB区北端部、他は南端部で出土している。

図175-1~10は壺口縁端部片である。1は、口縁端面に浅い凹線文が9条巡り、端部下端に円形刺突が施される。3・4は、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す。5~7の口縁端部は上下に拡張される。8の直立した口縁部外面に凹線文が6条施される。吉備地方によく見られるものである。9は、口縁端部を上方に拡張し、端面に斜線文を施す。11・12は壺あるいは壺の口縁部片である。

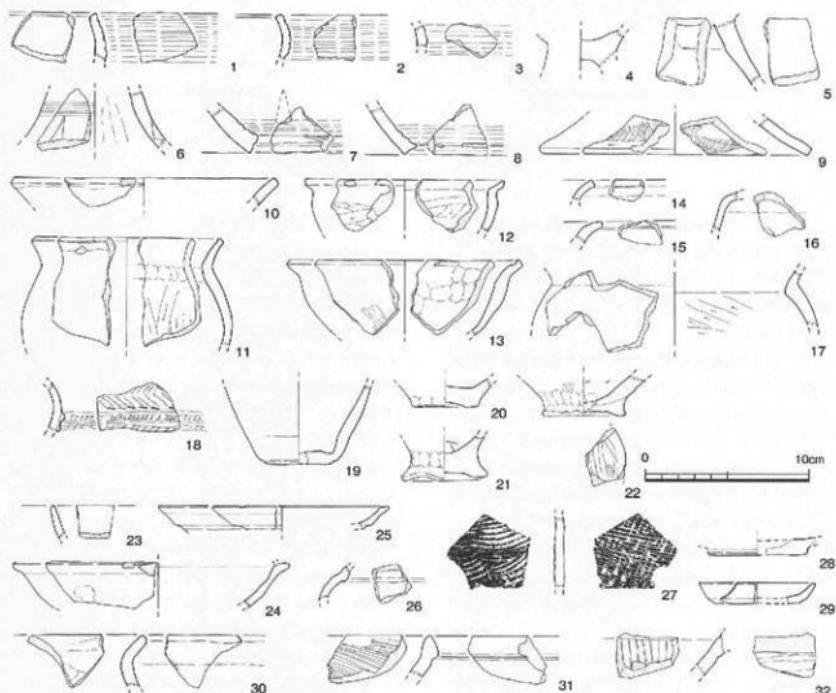


図176 B区III層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

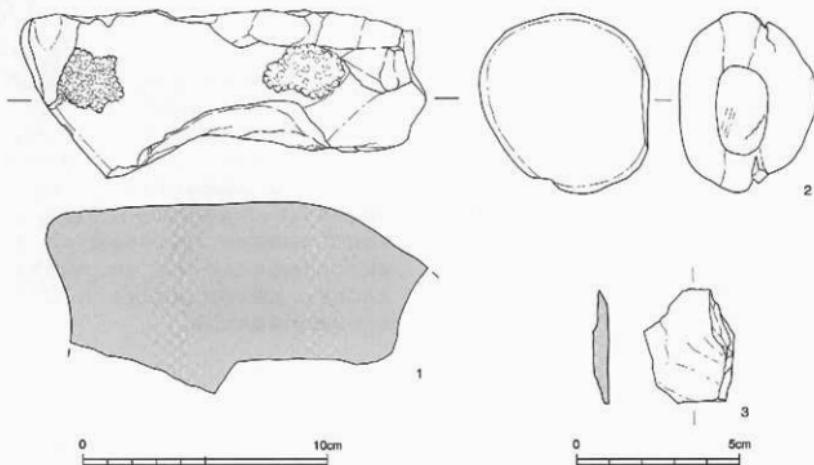


図177 B区Ⅲ層出土遺物実測図3 (縮尺1/2、2/3)

13~16は壺の肩部および胴部破片である。13は外面に突帯を貼り付ける。14は、外面に沈線を1条巡らし、下方に刷毛目工具の小口部を押捺して短斜線文を施す。16の外面には、指頭痕が明瞭に残る。土師器の可能性も残る。

17~22は壺の底部。17は中央がやや張り出す不安定な底部。18はわずかに上げ底を呈する。19・21・22は平底。20は平底だが安定感を欠く。

23~50は壺である。23~38は口縁部の破片。23・24の端面には凹線文が巡る。25・26も口縁部破片で、口縁端部を上方に拡張する。27の口縁端面は凹線状に窪む。28~30も口縁端部を上方に摘み出す。32・35は、強いナデ調整によって口縁下端部がやや突出する。34は「く」字形の口縁部をもち、頸部内面に明瞭な稜が生じている。36・37は、口縁端部を面取りし、38は尖りぎみにおさめる。

39は頸部~肩部の破片。40は胴上半部の破片。41は壺の頸部~肩部の破片。内面に明瞭な稜が巡る。42は胴上半部の破片。頸部の付け根に押圧文が施された突帯を貼り付ける。

43~50は、壺の底部の破片。いずれも上げ底であるが、43のように脚台底座を呈するものや、50のように平底に近いものがある。

図176-1~9は高壺である。1~3は壺部破片で、外面には凹線文が巡る。4は壺部の破片、5~9は脚部の破片である。6の外面には浅い沈線が6条巡り、下部には未完通の矢羽根状透かしが施される。7・8の外面には、幅広の凹線文が施された後、矢羽根状透かしが穿孔される。

10~19は鉢。18は脚台付き鉢の脚部破片。外面には刻目を施した突帯が2条巡る。突帯上には、棒状浮文が貼り付けられる。突帯上部には、貝殻施文による刺突文が羽状に施され、刺突文と突帯との間には、突帯整形時に付着した爪痕跡が巡る。中国地方によく見られる器形だが、胎土は在地産と考えられる。19は、平底で、外底面に草木類の付着痕が残る。20~22は、小型の壺あるいは鉢の底部破片。いずれも上げ底座である。22の外底面にはヘラミガキ調整が施されている。

古墳時代以降の遺物は極端に少ないが、須恵器や土師器、備前焼などがある。

23~28は須恵器。23・24は壺身の破片。25・26は甌。25の口縁端部内面には段が巡る。26は焼成不良品である。27は壺もしくは甌の胴部破片。28は、壺の底部破片で、外底面にヘラ切り痕が残されている。須恵器は、いずれも調査区南部から出土している。23~27は古墳中~後期、28は古代。B区南半部では、掘立柱建物や土塙・柱穴などの古墳中~後期の遺構があり、これらの遺構に関連する遺物と考えられる。

29・30は土師器である。29は復元径7cm。器高1.3cmの皿。口縁端部を尖り氣味におさめる。30は「く」字形を呈する古代の甌の口縁部破片である。31・32は擂り鉢。31は陶器製、32は備前焼製である。

石器・石製品には、砂岩の台石（図177-1）、砂岩の磨石（図177-2）、緑色片岩の剥片（図177-3）がある。

以上の他に、調査区中央部を南北に縱断する擾乱溝やI層から、弥生土器や須恵器・土師器、近現代の陶磁器・瓦などがコンテナ（54cm×38cm×14cm）2箱分出土している。そのうち5点の弥生土器を掲載している（図版47）。⑩・⑪は甌の口縁部片である。⑩の口縁端面には2条1単位で「ハ」字形に斜線文を施す。⑪は拡張した口縁端面に凹線文を3条施す。⑫・⑬は甌の口縁部片。⑭は鉢の口縁部片である。

VI まとめ

1 古代～中世

A区では、自然流路のSR-400が埋没した後、その谷状の窪地を利用して、水田の開田・經營と廃絶が繰り返されていることを明らかにできた。最上層の水田であるII-2-②(上層水田)層では、微高地部分を含めたA区全域が水田化されている。II-2-②(上層水田)層が廃絶されるまでの層序は、以下のように整理できる。

SR-400③層：自然流路SR-400の円礫から構成される中州堆積物

SR-400②層：中州の間を埋める流水による堆積物

SR-400①層：SR-400に恒常的な流水がなくなり周囲から流れ込んで堆積した土層

II-2-⑥層：SR-400が埋積された谷状の窪地での下層水田の開田と經營

II-2-⑤層：下層水田を廃絶させた洪水堆積

SD-208・209：II-2-⑤層を切り込む溝(水田層が伴うものと考えられるが、上層のII-2-④層の耕作で削平されたと判断した)

II-2-④層：中層水田の開田と經營

II-2-③層：中層水田を廃絶させた洪水堆積

II-2-②層：微高地を含めたA区全域での上層水田の開田と經營

II-2-①層：上層水田を廃絶させた洪水堆積
SR-400に恒常的な流水がある時期を示す②・③層や、流水がなくなりSR-400を埋積する①層からは、多くの弥生土器とともに、古墳後期、奈良時代、平安時代の遺物が出土している。したがって、SR-400は弥生時代から古代後半の自然流路と考えられる。また、II-2-⑥(下層水田)層～II-2-①層から出土する遺物は、弥生時代～古墳時代の遺物もあるが、古代後半～中世前期の遺物が大半を占める。当該期に水田の開田と廃絶が繰り返されることになる。

加えて、A区南半部の微高地では掘立柱建物や横列、土壙などが営まれ、さらに畠跡と考えられる犁による耕作痕跡を検出した。これらの時間的な関係を整

理し、有機的な遺構の配置関係を把握するためには、まず出土遺物の時間的変遷を検討する必要がある。

(1) 出土遺物の年代的位置づけ

A区では、古代後半～中世前期を、層序的にSR-400②・③層→SR-400①層→II-2-⑥(下層水田)層→II-2-⑤層→SD-208・209→II-2-④(中層水田)層→II-2-③層→II-2-②(上層水田)層→II-2-①層の9時期に区分できた。こうした層序・遺構で明らかにできる時期区分を基準として、出土遺物の時間的関係を明らかにしていく。

ただし、出土遺物のほとんどは破片である。全形が把握できるものは、土師器皿・塊・坏、黒色土器、瓦器、白磁碗がある。ここでは、比較的出土量がある土師器皿・塊・坏、黒色土器で型式分類を行い、層序関係からその型式変遷を把握する。出土量が少ない瓦器、白磁碗などは、出土層準から時間的な位置づけを試みる。また、SD-208・209はII-2-⑤層を切り込む溝であるが、発掘調査時にはII-2-⑥層上面で検出した。そのため、II-2-⑤層の遺物の中には、本来SD-208・209に埋積された遺物も含まれていることとなった。この点についても留意して検討を進めた。

1) 土師器

(a) 皿

土師器皿は、体部のひらき方、法量、外底面に残る切り離し痕から、HSの略号を冠し、HS①～HS⑥に分類する。

HS①：全体の形状は須恵器皿に近く、出土量はないが、口径10.5～12cm。底径8～9cmを測り、後述するHS②～HS⑥と比べて口径が大きな平皿形である。体部下半で緩やかに反転するもの(図178-1)や、体部が直線的にひろがり口縁部をわずかに反転させるもの(図178-2)がある。

HS②：体部下半が膨らみ、中位で反転して緩やかに口縁部へと続く。HT①と比べて小形で、口径8.5cm前後、底径5.5～6.5cmを測る。外

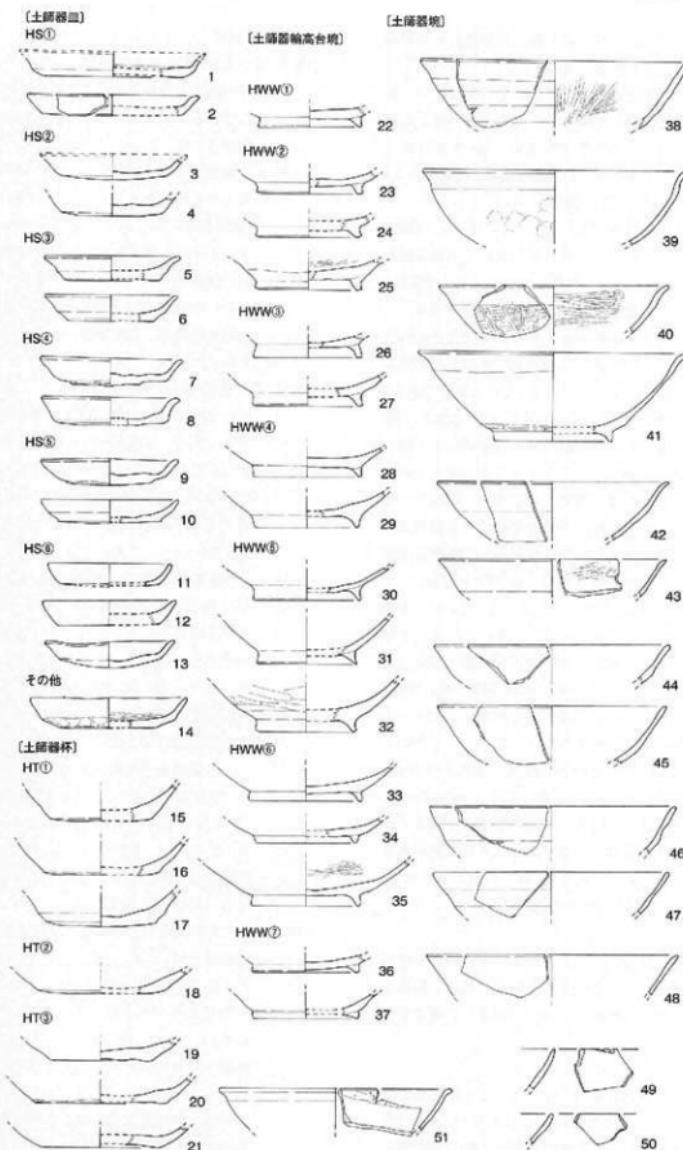


図178 文京遺跡18次調査A区出土の古代～中世の遺物分類1（縮尺1/3）

底面に回転ヘラ切り離し痕が残るものがある（図178-3・4）。

HS③：体部下半が内溝し、中位で稜をつくってさらに内溝してのびる。底部の切り離し方法を確認できる資料はない。HS②よりも一まわり小形で、口径8cm前後、底径5~5.5cmを測る（図178-5・6）。

HS④：体部全体が内溝しながらひろがり、口縁部付近を短く折り曲げる。回転ヘラ切り離し痕を外底面に残すものがある。口径8.5cm前後、底径6.5cm前後（図178-7・8）。

HS⑤：体部下半が膨らみ、中位からほぼ直線的にのびる。外底面に回転糸切り離し痕が残るものが含まれることが、大きな特徴である。口径7~8cm前後、底径5~5.5cmと、HS③と同じく小形品である（図178-9・10）。

HS⑥：体部全体が膨らみをもちらがら立ち上がるものの、ほぼ直線的にのびるものがある。外底面の切り離し方法を確認できる資料はない。法量的には、口径7.5cm、底径6cm前後の小形の皿である（図178-11~13）。

以上、HS①はSR-400③・①層～Ⅱ-2-⑥（下層水田）層から出土している。HS②はⅡ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-③層、HS③はSD-208・209、HS④はSD-208・209～Ⅱ-2-④（中層水田）層、HS⑤はSD-208・209～Ⅱ-2-①層、HS⑥はⅡ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-③層から出土している。したがって、HS①→HS②→HS③+HS④+HS⑤→HS⑥の変遷を読み取ることができる（以下、→は古→新、+は同時併存をあらわす）。この他、後述するⅡ-2-③層出土の黒色土器皿と共通する形状を持つ例がある（図178-14）。Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土しており、HS⑥と同時期のものと考えられる。

(b) 塚

土器器塊は、輪高台がつくものと、平高台とも呼ばれる円盤高台がつくものの2者がある。以下、輪高台のものにHWW、円盤高台のものにHWEの略号を冠して分類する。

i) 輪高台塊

輪高台がつく塊は、遺物の中でもっとも出土量が多いが、全形が明らかなものは1点しかない。そこで、体部の膨らみと高台部の形状で分類し、同じ層位から出土している体部破片を検討して、全体の器形を復元

しながら、HWW①～HWW⑧を設定した。

HWW①：太い断面三角形の高台部である（図178-22）。HWW①はSR-400③層から出土しているが、確実に塊と考えられる体部破片はみあたらない。

HWW②：断面台形の高台部で、高台の先端部が外方へ小さく摘み出したように跳ね上がる（図178-23～25）。HWW②はSR-400③層～Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土している。SD-208から出土している、全体が丸みをおび、口縁部を横ナデするためにわずかに外反する体部（図178-38）がつくものと考える。

HWW③：断面台形の高台部をもつ（図178-26・27）。HWW③はⅡ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土している。これらの層準でみられる塊の体部破片の中で、丸みをおびた体部で、口縁部周辺で反転して緩やかに外反するもの（図178-39）がつくと考える。

HWW④：HWW③と同じく断面台形あるいは細長い長方形の高台部をもつが、高台先端が丸く収められる。そのため、高台が三角形状になったものがある（図178-28）。また、外方に膨らみ気味の高台もある（図178-29）。全形が明らかな資料がある。HWW③の体部と比べて、体部の丸みがなく、口縁部周辺の反転も緩やかな体部がつく（図178-40・41）。また、HWW④はⅡ-2-⑤層～Ⅱ-2-①層から出土しており、Ⅱ-2-⑤層から出土している、反転部が中位にある体部破片も、HWW④のものと考える（図178-42・43）。

HWW⑤：HWW④と比べて、高台の先端が横ナデで細長く高い（図178-30～32）。HWW⑤は、Ⅱ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土している。とくに、Ⅱ-2-④（中層水田）層からみられる、口縁部周辺や体部中位の反転がほとんど目立たない体部がつくものと考えられる（図178-44・45）。この他、口縁部先端を短く強く屈曲させる体部も考えられる（図178-51）。

HWW⑥：HWW①～HWW⑤と比べて、体部下

半が緩やかにひろがり、見込み部分が広い。高台は、先端が丸く收められた台形・三角形で、小さく低いものが目立つ（図178-33～35）。外底面に回転糸切り離し痕が残るものが含まれる。外面に指頭痕が多く残り中位が窪む体部がつくものと考えられる（図178-46・47）。

- HWW ⑦：先端が丸く收められた断面三角形や台形の高台で、HWW ⑥と同じく小さく低い。体部下半の立ち上がりが緩やかで、外底面が膨らむ（図178-36・37）。体部中位の窪みがほとんど目立たず、ほぼ直線的にひろがる体部がつくものと考えられる（図178-48）。
- HWW ⑧：II - 2 - ②（上層水田）層～II - 2 - ①層から出土した破片の中に、口縁部がわずかに内湾して外形が膨らむものがある。高台部は不明であり、壺の可能性も残すが、両黒土器塊にも同様な形状をもつ体部破片があるので、壺に分類した（図178-49・50）。

輪高台をもつ塊の中で、HWW ①は SR-400 ①層、HWW ②は SR-400 ①層～II - 2 - ④（中層水田）層、HWW ③は II - 2 - ⑥（下層水田）層～II - 2 - ④（中層水田）層、HWW ④は II - 2 - ⑤層～II - 2 - ①層、HWW ⑤は SD-208・209～II - 2 - ①層、HWW ⑥は II - 2 - ④（中層水田）層～II - 2 - ①層、HWW ⑦は II - 2 - ③層～II - 2 - ①層、HWW ⑧は II - 2 - ②（上層水田）層～II - 2 - ①層から出土している。したがって、HWW ①+HWW ②→HWW ③→HWW ④→HWW ⑤→HWW ⑥→HWW ⑦→HWW ⑧の変遷を読み取れる。

ii) 円盤高台塊

円盤高台をもつ塊は、輪高台塊と比べて出土量は少ない。底部から胴部下半の形状、高台部の厚み、底部の切り離し方法から、HWE ①～HWE ④に分類できる。

HWE ①：体部が底部からほぼ直立して、体部下半で屈曲して、膨らみをもつ体部に仕上げる。体部下半の屈曲部には外表面に稜線がはしる（図179-1・2）。

HWE ②：底部からほぼ直立して体部が立ち上がるが、HWE ①と比べて、体部下半の屈曲は緩やかである（図179-3・4）。

HWE ③：HWE ①・②の底部側面にみられる立ち

上がりが緩やかになり、体部下半の屈曲もほとんど目立たず、外形的には緩やかに内湾しながら体部が立ち上がる。口縁部は直線的にのび、口縁先端の内面を横ナデしてやや尖り気味に仕上げる（図179-5）。

HWE ④：厚い円盤状の高台が貼り付けられた形状をもつ。外底面に回転糸切り離し痕が残るもののが含まれる（図179-6・7）。

以上の中でも、HWE ②は SR-400 ①層～II - 2 - ④（中層水田）層、HWE ③は II - 2 - ⑥（下層水田）層～SD-208・209、HWE ④は II - 2 - ④（中層水田）層～II - 2 - ②（上層水田）層から出土しており、HWE ②→HWE ③→HWE ④の変遷を読み取れる。また、HWE ①は、出土量は他と比べて少なく、II - 2 - ⑥（下層水田）層と SD-208・209から出土しているが、体部下半の屈曲が明確である点から、HWE ②との共存、もしくは先行する型式と考える。

(c) 壺

出土資料は破片がほとんどで、全体の形状がわからないものばかりである。そこで、外底面の切り離し方法と底部から体部へのひらき具合から、HT ①～HT ③に大きく分類しておく。

HT ①：外底面に回転ヘラ切り離し痕が残る。全体に丸みをおびた体部がつくと考えられる（図178-15～17）。

HT ②：外底面に回転ヘラ切り離し痕を残すが、HT ①と比べて体部下半がひらき、HT ③に近い体部形状をもつ（図178-18）。

HT ③：外底面に回転糸切り離し痕が残る。体部下半が大きくなり（図178-19～21）。

HT ④は SR-400 ③・①層からみられ、II - 2 - ⑥（下層水田）層、II - 2 - ⑤層から出土した壺でも確認できる。HT ②の確定な出土例は、II - 2 - ⑤層～SD-208・209のものである。これに対して、HT ③は、II - 2 - ④（中層水田）層と II - 2 - ③層で出土している。

2) 黒色土器

黒色土器には、内黒土器と両黒土器がある。器種的には壺と皿がみられるが、皿は数点が出土しているにすぎない。ここでは、黒色土器塊を、内黒土器にKUW、両黒土器にKRWの略号を冠して、型式分類を行った。

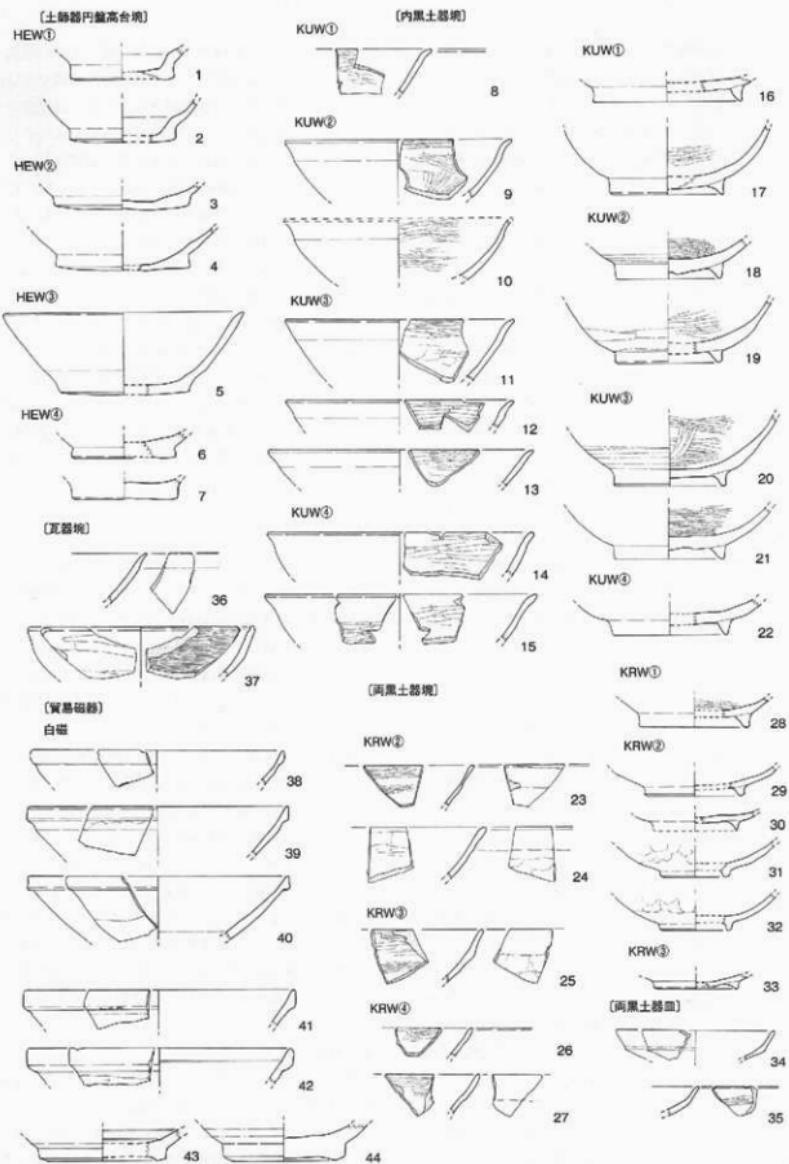


図179 文京遺跡18次調査A区出土の古代～中世の遺物分類2 (縮尺1/3)

i) 内黒土器塊

高台部と体部の形状から KUW ①～KUW ④に分類する。

KUW ①：断面三角形の輪高台をもつ。高台部の先端がやや尖り気味で、外方に反る（図179-16・17）。丸みをおびて口縁部はわずかに折り曲げる体部（図179-8）がつく。

KUW ②：断面台形の輪高台をもち、丸みをおびる体部がつく（図179-18・19）。土師器の輪高台塊のHWW ③と同じく、口縁部付近で稜線をもって強く反転して曲ぐ体部（図179-9・10）がつくと考える。

KUW ③：断面台形の高台部の先端が丸く收められる（図179-20・21）。土師器の輪高台塊のHWW ④と同じく、体部の丸みがなく、口縁部周辺の反転が緩やかな体部（図179-11～13）がつく。

KUW ④：高台部の形状はKUW ③と共通するが、KUW ①～KUW ③と比べて、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。体部は口縁部付近の反転が曖昧である（図179-14・15）。

内黒土器塊の中で、KUW ①はSR-400①層～II-2-⑥（下層水田）層、KUW ②はII-2-2-⑥（下層水田）層～II-2-3-③層、KUW ③はII-2-⑤層～II-2-2-②（下層水田）層、KUW ④はSD-208・209～II-2-2-③層そしてII-2-①層から出土している。KUW ①→KUW ②→KUW ③+KUW ④の変遷を追うことができる。

ii) 両黒土器塊

内黒土器の塊と同様に、高台部と体部の形状から、KRW ①～KRW ⑤を設定できる。

KRW ①：高台部の破片が1点しかない。断面台形の輪高台がつく。内黒土器塊のKUW ①～KUW ③と同じく、体部は丸みをおびるものと考えられる（図179-28）。

KRW ②：KUW ④と同じく、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。高台は断面台形や、先端が丸く收められた三角形である（図179-29～32）。体部は、中位に指頭痕が集中して残り、この部分が窪む（図179-29～32）。体部の形状は、土師器の輪高台塊HWW ⑥と共に通する。

KRW ③：KRW ②と同じく、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。しかし、高台は小さく低い断面三角形や台形で、外底面が膨らむ。土師器の輪高台塊HWW ⑦と同じく、ほぼ直線的にひろがる体部がつくと考える（図179-25）。

KRW ④：体部の破片しかないが、KRW ③と比べて体部が直線的にひろがるもの（図179-26）や、土師器塊のHWW ⑧と同じく口縁部がわずかに内湾するもの（図179-27）がある。

両黒土器塊のKRW ①はSD-208・209、KRW ②はII-2-4（中層水田）層～II-2-3-③層、KRW ③はII-2-3-③層、KRW ④はII-2-2-②（上層水田）層～II-2-1-①層から出土しているので、KRW ①→KRW ②→KRW ③→KRW ④の変遷を読み取れる。

3) 土師器と黒色土器の各型式による時期区分

以上、土師器皿・塊・壺、黒色土器の内黒土器塊・両黒土器塊の型式分類と、出土層位から読み取れる型式変遷を整理した。層位ごとの型式の出土状況を図180にまとめた。ただし、この中で、土師器壺HT ③は外底面に回転糸切り離し痕が残る。これに対して、土師器皿では、外底面を回転糸切り離すHS ⑤がSD-208・209からみられる。そこで、HT ③はSD-208・209の段階まで遡る可能性が高い。

また、SR-400①層～II-2-2-②（上層水田）層では、土師器の輪高台塊、内黒土器・両黒土器の塊の各型式の出現層序から、以下のような組み合わせの変遷を読み取れる。

SR-400①層：HWW ①+ HWW ②+ KUW ①
II-2-6（下層水田）層：HWW ③+ KUW ②
II-2-5層：HWW ④+ KUW ③
SD-208・209：HWW ⑤+ KUW ④+ KRW ①
II-2-4（中層水田）層：HWW ⑥+ KRW ②
II-2-3層：HWW ⑦+ KRW ③
II-2-2-2（上層水田）層：HWW ⑧+ KRW ④

このように、層位関係とともに、土師器の輪高台塊、内黒土器・両黒土器の塊の組み合わせからも時期を区分することができる。

4) 瓦器・貿易陶磁からみた年代観

A区では、出土量は少ないながら、瓦器・貿易陶磁

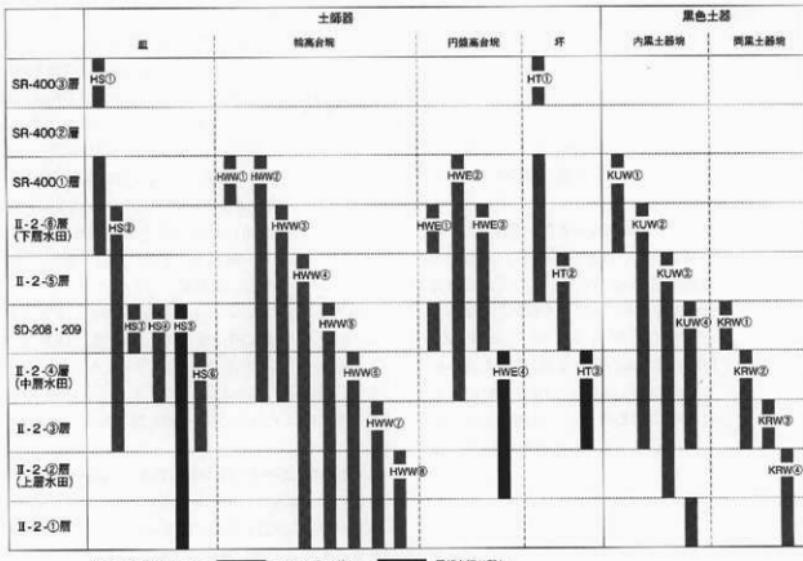


図180 各型式の層序における出土状況

器が出土している。これらの年代観に沿って、層序関係とともに整理できた土器器・黒色土器の時期区分の年代的な位置を考えてみたい。

瓦器については、SD-208・209とII-2-④(中層水田)層から3点の瓦器塊が出土している。その中で、SD-209から出土した瓦器塊は、横ナデによって口縁部付近が反転しながら外反する(図179-36)。口縁部先端は小さく丸く取められている。和泉型系の瓦器塊で、12世紀初頭～前半に位置づけられる。また、II-2-④(中層水田)層出土の瓦器塊は、縦やかに内溝する体部で、口縁部内面に沈線が巡る。12世紀前半の楠葉型の瓦器塊である。こうした共伴の瓦器塊の年代観にしたがえば、SD-208・209の段階にあらわれるHWW⑤+KUW④+KRW①を12世紀初頭～前半、II-2-④(中層水田)層からみられるHWW⑥+KRW②を12世紀中頃に比定できる。

貿易陶磁器の中で出土量が多いのは、白磁碗である。II-2-④(中層水田)層～II-2-①層から出土している。ただし、II-2-④(中層水田)層の白磁碗は体部の破片(図37-52)で、年代的な位置づけは難しい。

これに対して、II-2-③層～II-2-①層から出土した白磁碗は、玉縁口縁をもち、薄く長めの玉縁口縁をもつもの(図179-38～40)と、口縁部を折り返して厚く大きめの玉縁口縁をつくるもの(図179-41・42)の2者がある。前者は、白磁碗Ⅲ類に分類でき、II-2-③層～II-2-①層から出土している。後者は、Ⅳ類に分類でき、II-2-②(上層水田)層～II-2-①層から出土している。一方、II-2-③層とII-2-②(上層水田)層では、高台部の破片が、肉厚の器底で、幅が広く面取りされた高台がつき、白磁碗Ⅳ類に分類できる(図179-43・44)。さらに、II-2-②(上層水田)層から出土した青磁碗は、外面に蓮弁文を削り出し外面に飛雲文の一部が残る体部の破片である。龍泉窯系青磁碗のI・4類に分類できる。

松山地域では、以上の貿易陶器の白磁碗Ⅳ類と龍泉窯系青磁碗I・4類は、12世紀末～13世紀前葉に比定される和泉型瓦器塊Ⅲ・1・2類とともに出土することが確認されている。II-2-②(上層水田)層のHWW⑧+KRW④の組み合わせには、12世紀末～13世紀前葉の年代観を与えることができる。また、下

層のⅡ-2-④（中層水田）層でみられるHWW⑥+KRW②が12世紀前半に比定できるので、Ⅱ-2-③層のHWW⑦+KRW③は、12世紀後半と考える。

一方、SR-400①層～Ⅱ-2-⑤層を基準として設定した時期区分は、層序関係から11世紀以前といえる。しかし、現在、松山地域では10～11世紀の良好な資料に恵まれていない。とは言ても、年代観を考える定點となる資料として松山市石井幼稚園遺跡SD-1がある。土師器の壇や壺とともに、10世紀前に比定される近畿系の内黒土器壺が出土している。この資料では、土師器の壺には輪高台をもつものはみられない。また、円盤高台壺があるが、体部中位から口縁部が直線的にひろがる特徴をもつ。これに対して、今回調査のSR-400①層～Ⅱ-2-⑤層にみられる円盤高台壺HWE①～HWE③は破片資料しかないが、体部下半が丸みをおびている。石井幼稚園遺跡SD-1の円盤高台壺と比べて、時間的に後出のものと考え、HWE①～HWE③を10世紀後半～11世紀の時間幅で捉えておく。

以上、HWW①+HWW②+KUW①、HWW③+KUW②、HWW④+KUW③が示す時期を10世紀後半～11世紀、HWW⑤+KUW④+KRW①の組み合わせがみられる時期を12世紀初頭～前半、HWW⑥+KRW②を12世紀中頃、HWW⑦+KRW③を12世紀後半、HWW⑧+KRW④を12世紀末～13世紀前葉に比定できる（図181）。

（2）遺構の年代比定

1) SR-400の埋没と水田の開田・廃絶の時期

これまで検討してきた出土遺物の年代的位置づけに基づいて、SR-400が埋没する時期と、水田が開田・廃絶される時期を考えてみよう。まず、SR-400に恒常的な流水がなくなつて谷状の窪地へと変化する時期を示すSR-400①層からは、HWW①・HWW②・KUW①が出土している。しかし、前述のように、10世紀後半～11世紀の時間幅でしか捉えることができない。とは言ても、上層のⅡ-2-⑥（下層水田）層でHWW④やKUW③、Ⅱ-2-⑤層のHWW④やKUW③は同じく10世紀後半～11世紀の時間幅に比定され、HWW①+HWW②+KUW①→HWW③+KUW②→HWW④+KUW③の時間的な変遷をえることから、SR-400の埋没時期を10世紀後半頃と考

え、SR-400が埋積した谷状の窪地にⅡ-2-⑥（下層水田）層が11世紀になって開田され、その後11世紀代を通じて經營されたと考えておく。

SD-208・209は、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層が廃絶した後に開削された溝である。しかし、単独の溝ではなく、水田に伴う水路であり、周辺には水田域が広がっていたと考えられる。その耕作土層は、上層のⅡ-2-④（中層水田）層の耕作によって削平されたものと考えた。このSD-208・209では、HWW⑤・KUW④・KRW①の組み合わせがみられ始める、12世紀初頭に比定できる。また、SD-208・209の切り合い関係は、SD-209→SD-208である。12世紀初頭の比較的短い間に、2度にわたって水田の開田と廃絶が繰り返されたことになる。

Ⅱ-2-④（中層水田）層は、HWW⑥・KRW②の組み合わせから12世紀中頃に開田され、12世紀後半にHWW⑦・KRW③が出土するⅡ-2-③層の洪水層で廃絶される。さらに12世紀末～13世紀前葉のHWW⑧とKRW④が出土し始めるⅡ-2-②（上層水田）層が開田される。問題は、Ⅱ-2-②（上層水田）層の廃絶時期である。上層を覆う洪水層であるⅡ-2-①層から土した遺物は、他の層準と比べて少なく、下層からの混じり込んだ遺物も多い。そこで、特徴的な遺物として青白磁の合子蓋がある。13世紀代のものと考えられる。しかし、13世紀中頃に登場する口禿の白磁皿がみられない。そこで、Ⅱ-2-①層の洪水層の堆積時期は13世紀前半と考えておきたい。

このように、SR-400の埋没後から、Ⅱ-2-②層の上層水田が廃絶するまでを、以下のように年代比定できる。

SR-400の埋没：10世紀後半

Ⅱ-2-⑥層の下層水田の開田：11世紀

Ⅱ-2-⑤層による下層水田の廃絶：11世紀後半

SD-209の開削と水田の開田・廃絶：12世紀初頭～前半

SD-208の開削と水田の開田・廃絶：12世紀初頭～前半

Ⅱ-2-④層の中層水田の開田：12世紀中頃

Ⅱ-2-③層による中層水田の廃絶：12世紀後半

Ⅱ-2-②層の上層水田の開田：12世紀末～13世紀前葉

Ⅱ-2-①層による上層水田の廃絶：13世紀前半

2) 微高地上的遺構の時期比定

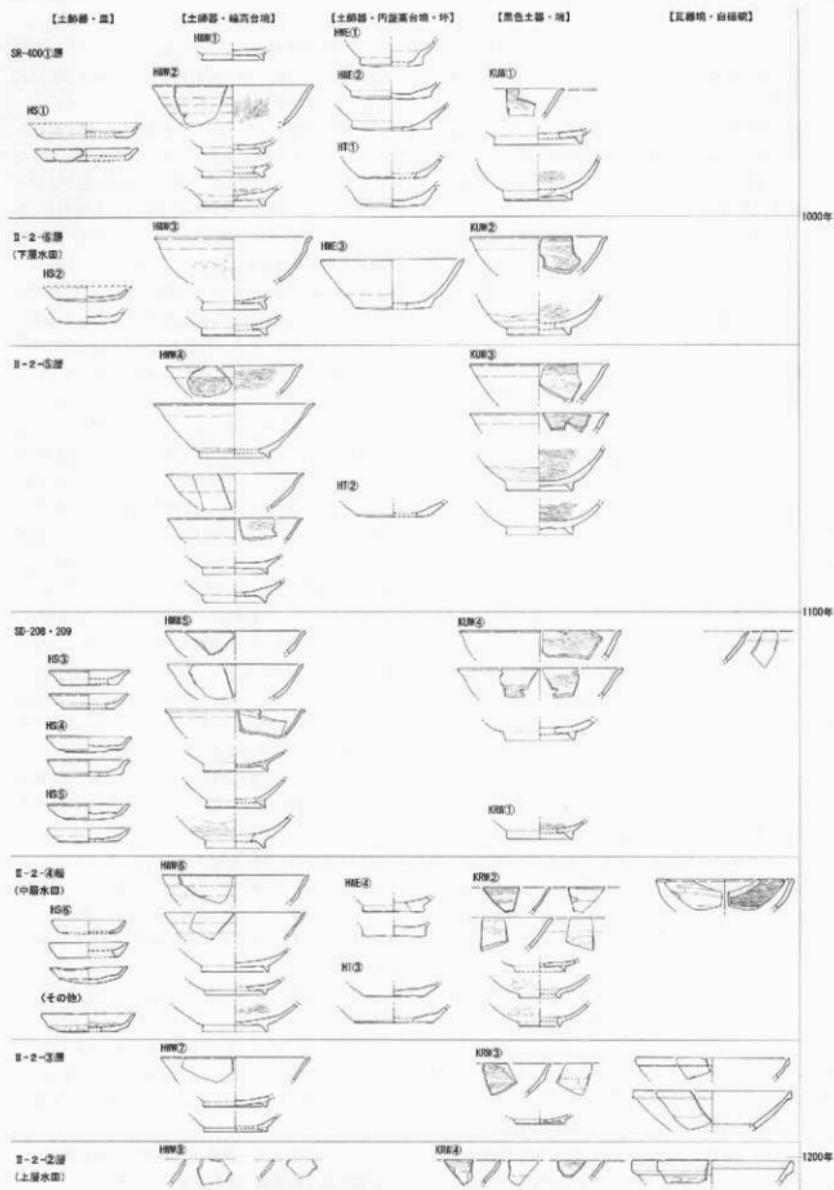


図181 古代後半～中世前期の土師器・黒色土器の変遷（縮尺1／5）

A区南半部の微高地上では、犁による耕作痕跡や、掘立柱建物・土塁などが出土している。これらも出土遺物や埋土の特徴から古代後半の遺構と考えられる。SR-400が堆積されて形成された谷状の窪地に営まれる水田と、どのような関係にあるかを考えてみよう。

i) 犁による耕作痕跡

まず、A区南半部の微高地上の犁による耕作痕跡と考えられる小溝群は、部分的に残存するII-2-②(上層水田)層の下半部(床土層)を除去した後にあらわれた。小溝群は短く途切れるが、畦畔を推定できるような帯状の途切れ部分は確認できず、畠跡と考えられる。また、小溝群を埋める埋土は、II-2-④(中層水田)層と同質である。埋土から出土した遺物は、土師器壺HT②もしくは③(図69-1)、輪高台をもつ土師器壺HWW④(図69-2)とHWW⑤(図69-3)、HWW⑥(図69-4)、そして瓦器壺の高台部破片がある。瓦器壺からは12世紀前半以前としかわからないが、もっとも新しい時期に比定できる土師器壺HWW⑥があり、II-2-④(中層水田)層と同時期のものと考えてよい。このように、層位関係と出土遺物から、12世紀前半には、A区北半部の谷状の窪地には水田(II-2-④、中層水田)、微高地上には畠(犁による耕作痕跡)が営まれていたことになる。

ii) 掘立柱建物

犁による耕作痕跡と考えられる小溝群を調査した後に、掘立柱建物や土塁などが確認できた。したがって、層位的には、これらはII-2-④(中層水田)層以前の遺構である。埋土はa・b・cに大別できる。埋土aは黒褐色系の砂質シルト。埋土bは、黒褐色系の砂質シルトを主体とし、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトが若干混じる。埋土cは、黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黄灰色砂質土・暗黄灰色シルト・灰黄色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体としたり、塊が混じったりする。埋土aの遺構からは、弥生時代中期後葉～後期初頭の遺物が出土しており、弥生時代の遺構と判断した。一方、埋土b・cの遺構から出土した遺物には古代後半のものが含まれる。

この中で、A区南東部のDS・DT-41区に位置するSB-415では、SP-460からHWE②に分類できる円盤高台の壇(図78-2)、回転糸切り離し痕を外底面に残す土師器皿HS⑤(図78-1)が出土している。したがって、SD-208・209が開削され、周間に水田域が営まれた12

世紀の初頭～前半に比定できる。また、ほぼ同じ場所には、SB-413・416が重複して営まれるが、SB-416はSR-400と重複する。そこで、SB-413(SR-400の埋没時期)→SB-416(II-2-⑥層の下層水田の開田時期)→SB-415(SD-208・209の開削と水田の開田時期)の時期ごとの変遷を推定できる。

A区南半部でもほぼ中央に位置するSB-417・419は、建物方向がほぼ共通し、同時に併存した建物群と言える。SB-419では、SP-526からHWW②に分類できる土師器壺(図85-1)が出土しているが、SB-417では、SP-477・480から回転糸切り離し痕を残す土師器皿(図82-1・4)がある。全体形は不明であるが、回転糸切り離し痕がみられる皿はHS⑤しかない。もっとも新しい時期の遺物と、建物方向が共通するSB-415も加え、SB-417・419はSD-208・209が開削され周間に水田域が営まれた段階の建物群と考えた。また、SB-419はSB-420と重複する。SB-420はSR-400と切り合う。したがって、SB-420は下層水田からSD-208・209が開削され周間に水田が営まれた時期の建物である可能性が高い。しかし、下層水田の時期に営まれたSB-416とは建物方向が異なり同時に併存は考え難い。そこで、SD-208・209の2条の水路の切り合い関係から、後出するSD-208と同時に併存する建物としてSB-415・417・419を捉え、SB-420は、先行するSD-209が開削される時期に比定した。さらに、SB-420の建物方向は、A区南西部のSB-421・423とほぼ共通し、これらは同時に併存した建物群と推定できる。

A区南半中央部のDV・DW-41区で出土したSB-424では、土師器壺の体部破片(図95-1)が出土している。輪高台をもつと考えられ、体部のひらき具合からHWW①～④の範疇で捉えることができる。ところで、SB-424は、SR-400の埋没時期に比定したSB-413・SD-208と同時に併存するSB-415・417・419・SD-209の時期のSB-420とは建物方向が異なる。比較的共通するのはSB-416である。そこで、SB-424をSB-416とともに、II-2-⑥層の下層水田の開田時期に比定しておく。そうなると、SB-424と重複するSB-418はSR-400の埋没時期と考えられる。

iii) 土壌

一方、土壤の中で、SK-407からは、HWW④に分類できる土師器壺の高台破片(図103-4)と、HWW⑤の高台がつくと考えられる体部破片(図103-2)などが出土している。したがって、SD-208・209が開削

された時期に比定できる。また、SK-425からは、土器の柱状高台土器（図103-6）と土鍋（図103-7）が出土している。柱状高台土器は、裾部が「ハ」字形にひらき、中空部が浅い。これと共通した形状をもつ柱状高台土器は、II-2-⑤層（図47-1）でみられる。そこで、SK-425はSD-208・209が開削された時期のものと考える。このようにSK-407・425は、出土遺物からSD-208・209が開削された時期に比定できる。ただし、SD-208かSD-209の時期に伴うかは判断できない。

A区南半中央部のDV-41区に位置するSK-401・408は、SK-401→SK-408→SP-571（SB-417柱穴）の切り合ひ関係をもつ。SB-417はSD-208・209が開削された時期の遺構であるので、SK-401をSR-400の埋没時期、SK-408を下層水田の時期と考えておく。A区南東部のDS-41区のSK-406は、SB-413・415・416と重複する場所に位置する。これらの掘立柱建物の時期比定と、上層の葦による耕作痕跡の小溝群がみられないことから、SK-406は中層水田と同時併存する可能性が高い。

この他、SK-404は、SB-423とごく近接する。SR-400の埋没時期、もしくはSD-208・209の時期の土壤としておきたい。

iv) 溝

A区西部のDV-42・43区で出土したSD-405は、SB-421と重複する。SB-421の比定される時期から考え、SR-400の埋没時期、もしくはSD-208・209の時期の遺構としておく。

v) 構列

構列SA-409は、その方向がA区の中でもSB-416・424の建物方向にもっとも近い。そこで、下層水田の時期の構列と推定できる。

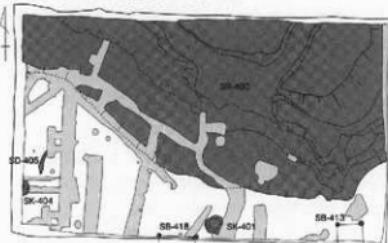
(3) 時期ごとの遺構の特性と変遷

以上の検討に基づき、A区における遺構の変遷を、水田の構造を含めて整理してみよう。

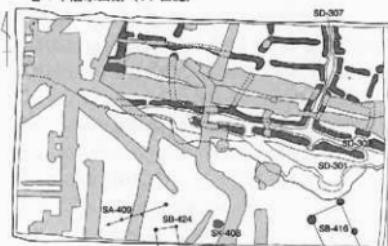
i) 10世紀後半～11世紀

A区北半部を流れるSR-400は、10世紀後半に恒常的な流水がなくなり、SR-400①層で埋積され、谷状の窪地に変化していく。その縁辺には、SB-413・SB-418、SK-401、（SK-404、SD-405？）が営まれる。SB-413・SB-418は、いずれも小規模な掘立柱建物で、この時期の集落の本体はA区の南側に展開していると考えられる。

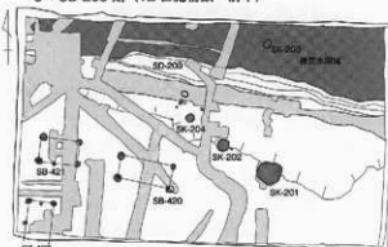
1 : SR-400 埋没期（10世紀後半）



2 : 下層水田期（11世紀）



3 : SD-209期（12世紀初頭～前半）



4 : SD-208期（12世紀初頭～前半）

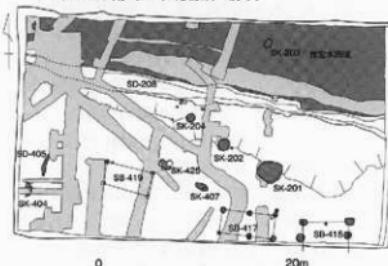


図182 文京遺跡18次調査A区の遺構変遷1（縮尺1/500）

11世紀には、SR-400を埋積する①層の最上部を利用して、II-2-⑥層の下層水田が開田される。SD-301を幹線水路とし、支線水路のSD-302が平行して開削され、SD-302から北に向かってSD-307が分岐する。SD-301では、DU-43区のSD-302との分岐点付近には堰が設けられていたと考えられる。また、DS-DT-42・43区で南側に拡張され、掘り鉢状の窪みがつくられ、DU-43区の水路幅が狭くなる地点にも堰を推定できる。こまめな用水管理が行われていることがわかる。こうした下層水田が經營されると同時に、微高地にはSB-416・424、SK-408、SA-409が営まれる。10世紀後半と同じく、集落の本体部分はA区の南側に展開するが、SB-416は、立柱痕跡が径22cmを測り、比較的大型の建物である。構列SA-409も加え、SB-416を中心建物として、小規模で簡易な建物であるSB-424が併設されている集落内の建物単位を読み取れる。

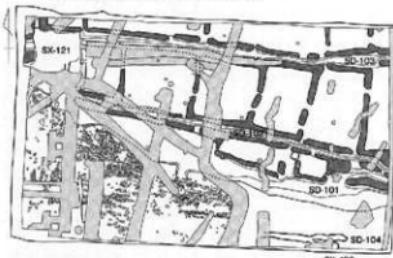
こうした11世紀に經營された下層水田と建物群は、II-2-⑤層が堆積することで廃絶される。II-2-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの黄褐色砂質土で構成される堆積物である。また、部分的にラミナが確認されるので、河川氾濫に伴う比較的緩やかな増水で堆積したものである。河川氾濫の分流がA区の谷状の窪地に流れ込み、下層水田が廃絶したものと考える。II-2-⑤層の堆積時期は出土遺物から11世紀代としか比定できないが、II-2-⑤層を切り込んで12世紀初頭を上限とするSD-208・209が開削されているので、11世紀後半期と考える。

ii) 12世紀

12世紀初頭には、谷状の窪地内にSD-208・209が開削される。周囲には水田城がひろがっていたと考えられるが、水田層は上層のII-2-④(中層水田)層の耕作で削平されている。水田城の範囲は、南側にSK-201・202・204などが位置していること、水配りから考えれば、SD-208・209より北側の谷状の窪地内にとどまっていた可能性が高い。

SD-208・209は重複しており、SD-209がまず開削される。SD-209に伴う微高地の遺構には、SB-420・421・423、(SK-407?)がある。また、谷状の窪地の落ち際のSK-201・202・204も考えられるが、SD-208・209のどちらに伴うかは明らかでない。微高地の掘立柱建物は、11世紀とは異なり、ほぼ東西・南北

1：中層水田期（12世紀中頃～後半）



2：上層水田期（12世紀末～13世紀前葉）

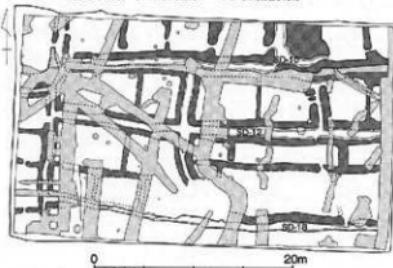


図183 文京遺跡18次調査A区の遺構変遷2(縮尺1/500)

北方向をとる。SB-420の立柱痕跡は18～25cmを測り、SB-423が17～20cmであること比べて大きく、SB-420を中心とする建物群の単位を捉えることができる。

SD-208に伴う遺構には、SB-415・417・419やSK-425、(SK-404・407、SD-405?)がある。SD-209に伴う建物群とほぼ同じ方向で建てられているが、A区の南東部に配置される。その中で、SB-415は、柱穴底面に礎盤の扁平砾を据えた建物で、径23cm前後の立柱痕跡をもつ。これに対して、SB-417・419の立柱痕跡は15～20cmしかない。前段階のSD-209の時期と同様に、比較的大型の建物を中心として、周囲に小規模で簡易の建物が付属する集落を構成する建物単位を見出せる。

以上のSD-208・209の埋土には、砂礫が多く混じり、上部にはラミナ層がみられる。下層水田と同様に、洪水によってSD-208・209のそれぞれに伴う水田とともに廃絶したものと推定できる。

SD-208・209を覆うII-2-④(中層水田)層からは、12世紀中頃に比定できる遺物までが出土している。SD-208に伴う水田が廃絶した後、ほとんど時間

を置かず II - 2 - ④層の中層水田が開田されたことになる。中層水田では、谷状の窪地への落ち際に、幹線水路である SD-101 が開削される。これと間隔をあけて SD-102・103 の 2 条の水路が併設され、その間に水田が区画される。SD-101 では一部に旺盛な流水の痕跡がみられるが、恒常に流水があるような環境は考え難い。また、SD-102・103 底面の堆積土の観察からも、豊富な流水があったとは言えない。水条件がかなり悪い水田である。それを解消するため、幹線水路である SD-101 の DU-42 区部分に堰をおき、A 区北西隅には水溜遺構 SX-121 が設け、少ない用水の効率的な利用が図られている。

水田とともに、A 区南半部では、犁による耕作痕跡と考えられる小溝群に示される畠跡が展開する。相対的に低い谷状の窪地には水田、微高地上には畠が営まれる景観を復元できる。

こうした II - 2 - ④層の中層水田は、洪水層である II - 2 - ③層が堆積することで廃絶する。II - 2 - ③層から出土した遺物でもっとも新しいものは 12 世紀後半に比定できる。

iii) 12 世紀末～13 世紀前半

中層水田を廃絶させた II - 2 - ③層の洪水層の上層には、II - 2 - ②層の上層水田が拓かれる。出土遺物から開田の時期は 12 世紀末と推定できる。上層水田は、前段階と比べると、A 区北半部の谷状の窪地だけではなく、南半部の微高地上にもひろがっている。また、谷状の窪地という地形的な制約から離れて、ほぼ東西方向にのびる SD-10・12・18 の幹線水路を平行して設け、その間に水田を区画する。谷状の窪地が埋積され、より平坦な地形に変化しているとは言っても、微地形の制約を離れて水田がひらかかれていることは、水田開発の画期として捉えることができる。

しかし、A 区の II - 2 - ②(上層水田) 層に伴う水路は、いずれも幅が狭く、幹線水路とは考えられない。微高地を含めて水田域を拡大するためには、A 区よりも南側の微高地上に幹線水路を開削する必要がある。

A 区から南へ 45m ほど離れた文京遺跡 15 次調査 7 トレンチの南端では、幅 5.5m ほどを測る SD-27 が出土している(図 8-2)。SD-27 は断面調査だけで、時期を比定できる遺物は出土していないが、18 次調査 A 区の埋土 c と同じく、黄灰色や暗黃灰色・暗黃灰色の灰色系の砂疊土で埋積されている。この 15 次調査 7 トレンチの SD-27 と同一の水路と考えられる溝が、18 次調査

B 区南端部で出土した SD-601 である。SD-601 は、最大幅 3.4m の水路で、少なくとも 3 条の水路が重複する。近世までの遺物が出土しているが、SD-601 を構成する水路の上限は 12 世紀末まで遡る可能性を指摘していくべきだ。

いずれにせよ、II - 2 - ②(上層水田) 層の調査では、12 世紀末～13 世紀前葉、道後城北遺跡群が位置する扇状地の扇央において、それまで谷状の窪地に限られていた水田域が微高地上まで拡大することを明らかにできた。こうした水田域の拡大は、松山平野を構成する扇状地の各所で見出せる。12 世紀末～13 世紀における土地開発の画期として捉えることができる。

(4) 小結

この上層水田が廃絶するのは、これを覆う洪水層である II - 2 - ①層から出土した遺物の年代比定から、13 世紀前半である。さらに、II - 2 - ①層の上層の II - 1 層も水田層で、その後も水田經營が継続されている。しかし、II - 1 層は近世～近代の水田層である。II - 2 - ①層は A 区のほぼ全域に堆積しており、SR-400 が埋没した谷状の窪地を含めて、周辺がほぼ平坦な地形面となり、その結果、洪水による堆積が少くなり、そのため、13 世紀後半以降の水田層は、より新しい水田の耕作によって削平され残存していない。

以上、A 区では、10 世紀後半に SR-400 がほぼ埋没した後、そこに形成された谷状の窪地に II - 2 - ⑥ 層の下層水田が開田される。その後、幾度もの洪水で水田の廃絶と開田が繰り返されている。ところが、12 世紀～13 世紀前半の間に、SD-208・209 に示される水田から II - 2 - ②(上層水田) 層まで、水田の開田と廃絶が非常に短いサイクルで繰り返される。11 世紀代の II - 2 - ⑥(下層水田) 層が比較的長い期間営まれ続いた水田であることとは対照的である。こうした頻繁な洪水と水田の開田の繰り返しは、II - 2 - ⑤ 層・II - 2 - ③ 層・II - 2 - ① 層に示される洪水が原因である。

この 12 世紀～13 世紀前半は、福井県の三方五湖における年縞堆積物の分析で明らかにされている西暦 820 ～1200 年の多雨期にあたる。地理学でも、古代後半～中世初頭には、瀬戸内沿岸の沖積平野で段丘(完新世段丘 II) が形成され、段丘面では洪水の影響が少なくなり、氾濫原面では洪水が頻発して大規模な自然堤防が形成され三角州が拡大することが指摘されている。

文京遺跡は、石手川が造る扇状地の扇央に位置するが、今回の18次調査A区で水田が確認されたのは、扇状地上で網目状に発達する谷状の窪地にあたる。こうした谷状の窪地には、洪水の度に分流が流れ込んだものと考えられる。出土遺物の検討から12世紀代に比定でき

るSD-208・209に示される水田からII-2-②(上層水田)層まで、水田の開拓と廃絶が頻繁に繰り返される要因として、こうした気候変動を考えることも可能である。

(田嶋)

2 古墳時代

今回の18次調査では、B区で古墳後期の堅穴式住居跡5棟(SC-605・SC-606・SC-741・SC-747・SC-748)、掘立柱建物3棟(SB-740・SB-744・SB-746)、溝2条(SD-603・SD-610)、土壙4基(SK-647・SK-662・SK-693・SK-697)が出土している。分布をみると、B区でも北端と南端に偏り、中央部では遺構が希薄となる(図184)。

B区の土層断面を観察すると、中央部では基本層序のⅢ層はみられず、Ⅳ層の砂礫層が馬の背状に高くなっていることがわかる(図9)。また、B区の西側の文京遺跡15次調査7トレンチ、17次調査1トレンチでは弥生～古墳時代の遺構が出土しているが、微地形は東から西に向かって次第に標高が低くなる。そのため、B区周辺はもともと周囲よりも高い地形面であったことがわかる。

前述したように、A区の調査から、12世紀末～13世紀前半以降、B区の周辺を含めた微高地に水田城が拡大することが明らかにされている。こうした水田開発に伴って土地改変が進み、もともと高い地形面であったB区周辺が削平され、弥生時代や古墳時代の遺構が破壊されたと考えられる。そのため、今回出土したB区の古墳時代の遺構は、北端部と南端部に偏った分布をみせることになる。

さて、B区で出土した遺構は、いずれも古墳後期の堅穴式住居跡や掘立柱建物である。文京遺跡では、古墳後期の堅穴式住居跡や掘立柱建物などの集落関連の遺構は、これまで文京遺跡5・12～17・20次調査区で出土している。さらに、城北団地西部でも中央の旧グラウンドにあたる12～17次調査区周辺と、その南東側の5・13・20次調査区周辺の2ヶ所に偏った分布をみせる。この2つの堅穴式住居跡・掘立柱建物群は、文京遺跡における古墳後期の集落を構成する2つの単位と捉えることができる。そこで、12～17次調査区周辺を北集落域、5・13・20次調査区周辺を南集落域と

呼んでおく。18次調査B区は、この中の北集落域の一画にあたる。

まず、B区では、調査区北端でSD-603・SD-610の2条の溝が出土している(図181)。SD-610は、東西方向にのび、幅35～45cmの溝である。SD-610と同様の形状をする溝は、文京遺跡12次調査SD-6、14次調査SD-47、16次調査A区SD-10、17次調査1トレンチSD-9・10、17次調査2トレンチSD-29がある。これらの溝は、切り合ひ関係や出土遺物から古墳後期に比定される。一跨ぎで飛び越えられる程度の溝幅であり、防御を意図したものではなく、集落域を区画する溝と考えられる。北集落域は、SD-610を始めとする区画溝で取り囲まれた集落単位である。

このSD-610北側の北集落域の外側に位置する地点では、SD-603が発見されている。SD-603は、南東方向から北西方向にのびる。B区西側の17次調査1トレンチ北端では自然流路SR-01が出土している。SR-01は、幅10m以上で、埋土は黒褐色砂質シルトに暗灰色細砂礫の小ブロックが多数混じる。SD-603の埋土も、茶褐色～黒褐色砂質シルトで、最上部には小さな角礫や粗砂が混じるやや灰色みをおびた茶褐色砂質シルトが堆積し、SR-01の埋積状況と類似する。さらに、SD-603とSR-01の位置関係から、同一の自然流路あるいは溝と考えられる。SR-01は、出土した須恵器などから古墳後期に埋没したと考えられており、SD-603出土遺物と年代的にも離れてはない。ただし、17次調査1トレンチのさらに西に位置する15次調査7トレンチでは、SD-603やSR-01に対応する遺構はみられない。このことから、SD-603は17次調査1トレンチの西側付近からさらに北西にのび、18次調査A区の谷状の窪地に流れ込むものと推定される。

一方、区画溝であるSD-610の南側にあたるB区北端では、5棟の堅穴式住居跡が出土した。北集落域を構成する堅穴式住居跡であるが、北集落域の中心部に

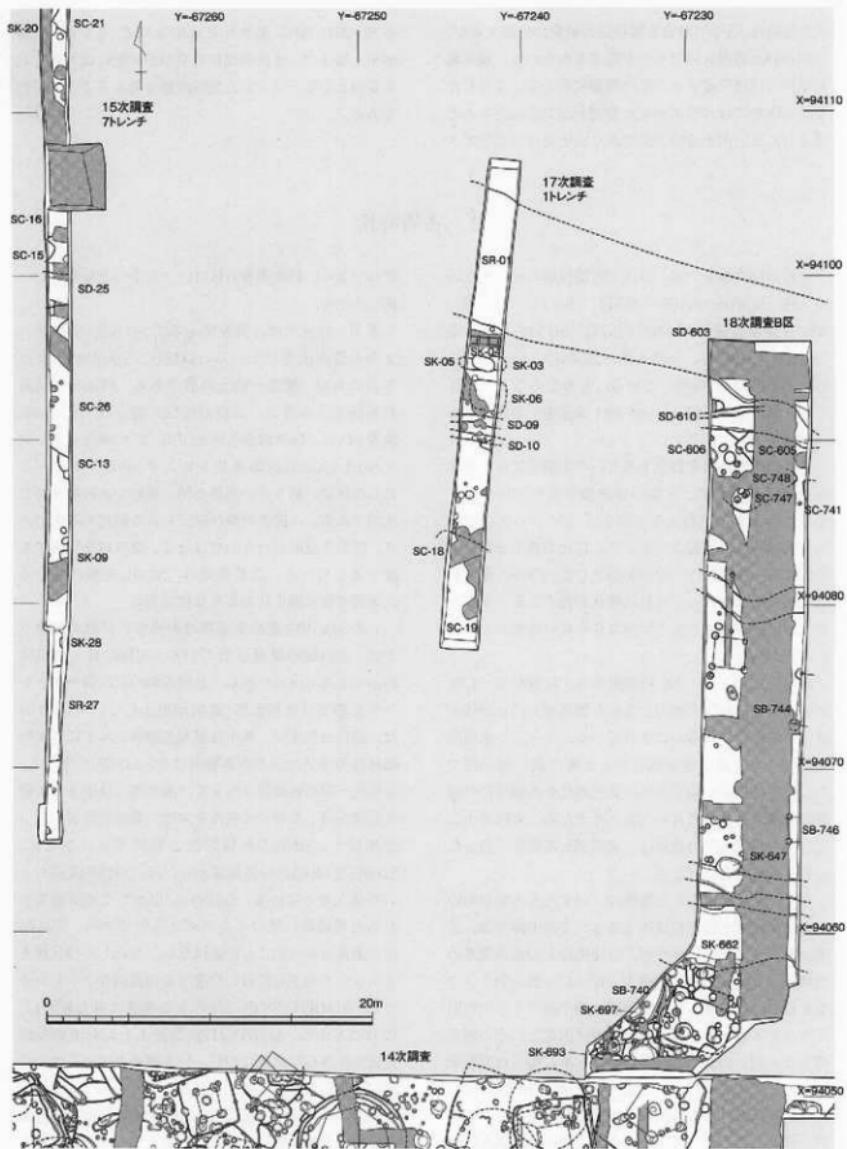


図184 文京遺跡18次調査B区周辺の古墳時代後期の遺構分布

あたる14次調査区の竪穴式住居が一辺5m前後のものであるのに対して、いずれも小形の方形竪穴式住居跡である。住居跡と言っても、納屋などの用途の建物であったと考えられる。B区北端は北集落域でも縁辺部にあたり、そうした集落域縁辺に小形の竪穴式住居跡が配置される景観を復元できる。

加えて、B区中央～南部では、掘立柱建物3棟(SB-740・SB-744・SB-746)が出土している。SB-744、SB-746は弥生時代～古墳時代の時間幅でしか捉えることはできないが、SB-740は梁行3間×桁行3間の建物である。SB-740については、切り合い関係、柱間から古墳後期の可能性が高いことを報告した。古墳後期

の文京遺跡では、掘立柱建物は1間×1間あるいは1間×2間、2間×2間の規模が一般的である。そのため、3間×3間であるSB-740は特異な建物であり、建物の用途が異なるものと考える。しかし、具体的な性格については、北集落域全体の構成と構造を明らかにした上で論議する必要がある。北集落域の中心部にあたる14・16次調査区の整理の過程で明らかにできるものと考える。ここでは、北集落域が区画溝で区画されていること、集落内における計画的な建物配置の可能性を示すにとどめておく。

(三吉)

3 弥生時代

今回の18次調査では、A区・B区ともに、弥生時代の遺構が出土している。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定され、当該期の文京遺跡に営まれた大規模集落を構成する遺構群である。ただし、A区とB区は70mほど離れており、出土遺構の状況も異なっている。そこで、A区とB区に分けて、その調査成果をまとめる。

(1) A区

A区北半部を流れる自然流路SR-400は、前述したように10世紀後半にはぼ埋没し谷状の窪地へと変化するが、恒常に流水がある状態で堆積した旧中州の砂礫堆であるSR-400③層からは、奈良時代～平安時代前半期、古墳後期の遺物とともに、弥生前期～後期中葉の遺物が大量に出土している。量的には、弥生中期～後期中葉の遺物が圧倒的に多い。そのため、文京遺跡に大規模集落が営まれた時期にも、SR-400には恒常に流水がある状態であったと考えられる。

既往の調査成果からみると、A区のSR-400は、東から流れてくる3条の自然流路が合流する位置にある(図8-1)。こうした自然流路に挟まれた微高地で、A区南側の微高地はもっとも高い地形面であり、弥生中期後葉～後期前葉の大規模集落が占地している。これに対して、北側の中州状の微高地は相対的に低い地形面で、当該期の遺構の分布密度は低い。SR-400は、弥生中期前葉～後葉の大規模集落の北限を区切る自然

流路と考えられる。

そうした大規模集落の北限を区切るSR-400への落ち際のA区南半部の微高地上では、掘立柱建物5棟(SB-410～412・414・422)、土壙2基(SK-402・403)が出土している。これらの遺構は、出土遺物と埋土の特徴から、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。かつて、自然流路沿いという狭い範囲ではあるが、A区の大きな特徴として、竪穴式住居跡がみられず、掘立柱建物が中心となって構成されている点があげられる。また、掘立柱建物はいずれも小規模で、高床倉庫と考えられる。さらに、A区南西部では、SB-411・412・422が重複し、SK-403が切り合う。配置関係から、これらは同時併存していたとは考えられず、弥生中期後葉～後期前葉の時間幅の中で立て替えが繰り返され

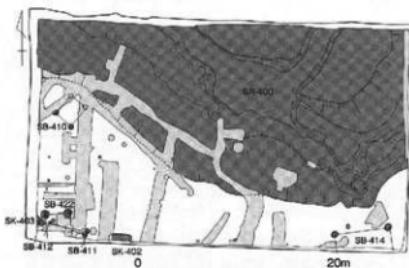


図185 文京遺跡18次調査A区における弥生時代の遺構分布(縮尺1/500)

ている。文京遺跡の他の調査区では、小形の掘立柱建物は堅穴式住居跡に付属する高床倉庫である。A区南西部のように、小形の掘立柱建物が幾度も立て替え直されることもない。A区の南側の状況は明らかではないが、小形の掘立柱建物が主体となる集落区画、つまり高床倉庫群から構成される集落全体の貯蔵空間を復元できる。

以上、A区の調査では、弥生中期後葉～後期前葉の文京遺跡の大規模集落の北限を確定できた。また、そこには、高床倉庫と考えられる小型掘立柱建物群から構成される集落全体の貯蔵空間を想定することができる。今回の調査成果の一つである。(田崎)

(2) B区

B区は、文京遺跡の中枢域と考えられている大型掘立柱建物群が発見された3・7次調査地の北西約40mに位置する(図186)。堅穴式住居跡8棟(SC-670・689・729・730・738・750・751・752)、掘立柱建物1棟(SB-749)、土壙15基(SK-663・666・675・684・690・695・705・710・711・713・725・732・733・735・739)、炭化物集積遺構1基(SX-669)、そして柱穴および小穴が出土している。

これらの遺構は、B区南端部に集中する。その北側のB区中央部では、当該期の遺構は分布していない。しかし、前述したように、B区中央部は、後世の削平で遺構が失われていると考えられる(図185)。

時期的には、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。特殊な遺構は見られないが、堅穴式住居跡や土壙などが繰り返し作られており、B区の南に隣接する12・14次調査地同様に、密集型集落の一画にあたる。

さて、B区南端部周辺では、堅穴式住居の建て替えや土壙の掘り返しが頻繁に繰り返されている。しかし、遺構埋土には、自然流入土はみられず、古くなった堅穴式住居や土壙は使用停止後、時間を経ずに埋め戻し、新たな堅穴式住居や土壙が築かれたと考えられる。発掘調査時に埋土遺物として取り上げた遺物は、遺構廃棄後、短期間に混入したものと考えられ、遺構の埋没時期を検討する際の重要な資料である。以上の性格をもつ埋土出土遺物、床面直上出土遺物の検討や遺構の切り合い関係の分析から、B区南端部の主要遺構の変遷をまとめた(図187)。

B区南端部で遺構が築かれ始めるのは、文京遺跡に入々が集住し始めた弥生中期後葉の段階である。その中でももっとも古い遺構は隅丸長方形の土壙SK-690である。SK-690埋没後、後期初頭までの間に堅穴式住居跡SC-738、SC-689の2棟が連続して築かれる。さらに、堅穴式住居跡の周辺にはSK-684などの小土壙が掘られる。

後期前葉段階になると、6棟の堅穴式住居跡(SC-670・729・731・750・751・752)が築かれる。このうち堅穴式住居の全形がわかるのはSC-670のみである。しかし、主柱穴の位置や残存する住居の平面プランから、6棟の堅穴式住居はいずれも近接して築かれており、2棟同時に併存したとは考えられない。よって堅穴式住居は6回の建て替えが行われたことになる。

6棟の堅穴式住居跡は、主柱穴構造や切り合い関係から変遷がたどれる。まず主柱穴に着目すると、5本柱構造であるSC-751とSC-752、2本柱構造のSC-670とSC-750、主柱穴不明のSC-729とSC-731に分類できる。

2本柱構造の住居跡であるSC-750とSC-670との関係をみると、主柱穴は同じ東西方向を指向する。さらに、主柱穴の位置関係をみると、SC-750の主柱穴は、SC-670の主柱穴から約50cm南に移動した位置に設けられている。遺構の切り合い関係から、SC-750が古く位置づけられる。よってSC-750からSC-670へ建て替えが行われたと考えられる。

5本柱構造であるSC-751・752は、直接的な切り合い関係がないことから、先後関係は不明である。この5本柱構造の住居跡は、14次調査北東部でも出土している(図185)。14次調査は、現在整理中で詳細な時期比定は困難であるが、B区南端周辺で5本柱構造の住居跡が、継続的に建て替えられた様子が見える。

主柱穴不明のSC-729・730は、5本柱構造のSC-752と切り合い関係にある。SC-729・730は、SC-752に先行することから、SC-730→SC-729→SC-752と変遷する。同じ5本柱構造の住居跡であるSC-751は、SC-729・730・752との先後関係は不明である。しかし、SC-751がSC-752と同一の主柱穴構造であり、建物構造の連続性を重視すると、SC-730→SC-729→SC-752→SC-751もしくはSC-730→SC-729→SC-751→SC-752という変遷が想定される。

以上のように、5本柱構造の住居跡と主柱穴不明の

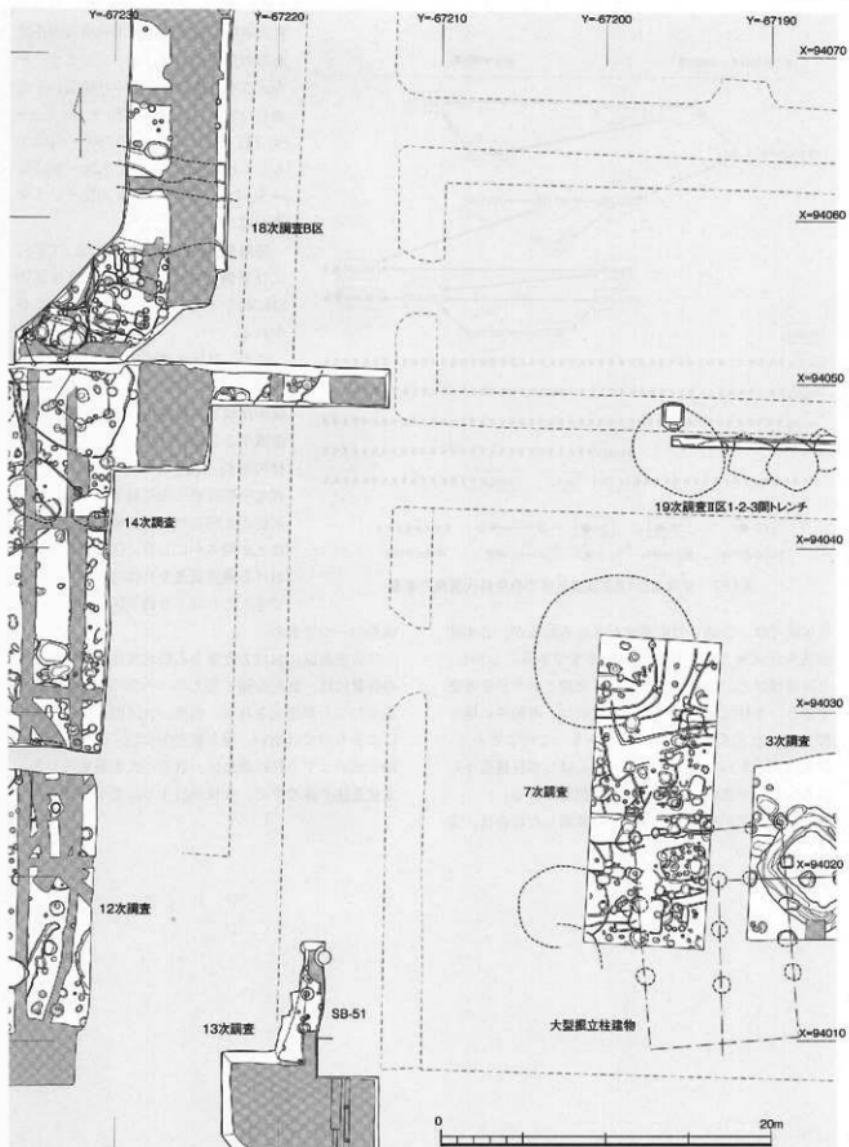


図186 文京遺跡18次調査B区周辺の弥生時代の遺構分布

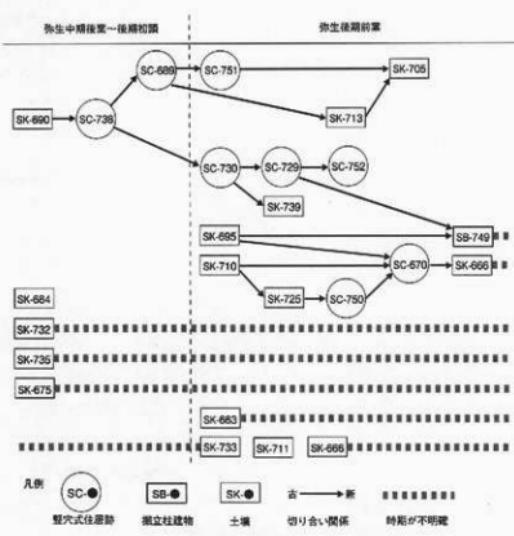


図187 文京遺跡18次調査B区の弥生時代遺構の変遷

住居跡では、2通りの変遷案が考えられるが、2本柱構造の住居跡との関係は不明なままである。しかし、B区南端部という小地区における変遷という点を考慮すると、主柱穴構造が共通する住居は、継続的に建て替えられたと考えるのが自然である。このことから、5本柱構造から2本柱構造、もしくは2本柱構造から5本柱構造の住居へという変遷が想定される。

2本柱構造から5本柱構造へと変遷した場合は、主

柱穴不明の住居跡と2本柱構造の住居跡との関係が不明となってしまう。一方、5本柱構造から2本柱構造へと変遷した場合には、SC-730→SC-729→SC-752→SC-751→SC-752→SC-750→SC-670もしくは、SC-730→SC-729→SC-751→SC-752→SC-750→SC-670という変遷が導かれる。

後期前葉段階に6回にわたって縦穴式住居跡が築かれた後、掘立柱建物SB-749や土塁SK-666などが新たに築かれる。

以上、B区南端部における主要遺構の変遷をみてきた。弥生中期後葉に遺構が出現し、後期中葉以降、遺構数が激減するといった状況は、文京遺跡全体の消長と軌を一にしている。また、弥生中期後葉～後期前葉に、縦穴式住居跡が8回にわたって建て替えられたことを明らかにした。住居密集区内における遺構変遷を具体的に示すことができたことは、B調査区における調査

成果の一つである。

住居密集区における度重なる縦穴式住居の建て替えの背景には、新たな建て替えスペースの確保が困難であったことが推定される。当然、B区周辺だけの事情によるものではない。現在整理中の12・14・16次調査地を始めとする住居密集区、さらに大規模集落である文京遺跡全体の中で、今後検討する必要があろう。

(三吉)

卷末表1 文京遺跡 18次調査構造一覧

層別 略号 番号	調査区	調査所見	埋土類別
SS 1 A区	DR - DS-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS 2 A区	DS - DT-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS 3 A区	DU - DV-45	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文27頁に報告。	
SS 4 A区	DR - DS-43 - 44	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SS 5 A区	DS-43 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS 6 A区	DT - DU-43 - 44	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS 7 A区	DU - DV-43 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文26頁に報告。	
SD 8 A区	DT-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文33頁に報告。	
SD 9 A区	DT-45	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文33頁に報告。	
SD 10 A区	DT - DY-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文34頁に報告。	
SD 11 A区	DT-43 - 44	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文35頁に報告。	
SD 12 A区	DR-43 - DY-42 - 43	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文35頁に報告。	
SS 13 A区	DR - DS-43 - 43	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SS 14 A区	DS - DU-43	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SS 15 A区	DU - DV-43	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SS 16 A区	DR - DS-41 - 42	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SS 17 A区	DS - DV-41 - 42	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文24頁に報告。	
SD 18 A区	DR-41 - DX-42	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文36頁に報告。	
SS 19 A区	DR ~ DY-41	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文30頁に報告。	
SD 20 A区	DV - DW-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS 21 A区	DW - DX-45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS 22 A区	DX - DY-44 - 45	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS 23 A区	DY - DZ-44 - 45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文31頁に報告。	
SD 24 A区	DY-41 - 45	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文36頁に報告。	
SD 25 A区	DV-42 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文38頁に報告。	
SS 26 A区	DV - DW-43 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文38頁に報告。	
SS 27 A区	DW ~ DY-43 - 44	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文38頁に報告。	
SS 28 A区	DW - DY-43 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文38頁に報告。	
SD 29 A区	DY-44	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文39頁に報告。	
SS 30 A区	DY - DZ-43 - 44	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文39頁に報告。	
SS 31 A区	DV ~ DZ-42 - 43	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文39頁に報告。	
SS 32 A区	DX - DY-42 - 43	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文42頁に報告。	
SS 33 A区	DX - DY-42 - 43	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文42頁に報告。	
SS 34 A区	DY - DZ-42 - 43	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文42頁に報告。	
SS 35 A区	DK - DV-42 - 43	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文42頁に報告。	
SS 36 A区	DV - DW-41 - 42	II - 2 - ① (上層水田) 稲水田。詳細は本文43頁に報告。	
SS 37 A区	DW - DX-42	II - 2 - ① (上層水田) 稻水田。詳細は本文43頁に報告。	
SS 38 A区	DX - DY-42	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文43頁に報告。	
SS 39 A区	DY - DZ-42	II - 2 - ② (上層水田) 稲水田。詳細は本文43頁に報告。	
SS 40 A区	DY - DZ-41 - 42	II - 2 - ③ (上層水田) 稲水田。詳細は本文43頁に報告。	
SP 40 A区	DT-43	上層水田、底面約10cm底の陶瓦状形の割り形をもつ。深さ8cm。地土は灰質褐色砂質シルト。柱1~1.5mほど白色砂礫をばらばらに見じる。	埋土 c
SP 41 A区	DT-43	深さ6cmの円錐の削り形をもつ。深さ9cm。地土は灰黃褐色沙質シルト。上部ほど柱1~2cmの白色砂礫が多く混じる。	埋土 c
SP 42 A区	DS-43	柱7~27cmの柱内縫の削り形をもつ。深さ6cm。地土は灰黃褐色土。柱1cm以下の白色砂礫が多く混じる。	埋土 c
SD 101 A区	DR-42 - DY-44	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文24頁に報告。	
SD 102 A区	DR-43 - DX-44	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文24頁に報告。	
SD 103 A区	DR ~ DZ-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文33頁に報告。	
SD 104 A区	DS - DU-41	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文54頁に報告。	
SS 105 A区	DT-42 - 43	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文45頁に報告。	
SS 106 A区	DT - DV-42 - 43	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文45頁に報告。	
SS 107 A区	DR - DS-45 ~ 45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文45頁に報告。	
SS 108 A区	DS - DT-43 - 44	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文46頁に報告。	
SS 109 A区	DT - DU-43 - 44	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文46頁に報告。	
SS 110 A区	DU - DV-43 ~ 45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文46頁に報告。	
SS 111 A区	DR - DS-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文47頁に報告。	
SS 112 A区	DS-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文47頁に報告。	
SS 113 A区	DT - DV-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文47頁に報告。	
SD 114 A区	DR - DS-42	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	
SS 115 A区	DV - DX-43 ~ 45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文49頁に報告。	
SS 116 A区	DX-44 - 45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文49頁に報告。	
SS 117 A区	DV - DX-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文49頁に報告。	
SS 118 A区	DX - DY-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田。詳細は本文55頁に報告。	
SD 119 A区	DY - DZ-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	
SD 120 A区	DY-45	II - 2 - ④ (中層水田) 稲水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	

名 稱	調 査 区	調 査 所 見	理 上 類 型
略 号	番 号		
SX	I21	AIK DY-44・45	不整形の埴跡設。詳細は本文56頁に報告。
SD	I22	AIK DT-42・43	II・2-(④) (中層水田) 堀水田作り水路。詳細は本文55頁に報告。
SK	I23	AIK DT-43	II・2-(④) (中層水田) 堀水田作り土壁。詳細は本文61頁に報告。
SK	201	AIK DT・DU-42・43	SD-301を切る不整形の土壁。詳細は本文61頁に報告。
SK	202	AIK DU・DV-43	SD-301を切る高さ約1mの土壁。詳細は本文61頁に報告。
SK	203	AIK DV-45	SS-309・312剖面を切る低い不整形の大型土塊。詳細は本文62頁に報告。
SK	204	AIK DV-48	SD-301・302剖面を切る低い長円形の小型土塊。詳細は本文62頁に報告。
SP	205	AIK DS-42	径35×36cmの円筒形の割り形をもつ。深さ7cm。淡赤色沙色シルトを埋土とする。
SP	206	AIK DV-44	径23×26cmの円筒形の割り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂質が少混じる赤灰赤色沙質シルト。SP-212・213と比べて茶色みが強い。炭化物小片が埋土。
SP	207	AIK DV・DW-44	径17×20cmの円筒形の割り形をもつ。深さ7～8cm。SP-206と共通した軽微の埋土。SD-302を切る。
SD	208	AIK DR・DZ-43～45	詳細は本文62頁に報告。
SD	209	AIK DR-43～44・DX-45	詳細は本文66頁に報告。
SP	210	AIK DV-44	径35×36cmの丸太形の割り形をもつ。深さ29cm。埋土は赤茶色沙質シルトを埋土とする。
SP	211	AIK DW-43	径38×36cmの丸太形の割り形をもつ。深さ17cm。埋土は赤茶色沙質シルト。SD-302を切る。上面で草花円錐が出土。
SP	212	AIK DV-44	径31cmの円筒形の割り形をもつ。深さ15cm。茶色みが強い赤茶色沙質シルト。SD-308を切る。炭化物小片が点々と出上る。
SP	213	AIK DV-44	径74×82cmの不整形の割り形をもつ。深さ10cm。埋土は赤茶色沙質シルトを埋土。SD-308の遺迹で確認。
SP	214	AIK DU-43	径20×21cmの円筒形の割り形をもつ。深さ10cm。埋土は茶色沙色シルト。既往先大の円錐が点々と混じる。
SD	301	AIK DR・DY-42～44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田作り水路。詳細は本文54頁に報告。
SD	302	AIK DS・DV-43・44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田作り水路。詳細は本文55頁に報告。
SS	303	AIK DR・DS-43・44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文69頁に報告。
SS	304	AIK DS・DT-43・44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文69頁に報告。
SS	305	AIK DS-44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文76頁に報告。
SS	306	AIK DR・DS-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文76頁に報告。
SD	307	AIK DT-43～DS-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田作り水路。詳細は本文76頁に報告。
SS	308	AIK DT・DU-43・44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文76頁に報告。
SS	309	AIK DT・DU-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文71頁に報告。
SS	310	AIK DT・DU-45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文71頁に報告。
SS	311	AIK DU・DW-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文71頁に報告。
SS	312	AIK DU・DV-45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文71頁に報告。
	313	欠番	
SS	314	AIK DW・DX-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文72頁に報告。
	315	欠番	
SS	316	AIK DV・DW-45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文72頁に報告。
SS	317	AIK DR・DX-44・45	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文72頁に報告。
SS	318	AIK DR・DS-44	II・2-(④) (下層水田) 堀水田。詳細は本文72頁に報告。
SR	400	AIK 調査地北半部	自然地盤。詳細は本文27頁に報告。
SK	401	AIK DV-41	径1.65～1.7mの不整形の土塊。詳細は本文110頁に報告。
SK	402	AIK DX-41	底長1.4m円形の土塊。詳細は本文114頁に報告。
SK	403	AIK DZ-41	SD-570を切る不整形の土塊。詳細は本文116頁に報告。
SK	404	AIK DZ-42	径1.55mの不整形の土塊。詳細は本文116頁に報告。
SD	405	AIK DY-42・43	幅30～43cm、残存長23cmの後。詳細は本文118頁に報告。
SK	406	AIK DS-41	残存長25cmの西端の土壁。詳細は本文118頁に報告。
SK	407	AIK DV-42	幅68×125cmの不整形の土壁。深さ16cm。詳細は本文116頁に報告。
SK	408	AIK DV-43	南北100cmほどの小方土壁。詳細は本文116頁に報告。
SA	409	AIK DW・DX-41・42	SD-497・508・509・507・506で構成される複数柱。詳細は本文118頁に報告。
SB	410	AIK DY-43・44	SD-441・541・559で構成される複数柱建物。詳細は本文124頁に報告。
SB	411	AIK DY・DZ-41	SD-549・551で構成される複数柱建物。詳細は本文124頁に報告。
SB	412	AIK DY・DZ-41	SD-550・570で構成される複数柱建物。詳細は本文124頁に報告。
SB	413	AIK DR・DS-41	SD-456・462で構成される複数柱建物。詳細は本文126頁に報告。
SB	414	AIK DR～DT-41	SD-455・467で構成される複数柱建物。詳細は本文125頁に報告。
SB	415	AIK DS・DT-41	SD-460・461・464・465・468で構成される複数柱建物。詳細は本文126頁に報告。
SB	416	AIK DR～DT-41・42	SD-457・591・592で構成される複数柱建物。詳細は本文126頁に報告。
SB	417	AIK DU・DV-41・42	SD-472・476・478・479・480・571で構成される複数柱建物。SD-474・477は添え柱もしくは補強用の柱か？ 詳細は本文102頁に報告。
SB	418	AIK DW・DV-41	SD-483・484で構成される複数柱建物。詳細は本文102頁に報告。
SB	419	AIK DW・DX-42・43	SD-498・506・502・508で構成される複数柱建物。詳細は本文104頁に報告。
SB	420	AIK DW・DX-42・43	SD-513・514・515・516で構成される複数柱建物。詳細は本文105頁に報告。
SB	421	AIK DY-42・43	SD-533・534・535・536・537で構成される複数柱建物。詳細は本文106頁に報告。
SB	422	AIK DY・DZ-42・43	SD-536・537で構成される複数柱建物。詳細は本文106頁に報告。
SB	423	AIK DY・DZ-42・43	SD-545・547・587で構成される複数柱建物。詳細は本文106頁に報告。
SB	424	AIK DW-41	SD-547・492で構成される複数柱建物。詳細は本文109頁に報告。
SB	425	AIK DW-42・43	長軸長13m、短軸長70cmの不整形の土塊。詳細は本文118頁に報告。
	426	欠番	
	440	欠番	

品種 略号	調査区	調査所見	根状根
SP 448	A区 DY-44	15次調査8トレンチ SP-1。SB-410を構成する柱状。詳細は本文92頁に報告。	埋土 a
SP 442	A区 DY-43	15次調査8トレンチ SP-2。	埋土 a
SP 443	A区 DY-44	花崗岩内側が柱状。詳細は本文119頁に報告。	埋土 c
SP 444	A区 DY-44	SP-44に切られる。厚28~31cmの不規則形。埋土は砂礫混じりの灰茶色砂質シルト。	埋土 c
SP 445	A区 DY-44	壁30×30cmの規則形。砂礫混じりの灰茶色砂質シルトの層土。	埋土 c
SP 446	A区 DY-43	壁30×30cmの円形。砂礫混じりの灰茶色砂質シルトの層土。	埋土 c
SP 447	A区 DX-42	幾丸で草手筋が形成。傾斜30~35cm、深さ6mm後、埋土の特徴を記載せず。	埋土 c
SP 448	A区 DX-43	壁30×23cmの規則形。深さ9cm。埋土は砂礫混じりの灰茶色砂質シルト。	埋土 c
SP 449	A区 DW-DX-42	壁40cmの長円形。埋土は砂礫混じりの灰茶色砂質シルト。	埋土 c
SP 450	A区 DW-DX-42	SP-510に切られる。厚26cmの不規則形。深さ11cm。埋土は砂礫混じりの灰茶色砂質シルト。	埋土 c
SP 451	A区 DR-42	壁30×8cmの長円形の振り形をもつ。深い復み伏で、底面に小穴とは判断できなかった。上層部分の振り残しの可能性がある。	埋土 c
SP 452	A区 DS-42	壁32cmの不規則形の振り形をもつ。深さ10cm。SP-509を切る。灰茶色土が認定。	埋土 c
453 欠番			
SP 454	A区 DS-42	壁35cm前後の深い復み伏。深い底み伏で、底面に小穴とは判断できなかった。上層部分の振り残しの可能性がある。	埋土 c
SP 455	A区 DR-DS-41	SD-414を構成する柱状。詳細は本文96頁に報告。	埋土 a
SP 456	A区 DS-41	SD-413を構成する柱状。詳細は本文95頁に報告。	埋土 b
SP 457	A区 DS-41	SD-416を構成する柱状。詳細は本文95頁に報告。	埋土 c
SP 458	A区 DS-41	厚50×15cmの長円形の振り形をもつ。深さ32cm。SP-400を切る。上部には暗褐色砂質土や暗褐色砂質土の塊が多く混じる黒褐色砂質シルト。下部は灰茶色砂質シルトに黒褐色砂質シルトが薄い状態に混じる。	埋土 c
SP 459	A区 DS-41	壁30×40cmの長円形の振り形をもつ。深さ5cm。深い底み伏。暗褐色砂質シルトに暗黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。埋土から生土の層の剥離部分に多く見出。	埋土 a
SP 460	A区 DS-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文96頁に報告。	
SP 461	A区 DT-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文96頁に報告。	
SP 462	A区 DS-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文95頁に報告。	
463 欠番			
SP 464	A区 DS-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文96頁に報告。	埋土 b
SP 465	A区 DT-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文97頁に報告。	埋土 b
SP 466	A区 DS-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土 b
SP 467	A区 DT-41	SB-414を構成する柱状。詳細は本文95頁に報告。	埋土 a
SP 468	A区 DS-41	SB-415を構成する柱状。詳細は本文97頁に報告。	埋土 b
SP 469	A区 DT-41	厚50~52cmの不規則形の振り形をもつ。深さ43cm。灰茶色砂質土と淡褐色砂質土を主体とする。	埋土 c
SP 470	A区 DT-41	F921~23cmの不規則形の振り形をもつ。灰茶色砂質土を主体とする。	埋土 c
SP 471	A区 DT-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土 a
SP 472	A区 DT-DU-41	SB-417を構成する柱状。詳細は本文100頁に報告。	埋土 c
SP 473	A区 DT-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土 c
SP 474	A区 DU-41	SB-417の底付柱または被鉄用柱と考えられる。詳細は本文102頁に報告。	埋土 c
SP 475	A区 DU-41	長径30cm、幅径30cmの不規則形の振り形をもつ。深さ14cm。SP-476を切る。暗褐色砂質土を主体とする。	埋土 c
SP 476	A区 DT-DU-41	SB-417を構成する柱状。詳細は本文100頁に報告。	埋土 c
SP 477	A区 DT-DU-41-1	SB-417の底付柱または被鉄用柱と考えられる。詳細は本文102頁に報告。	埋土 c
SP 478	A区 DU-41	SB-417を構成する柱状。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c
SP 479	A区 DU-41	SB-417を構成する柱状。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c
SP 480	A区 DV-41-42	SB-417を構成する柱状。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c
SP 481	A区 DV-41	長径22cm、幅径16cmの長円形の振り形をもつ。深さ11cm。埋土は砂礫混じりの褐褐色砂質土。	埋土 c
SP 482	A区 DV-41	長径20cm、幅径16cmの長円形の振り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂礫混じりの褐褐色砂質土。	埋土 c
SP 483	A区 DV-41	SB-418を構成する柱状。詳細は本文102頁に報告。	埋土 c
SP 484	A区 DW-41	SB-418を構成する柱状。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c
SP 485	A区 DV-41	長径30cm、幅径15cmの長円形の振り形をもつ。深さ23cm。埋土は砂礫混じりの褐褐色砂質土。	埋土 c
SP 486	A区 DV-41	厚15~17cmの円形の振り形をもつ。深さ10cm。埋土は褐褐色系の砂質土。	埋土 c
SP 487	A区 DW-DV-41	SB-424を構成する柱状。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c
SP 488	A区 DV-41	長径25cm、幅径20cmの長円形の振り形をもつ。深さ8cm。SP-489と切り合う。褐褐色系の砂質土。埋土から生土上部が5点が生土。1点は生土の層の剥離部分の破片。内外表面ともにナメられている。数は要の細胞小片。いずれも小片で撮影できなかった。数は細胞化を優先する時期のものか?	埋土 c
SP 489	A区 DW-41	長径17cm、幅径16cmの長円形の振り形をもつ。深さ15cm。灰茶色系の砂質土。	埋土 c
SP 491	A区 DW-41	厚32~34cmの不規則形の振り形をもつ。深さ19cm。褐褐色系の砂質土。	埋土 c
SP 492	A区 DW-41	SB-424を構成する柱状。詳細は本文110頁に報告。	埋土 c
SP 493	A区 DW-41	厚16~18cmの円形の振り形をもつ。深さ6cm。褐褐色系の砂質土。	埋土 c
SP 494	A区 DW-41	厚15cmの円形の振り形をもつ。深さ10cm。褐褐色系の砂質土。	埋土 c
SP 495	A区 DW-41	軽乳白色を呈する柱状。詳細は本文110頁に報告。	埋土 c
SP 496	A区 DW-41	軽乳白色を呈する柱状。詳細は本文120頁に報告。	埋土 c
SP 497	A区 DW-42	SA-429を構成する柱状。詳細は本文118頁に報告。	埋土 c
SP 498	A区 DW-42	SB-419を構成する柱状。詳細は本文104頁に報告。	埋土 c
SP 499	A区 DW-41	厚16~17cmの円形の振り形をもつ。深さ4cm。褐褐色砂質土。	埋土 c
SP 500	A区 DW-41	厚32~28cmの不規則形の振り形をもつ。深さ10cm。褐褐色砂質土。	埋土 c

遺 墓	調査 区	調査 観	埋 土類型
SP 501 A区	DW-41	径20×16cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ10cm。灰褐色砂質土。	埋土 c
SP 502 A区	DW-42	長径27cm。側径21cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ30cm。灰褐色砂質土。	-
SP 503 A区	DW-42	径24×33cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ27cm。	-
SP 504 A区	DW-42	径27×25cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ27cm。	-
SP 505 A区	DW-42	径33×38cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ32cm。	-
SP 506 A区	DX-41	SA-409を構成する柱穴。詳細は本文19頁に報告。	埋土 c
SP 507 A区	DX-41	SA-409を構成する柱穴。詳細は本文19頁に報告。	埋土 c
SP 508 A区	DX-41	古代後半の遺物がかかって土。詳細は本文120頁に報告。	埋土 c
SP 509 A区	DX-42	径45×40cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ4cm。底み土。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c
SP 510 A区	DW - DX-42	SP-450を切る。径21×27cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ32cm。灰褐色砂質シルトの埋土。	埋土 c
SP 511 A区	DW-42	径40cmの円形の掘り形をもつ。深さ52cm。埋土は灰褐色砂質土。氯化物鉄が出土。	埋土 c
SP 512 A区	DW-42	径15×17cmの円形の掘り形をもつ。深さ22cm。SD-579を構成する穴穴か？ 埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c
SP 513 A区	DW-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土 c
SP 514 A区	DX-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土 c
SP 515 A区	DX-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土 c
SP 516 A区	DW-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土 c
SP 517 A区	DW-42 - 43	径60×51cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ12cm。埋土は沙質混じりの灰黃褐色砂質土を主体として、明暗間色砂質土中に灰黃褐色砂質土の塊が少混じる。	埋土 c
SP 518 A区	DW-42	径30cmの略円形の掘り形をもつ。砂礫まじりの灰褐色砂質シルトの埋土。	埋土 c
SP 519 A区	DW-42 - 43	SD-425に取り替える。詳細は本文111頁に報告。	-
SP 520 A区	DW-42 - 43	SP-425に取り替える。詳細は本文111頁に報告。	-
SP 521 A区	DW-43	径11×14cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ5cm。埋土は砂礫まじりの灰褐色砂質シルト。	埋土 c
SP 522 A区	DW-43	径14×14cmの長円形の掘り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂礫まじりの灰褐色砂質シルト。	埋土 c
SP 523 A区	DW-42 - 43	SD-54×56cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ26cm。埋土は沙質混じりの灰黃褐色砂質土で、に灰褐色砂質土の塊が少量混じる。	埋土 c
SP 524 A区	DW-43	径30×48cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は灰褐色砂質土を主体として、に灰褐色砂質土、に灰褐色砂質土の塊が現れる。化粧片形が出土。	埋土 c
SP 525 A区	DX-42 - 43	径23×26cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ11cm。埋土の特徴を記載せず。	-
SP 526 A区	DX-42 - 43	SD-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 b
SP 527 A区	DX-43	径41×42cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ13cm。埋土は灰褐色砂質土と順層灰褐色砂質土を主体とする。埋土中から、埋もしさうな赤褐色鉄片（図版17-4）と、赤い崩壊碎片が出土。	埋土 b
SP 528 A区	DX-42 - 43	土質を確認。詳細は本文121頁に報告。	埋土 a
SP 529 A区	DX-43	西面斜面が一段高くなる。径26×29cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ14cm。埋土の特徴を記載せず。埋土中から、新後期層の砂質粘土層に崩壊碎片（図版17-8）と、青銅器の2点が出土。	-
SP 530 A区	DX-43	径49×54cmの長円形の掘り形をもつ。深さ5～9cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。	埋土 b
SP 531 A区	DX-43	径46×50cmの長円形の掘り形をもつ。深さ5cm。埋土の特徴を記載せず。	-
SP 532 A区	DX-42	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	-
SP 533 A区	DX - DY-42 - 43	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	b類似の埋土 c
SP 534 A区	DX - DY-43	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	埋土 c
SP 535 A区	DY-43	SD-42を構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	-
SP 536 A区	DY-42 - 43	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土 c
SP 537 A区	DY-42 - 43	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土 c
SP 538 A区	DX-43	既述によっては部分的に埋められている。掘り形の既定値66cm。深さ21cm。埋土は灰褐色砂質土に灰褐色砂質シルトおよび灰褐色砂質土が混じる互疊状地盤でみられる。	埋土 b
SP 539 A区	DY-43	詳細は本文122頁に報告。	埋土 a
SP 540 A区	DY-43 - 44	径20×25cmの長円形の掘り形をもつ。深さ8cm。砂礫混じりの灰褐色砂質シルトの埋土。	埋土 c
SP 541 A区	DY-44	SD-410に構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 a
SP 542 A区	DY-44	径32×35cmの長円形の掘り形をもつ。深さ5cm。灰褐色土の埋土。	埋土 c
SP 543 A区	DY-42	径31～33cmの円形の掘り形をもつ。深さ6cm。灰褐色土の埋土。	埋土 c
SP 544 A区	DY-42	径13×15cmの長円形の掘り形をもつ。深さ5cm。埋土は灰褐色砂質シルトに灰褐色シルト小塊が混じる。	埋土 a
SP 545 A区	DY-42	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土 b
SP 546 A区	DY-42	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土 c
SP 547 A区	DY-42	SD-42を構成する柱穴。詳細は本文109頁に報告。	埋土 b
SP 548 A区	DY-41	径40×36cmの不整な扇円形。深さ12cm。埋土の特徴を記載せず。埋土上部から佐佐木紹和蔵後～後期層と考えられる他の二箇所部へ崩れ跡の2点が出土。	-
SP 549 A区	DY-41	SD-411を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 a
SP 550 A区	DY-41	SD-412を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 a
SP 551 A区	DY-41	SD-411を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 a
SP 552 A区	DY-41	SD-20～22cmの円形の掘り形をもつ。深さ7cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土 c
553 次章			
SP 554 A区	DY-42	径13×16cmの扇円形の掘り形をもつ。深さ6cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土 c
SP 555 A区	DY-42	径27×23cmの長円形の掘り形をもつ。深さ7cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土 c
SP 556 A区	DY-42	SD-42に構成する柱穴。詳細は本文108頁に報告。	埋土 a
SP 557 A区	DY - DZ-41 - 42	SD-42を構成する柱穴。詳細は本文108頁に報告。	埋土 a
SP 558 A区	DY-42	SD-21cmの略円形の掘り形をもつ。深さ26cm。埋土は灰褐色砂質シルトに黄褐色シルト小塊が点々と混じる。小箱先端の化粧片が少量出土。	埋土 a

通 備 番 号	調 査 区	調 査 所 見	種土類型
SP 559 A区 DY-43	SB-410を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	黑土 a	
SP 560 A区 DY-41	径19cmの円形の掘り形をもつ。深さ14cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c	
SP 561 A区 DY-41	径16~18cmの円形の掘り形をもつ。深さ8cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c	
SP 562 A区 DW-42	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文101頁に報告。	埋土 c	
SP 563 A区 DW-42	径21×30cmの長円形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c	
SP 564 A区 DW-42	径24×26cmの梢円形の掘り形をもつ。深さ12cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c	
SP 565 A区 DV-42	径27×29cmの不規則形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土 c	
SP 566 A区 DS-41	詳細は本文222頁に報告。	埋土 a	
SP 567 A区 DS-42	柱跡を確認。詳細は本文221頁に報告。	埋土 a	
SP 568 A区 DX-42	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 b	
SP 569 A区 DS-42	SP-569に記載される。詳細は本文222頁に報告。	埋土 b	
SP 570 A区 DZ-41	SB-412を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 a	
SP 571 A区 DV-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文102頁に報告。	埋土 c	
SP 572 A区 DS-42	H22×23cmの圓形の掘り形をもつ。深さ5cm。埋土は黒褐色砂質シルトで、下部には黄褐色砂質シルト小塊が点々と混じる。	埋土 a	
573 矢番			
574 SB-413に振り替え。矢番。			
575 SB-413に振り替え。矢番。			
576 矢番。			
577 SB-417に振り替え。矢番。			
578 SB-413に振り替え。矢番。			
579 SB-413に振り替え。矢番。			
580 SB-420に振り替え。矢番。			
581 SB-421に振り替え。矢番。			
582 矢番			
583 矢番			
SP 584 A区 DX-41	SK-403を切る。埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c	
SP 585 A区 DS-42	径26~28cmの円形の掘り形をもつ。深さ4cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質シルト地が多く混じる。	埋土 a	
SP 586 A区 DS-42	径6×17cmの長円形の掘り形をもつ。深さ16cm。埋土は灰褐色砂質シルトに黄褐色・稍灰褐色砂質土が混じる。	埋土 b	
SP 587 A区 DZ-41	SB-423を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土 b	
SP 588 A区 DY-42	径16~17cmの梢円形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト小塊が混じる。灰化物小片が混じる。	埋土 a	
SP 589 A区 DS-42	径80×61cmの円形孔。深さ15cmの掘り形をもつ。深さ4cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質土多く混じり、全体に白っぽい上色。下部には黄褐色砂質シルトの塊が点々と混じる。埋土中から灰土器(頭頂15-)、朱色土器が出土。	埋土 b	
SP 590 A区 DW-43	径12×16cmの略円形の掘り形をもつ。深さ14cm。灰褐色砂質土を主体とする埋土。	埋土 c	
SP 591 A区 DT-41	SB-416を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土 bまたは c	
SP 592 A区 DS-42	SB-416を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土 b	
SP 593 A区 DV-41	SK-401を切り小穴。埋土の詳細は本文104頁で、SK-401とともに報告。	埋土 b	
SP 594 A区 DV-41	SK-401に切られた。指定埋深20cm。深さ7cm。埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c	
SP 595 A区 DV-42	径31×33cmの略円形の掘り形をもつ。深さ19cm。埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c	
SP 596 A区 DV-42	径26×35cmの不規則形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c	
SP 597 A区 DW-42	径18×24cmの不規則形の掘り形をもつ。埋土は灰褐色砂質土を主体とする。	埋土 c	
SP 598 A区 DW-41	SA-409を構成する柱穴。詳細は本文118頁に報告。	埋土 c	
SP 599 A区 DW-41	SA-409を構成する柱穴。詳細は本文118頁に報告。	埋土 c	
SP 600 A区 DW-DX-42	径30×35cmの長円形の掘り形をもつ。深さ11cm。埋土は灰色みがけい灰褐色砂質土。	埋土 c	
SD 601 B区 DH-32-33	径3m程度の廣場。詳細は本文144頁を参照。	-	
SD 602 B区 DG-DH-33	幅1.1~1.5mの東西方向の狭い溝。SK-407と切り合う。詳細は本文144頁を参照。	-	
SD 603 B区 DG-DH-39	東方にのみある。SD-604~610で記述される本は本文145頁を参照。	埋土 a	
SD 604 B区 DG-DH-38-39	東西に延びる深さ15cmの溝。SC-605~606を切る。詳細は本文150頁を参照。	埋土 c	
SC 605 B区 DH-38-39	方面あるいは長方形の東西方向溝。概幅約3m。SD-604~606に切られる。SC-605を切る。詳細は本文124頁を参照。	埋土 a	
SC 606 B区 DH-38-39	方面あるいは長方形の東西方向溝。概幅約3m。SC-605に切られる。詳細は本文125頁を参照。	埋土 a	
SP 607 B区 DH-38	楕円形。長径74cm、短径50cm、厚さ12cm。詳細は本文170頁記載。	埋土 a	
SP 608 B区 DH-38	立柱跡を確認。SC-603を切る。詳細は本文170頁を参照。	埋土 a	
SP 609 B区 DH-38	東側を南北に走る矢印。凹形。深さ56cm、深さ30cm。SC-605を切る。詳細は本文170頁を参照。	埋土 a	
SD 610 B区 DH-39	SD-604地盤下で確認した東西方向のびびり溝。SD-605に切られ、SD-610に切られ。SP-411を切る。詳細は本文150頁を参照。	-	
SP 611 B区 DH-39	西側は丸窓。南側はSD-604~610に切られた全形が不明。現存高約60cm、深さ25cm。詳細は本文170頁を参照。	-	
SP 612 B区 DH-38	立柱跡を確認。詳細は本文133頁を参照。	埋土 a	
SP 613 B区 DH-38	立柱跡を確認。詳細は本文134頁を参照。	埋土 a	
SP 614 B区 DH-38	北側は既存によって欠損。荷円形。残存高約44cm、深径35cm、厚S12cm。SP-615を切る。埋土は黒褐色砂質シルト。	埋土 a	
SP 615 B区 DU-38	不規形。径31cm、深さ9.6cm。SP-613に切られる。埋土は黒褐色砂質シルト。砂礫を少量含む。	埋土 a	
SP 616 B区 DG-38	円形。径10~11cm、深さ12cm。埋土は黒褐色シルト。灰化・黄褐色シルトの2~3cmの大粒圓形の塊が多く混じる。	埋土 a	
SP 617 B区 DG-36	SB-744の柱穴。詳細は本文131頁を参照。	埋土 a	
SP 618 B区 DG-35	SB-744の柱穴。詳細は本文131頁を参照。	埋土 a	
SP 619 B区 DH-38	立柱跡を確認。詳細は本文125頁を参照。	埋土 a	
SP 620 B区 DG-38	立柱跡を確認。詳細は本文125頁を参照。	埋土 a	

遺 備 略号	調 査 区	調 査 所 見	埋 土 領 域
SP 621	B IX DHJ-38	楕円形。径25~29cm、深さ7.5cm。SC-600番地で桜井、黒褐色砂質シルトの堆土。	埋土 a
SP 622	B IX DHJ-38	立柱道路を確認。詳細は本文128頁を参照。自然堆土。	-
SP 623	B IX DHJ-39	鶴ヶ谷西野に沿って後山。半円形。残存部径32cm、深さ4.5cm。堆土は黒褐色砂質シルト。	埋土 a
SP 624	B IX DHJ-36	円形。径10cm、深さ16.5cm。堆土は灰褐色シルト。堆土上部から土器部の竪口縁部片が1点出土している(図174-2)。	埋土 c
SP 625	B IX DHJ-35-36	斬な円形の割り形をもつ。幅40cm、深さ17.5cm。堆土は灰褐色シルト。砂礫を多く含む。	埋土 a
SP 626	B IX DHJ-35-36	立柱痕跡を確認。詳細は本文71頁を参照。	埋土 a
SD 627	B IX DHJ-38-37	北西から南東に亘り。複数個の剖面。東に掘りたる古窓の痕。詳細は本文151頁を参照。	-
SP 628	B IX DHJ-38	長軸円形の割り形。長径55cm、残存部径40cm、深さ10.2cm。堆土は黒褐色砂質シルト。小石を含む。先史土器・土師器の小片が1点出土。堆土に岡原希切と直見が見れる土器部片が1点出土している(図175-1)。	埋土 a
SP 629	B IX DHJ-37	複数によって西側・東側は欠損。残存部径25cm、深さ8.2cm。堆土はやや茶色みを帯びた黒褐色砂質シルト。砂礫を多く含む。	埋土 a
SP 630	B IX DHJ-35	円形の割り形。径25~26cm、深さ6.5cm。堆土は茶褐色シルト。	埋土 a
SP 631	B IX DHJ-36	椭円形の割り形。長径40cm、短径30cm、深さ30.7cm。灰褐色シルトの堆土。	埋土 c
SP 632	B IX DHJ-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土 c
SP 633	B IX DHJ-36	円形の割り形。径24cm。西半部は復元により一部欠損。円形。径24cm、深さ37.5cm。灰褐色シルトの堆土。	埋土 c
SP 634	B IX DHJ-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土 c
SP 635	B IX DHJ-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土 c
SP 636	B IX DHJ-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土 c
SP 637	B IX DHJ-36	半分円形の割り形。径20~45cm、深さ28cm。詳細は本文172頁を参照。	埋土 c
SP 638	B IX DHJ-34	北削半分は複数により欠損。円形。径46cm、深さ27.5cm。堆土は黒褐色砂質シルト。砂質土を多く含む。	埋土 a
SP 639	B IX DHJ-34	円形の割り形。径42cm、深さ31.5cm。黒褐色砂質シルトの堆土。	埋土 a
SP 640	B IX DHJ-34	椭円形の割り形。径29~32cm、深さ15cm。堆土は黒褐色砂質シルト。	埋土 a
SP 641	B IX DHJ-34	調査区西端部でいくつて。半円形。径60cm、深さ13cm。黒褐色砂質シルト。	埋土 a
SP 642	B IX DHJ-34	円形の割り形。径26cm、深さ18.5cm。堆土は茶色を帯びた黒褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土 a
SP 643	B IX DHJ-34	円形の割り形。徑23cm、深さ510mm。堆土は茶色を帯びた黒褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土 a
SP 644	B IX DHJ-34	椭円形の割り形。径18~20cm、深さ34cm。堆土は茶色を帯びた黑褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土 a
SP 645	B IX DHJ-33-34	東削半分は複数により欠損。半円形。径26cm、深さ16.5cm。堆土は黒褐色砂質土。小石・砂礫を多く含む。	埋土 a
SP 646	B IX DHJ-33	円形の割り形。径20~22cm、深さ30cm。堆土は茶色を帯びた黒褐色砂質土。小石は含まない。	埋土 a
SK 647	B IX DHJ-33	SD-602の切り土不整地内の上部。詳細は本文152頁を参照。	埋土 c
SP 648	B IX DG-34	SB-746の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土 a
SP 649	B IX DG-34	SB-746の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土 a
650	欠番		
SP 651	B IX DHJ-32	西側は複数によって欠損。半円形の割り形。径25cm、深さ7cm。堆土は黒褐色砂質土。径20cmの明渠場地動植物シルトの塊が2つ、3箇重じる。	埋土 a
SP 652	B IX DHJ-32	東側の一部は復元によって欠損。長方形の割り形。幅29cm、長径24cm、深さ17cm。堆土は黒褐色砂質シルト。明渠場地動植物シルトの3cm×4cmの塊が落ち込む。	埋土 a
SP 653	B IX DHJ-32	椭円形の割り形。径32~35cm、深さ35cm。堆土は黒褐色砂質シルト。纏糸・小さな骨礫を多く含む。	埋土 b
SP 654	B IX DHJ-32	丸みをおびた五角形の割り形。徑32cm、深さ16cm。黒褐色砂質シルト。にほん黒褐色砂質土の径20cmの大塊が2つと重じる。	埋土 a
SP 655	B IX DHJ-32	東半分は複数によって欠損。残存部の長径26cm。残丸方形容あるいは長径円形。深さ20cm。堆土は黒褐色砂質土。径1~2cm大の円洞を2、3点含む。先史土器類・鹿廻原小片が4点出土。鹿廻原近くの削除下部片を削化(図173-2)。	埋土 a
SP 656	B IX DHJ-31-32	椭円形の割り形。径50~58cm、深さ19cm。SC-670を切る。詳細は本文172頁を参照。	埋土 a
SP 657	B IX DHJ-31	東半分は複数によって欠損。残存部25cm、深さ15cm。	-
SP 658	B IX DHJ-32	東側は複数によって欠損。半円形。径28cm、深さ9cm。黒褐色砂質シルトの堆土。	埋土 a
SP 659	B IX DHJ-32	長円形の割り形。長径45cm、深さ65cm。堆土はSC-662に切られる。SK-695を切る。詳細は本文172頁を参照。	埋土 a
SP 660	B IX DHJ-32	SD-749の柱穴。SK-695を切る。詳細は本文143頁を参照。	埋土 a
SP 661	B IX DHJ-32	椭円形の割り形。径44cm、深さ15cm。SC-670を切る。詳細は本文173頁を参照。	埋土 a
SK 662	B IX DHJ-32	西側は複数する。長径11.5cm、最大幅70cmの長方形の土壠。SD-601・SP-664・665に切られる詳細は本文152頁を参照。	埋土 a
SK 663	B IX DHJ-32	残存部12cm。底面基盤45cm、深さ10cmの浅い鉢状扶土壠。SD-601・SP-664・665に切られる詳細は本文152頁を参照。	埋土 a
SP 664	B IX DHJ-32	SK-693を切る。円形。径15cm、深さ5cm。堆土は黒褐色砂質土。にほん黒褐色砂質土と比較的多く混じる。差削部分から先史土器類一塊の追削部が3点。差削部1点、差削不明土器片1点が出土。現土中から石が出土しているが、所在不明で石器かどうかについては不明。例証。(E-2540)が1点出土。	埋土 a
SP 665	B IX DHJ-32	椭円形の割り形。径32cm~40cm、深さ10cm。SD-601に切られる。SK-693を切る。堆土は黒褐色砂質土。下部を中心としてにほん黒褐色砂質土と比較的多く混じる。差削部分から先史時代中期後葉の窓口縁部片と並んでは焼削部片が混入。	埋土 a
SK 666	B IX DHJ-31	残存長辺23cm、東西23cmの長方形であるいは方形を示す土壠。深さ10cm。SC-670を切る。詳細は本文153頁を参照。	埋土 a
SP 667	B IX DHJ-31	SK-666の西側扶土壠。南北24cmより少し狭い。残存部径30cm、深さ8cm。堆土は黒褐色砂質土。	埋土 a
SP 668	B IX DHJ-31	SK-666の西側扶土壠。南北24cmより少し狭い。残存部径30cm、深さ8cm。堆土は黒褐色砂質土。わざににほん黒褐色砂質土を混じる。堆土下部から後葉時代の小片が1点出土。	埋土 a
SK 669	B IX DHJ-31	墨塗上部で検出した約30cm四方の発光物や上部層の広がり。詳細は本文170頁を参照。	埋土 a
SC 670	B IX DHJ-31-32	長径41cm、短辺29.5cmの長方形堅穴式住居跡。SK-695・710・725を切る。SK-666・SP-656・673・687に切られる。詳細は本文128頁を参照。	埋土 a
SP 671	B IX DHJ-32	SB-740の柱穴。SK-675・710を切る。詳細は本文138頁を参照。	埋土 a

通 路 名 称 番 号	開 拓 區 名	調 査 所 見	理土類型
SP 672	B区 DJ-32	北東部は SP-727 に、西側は堤防及び SK-739 によって被築されている。直角円形の断り形で、底60cm、深さ9cm。理土は黒褐色砂質シルト。下部にはいよいよ黄褐色砂質土が少量混じる。佐布時代中期偏後から後期前半の砂質部片(BH173-9)の塊に砂質部片1点、要削部片2点出土。	理土 a
SP 673	B区 DJ-32	SB-709の柱穴、SK-710、SC-670を切る。詳細は本文141頁を参照。	理土 a
SP 674	B区 DJ-32	SK-729を切る。西側半分は乱れになって上面を削り取られる。直角円形の断り形をもつ。底35~38cm、深さ30cm。理土は黒褐色砂質シルト。暗褐色の砂組が多く混じる。佐布時代中期から後期の土器断面部片が1点出土。石が出土しているのが所在不明。	理土 a
SK 675	B区 DJ-32	残存長11m、幅30cm、深さ5cmの溝丸形あるいは溝丸長方形土器の一端。SP-671に切られる。詳細は本文154頁を参照。	理土 a
SP 676	B区 DJ-31	SC-752の主柱穴、SC-729の土器上部を削る。柱穴の外縁は堤防により被築されている。粗り形の柱径7cm、深さは被築部で17cm。詳細は本文127頁を参照。	理土 a
SP 677	B区 DJ-31	西側は概ねようやく、柱穴形の断り形で、直角60cm、残存部断面40cm、深さ17cm。SK-713を切る土器は黒褐色砂質土。底2~3mmの灰白色砂質土で10cmの円錐をなす。佐布時代中期後期~後期前半の土器・要削部片等が4点出土。両端は古代式腰窓の跡跡部片(BH173-16)と後代式腰窓跡の跡跡部片(BH173-16)と後代式腰窓跡の跡跡部片(同-14)を発掘している。遺物の一部には、下部腰窓からの跡跡が見らる。	理土 a
SP 678	B区 DJ-31	槽内形の断り形で、底35~37cm、柱径14cm。SP-702を切る。土器は黒褐色砂質土。底2~3mmの灰白色砂質土を多く含む。底1cmの円錐をなす。残存土器は腰窓部片1点、底・腰窓部片1点が出土。R-2152(裏上げR-152)は後代式中期の要削部片1点、要小片が1点が出土。	理土 a
SP 679	B区 DJ-31	SP-703を切る。やや豊かな形、底径10cm、深さ5cm。底上部は黒褐色砂質土。明治時代色砂質土の丸いブロックが混じる。	理土 a
SP 680	B区 DJ-31	SC-731の主柱穴。底径35cm、柱穴形の断り形の断り形。	理土 a
SP 681	B区 DJ-31	SB-740の柱穴、SK-706を切る。詳細は本文138頁を参照。	理土 a
SP 682	B区 DJ-31	SC-689、SP-724を切る。一辺37~38cmの丸い二角形。底35cm、理土は黒褐色砂質土のブロックを少量含む。底上部を少し含む土器の腰窓部片1点、底・腰窓部片2点、腰窓部片1点が出土。残存部分から残存土器断面の要削部片1点、底・腰窓部片1点が出土。	理土 a
SP 683	B区 DJ-31	立柱断面を削る。SL-684・SK-725・732、SP-715を切る。詳細は本文174頁を参照。	理土 a
SK 684	B区 DH-DJ-31	底35cm以上の底円筒部。深さは概ね42cm。東で18cm。底上部: SP-683に切られる。詳細は本文154頁を参照。	理土 a
SP 685	B区 DJ-31	槽内は横で大斜面、手円形。底径10cm、深さ5cm。理土は黒褐色砂質シルトで、灰白色砂質土が多く混じる。底上部から腰窓部・腰窓・腰窓・腰窓の外縁が各1点出土。その中には腰窓あるいは腰窓の上部腰窓部片で底面内面を上に構成するものが、底面に垂直に配置してある。わずかに下方に突出させるものを見らる。	理土 a
SP 686	B区 DJ-31	SC-752の主柱穴。西側・西端は概ね丸い矢字形。底35cmの円形あるいは溝丸形の断り形。詳細は本文127頁を参照。	理土 a
SP 687	B区 DH-DU-31	SB-740の柱穴。詳細は本文138頁を参照。	理土 a
SP 688	B区 DJ-31	SB-740の柱穴。底径35cm、SC-689を切る。詳細は本文138頁を参照。	理土 a
SC 689	B区 DH-DJ-31	方形容または長方形の底と式住腰窓。深さ13cm。SP-682・682・668・702・736、SK-692・713に切られる。SK-690、SC-738を切る。詳細は本文121頁を参照。	理土 a
SK 690	B区 DH-31	長辺5m、短辺2m。深さは40cmの溝丸長方形土器である。SP-677・678・702・709、SC-687・713、SK-689・693、705に切られる。SK-725を切る。詳細は本文155頁を参照。	理土 a
SP 691	B区 DH	SP-688に切られる。手円形。底径35cm、深さ12cm。理土は黒褐色砂質土。明治時代色砂質土の丸いブロックを少量含む。	理土 a
SK 693	B区 DH-DJ-31	東西残存41cm、南北残存38cmの長方形あるいは溝丸長方形の土器。SP-736に切られる。SP-691、SC-689、SK-690を切る。詳細は本文155頁を参照。	理土 a
SK 695	B区 DH-32	長辺22cm、幅8cm、深さ9cmの歪な長方形土器。SC-679・SP-651・659・660に切られる。SP-724・745を切る。詳細は本文156頁を参照。	理土 a
SP 696	B区 DH-31	SK-739を切る。円形。底径5cm、深さ12cm。黒褐色砂質シルト。	理土 a
SK 697	B区 DH-31-32	1辺11.5cm、底面幅50cm、深さ25cmの丸の外縁の断り形あるいは長方形の土器と考えられる。東西部にはテラス状の面をもつ。SP-708、SK-729を切る。詳細は本文155頁を参照。	理土 a
SP 698	B区 DH-31-32	西側は SK-739。東側は複数面に削られた。底33cm、深さ19cm。理土は黒褐色砂質シルト。砂礫を多く含む。	理土 a
SP 699	B区 DH-31-32	SC-670を削る。円形。底径35cm、底深さ12cm。黒褐色砂質シルトの土器。佐布時代中期後期の腰窓部片2点(BH173-14・15)を削る。その他の腰窓部品の一部(BH173-16)が出土。	理土 a
SP 700	B区 DH-31	SC-670を削る。主柱穴。底円形。底径30cmの円錐形。底深さ15cm。詳細は本文128頁を参照。	理土 a
SP 701	B区 DH-31	SC-736を削る。長円形。底径35cm、底深さ32cm。理土は黒褐色砂質シルト。腰窓部片14点が出土。その中には、腰窓の頭部が1点ある。頭部の付け根には、長い鉄ナタ頭部により凹状跡を残す。その他の土器品の一部(BH173-16)が出土。	理土 a
SP 702	B区 DH-31	北東部は SP-678に切られる。残存長20cm、底大約6cmを測る長方形断り形。底深さ17cmを測る。詳細は本文174頁を参照。	理土 a
SP 703	B区 DH-31	SC-737を削る。底際に沿って被築したため、断り形は底35cmの手円形を呈する。深さは最深部で30cmを測る。詳細は本文137頁を参照。	理土 a
SP 704	B区 DH-DJ-31	SC-732の柱穴。SK-693に切られる。SC-689を切る。詳細は本文137頁を参照。	理土 a
SK 705	B区 DH-31	残存長11cm、幅1.5cmを測る溝丸長方形あるいは溝丸長方形土器。SK-713、SP-728を切り。SP-681に切られる。詳細は本文160頁を参照。	理土 a
SP 706	B区 DH-31	SC-670を削る。詳細は本文128頁を参照。	理土 a
SP 707	B区 DH-31	底深さ12cmを削る。詳細は本文128頁を参照。	理土 a
SK 710	B区 DH-DJ-32	残存底長15cm、幅10cmを測る。詳細は本文128頁を参照。	-
SP 708	B区 DH-32	SK-697に切られる。北西側は腰窓部外へと被る。底さ18cm。理土は黒褐色砂質シルト。残存土器腰窓部片1点と西端の腰窓部片とを考えられる点(図BH173-17)が出土。	理土 a
SP 709	B区 DJ-31	SB-740の柱穴。詳細は本文120頁を参照。	理土 a
SK 710	B区 DH-DJ-32	残存長15cm、幅9cmを測る長方形あるいは方形容の土器。SC-670、SP-671-673に切られる。詳細は本文162頁を参照。	理土 a

遺構 番号	調査区	調査所見	地土類型	
SK 711	B IX	DH-31	軸出面で長さ1m、幅0.5mの隅丸方形土壁。SP-706に切られる。詳細は本文162頁を参照。	原土 a
SP 712	B IX	DH-31	SP-687・742に切られる。SC-670に面して検出。円錐ケズリ溝跡が施された條生土壁剥離部小片が2点出土。	原土 a
SK 713	B IX	DI-31	残存長2m、幅0.5m、深さ44cmの隅丸方形あるいは長方形土壁。SK-705・677・678・681・702・709に切られ。SC-689・729・730を認める。詳細は本文164頁を参照。	原土 a
SP 714	B IX	DH-31	SC-750主柱穴。詳細は本文134頁を参照。	原土 a
SP 715	B IX	DI-II-DI-31	立柱痕跡を検出。SP-683に切られる。SK-725・732を切る。詳細は本文174頁を参照。	原土 a
SP 716	B IX	DH-31	立柱痕跡を検出。SK-732を切る。SC-670に切られる。詳細は本文175頁を参照。	原土 a
717	欠番			
SP 718	B IX	DH-DI-32	SK-725・SC-670に切られる。深さ6cm。南西壁はSK-725に切られた欠損部。円形の割り形をもつ。幅62cm、深さ6cm。埋土は黒褐色砂質シルト。に赤い黄褐色土色の小塊が多く混じる。外側に埋土を調整した条脚部分小片が1点、赤・黒褐色小片が1点出土。	原土 a
SP 719	B IX	DI-32	SK-725に切られる。基部の円形の割り形をもち、幅45cm、深さ8cm。黒褐色砂質シルト。に赤い黄褐色砂質土が多く混じる。外東面方向にヘラミガタ。内側ケズリ溝跡を施した条脚部分1点、赤・黒褐色小片が2点出土。	原土 a
SP 720	B IX	DI-31	SC-750主柱穴。SK-725を切る。SC-670・SP-687に切られる。割り形は幅5cmの円形。詳細は本文134頁を参照。	原土 a
SP 721	B IX	DH-31	SC-670に切れる。円形の割り形で、幅60cm、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質シルトに、直径2~3cmの大穴の花崗岩内陣を多く含む。立柱痕跡小片1点、条脚部分1点、高脚脚部分が1点出土。埋土部に凹溝文が甚る高杯(NTJ141)と立柱器の裏の縦線部から剥離部断片(同12)を回復している。	原土 a
SP 722	B IX	DH-DI-31	SK-687・725に切られる。長方形の割り形で、残存部幅70cm、深さ21cm。埋土は黒褐色砂質シルト。に赤い黄褐色砂質土が1大穴の場所で多く混じる。土上部から外側にヘラミガタを施した条脚部分1点、小片1点が出土。土中から立柱痕跡部小片が1点出土。	原土 a
SP 723	B IX	DH-DI-31	立柱痕跡を検出。SP-687・SK-725に切られる。詳細は本文175頁を参照。	原土 a
SP 724	B IX	DI-32	立柱痕跡を検出。SK-678・SK-695に切られる。詳細は本文175頁を参照。	原土 a
SK 725	B IX	DH-DI-31-32	長2.5m、幅約1.7mの隅丸方形土壁。SP-722・SC-729・730を切り。SC-670・SP-676・687・699・700・701・709・715・719・730を切る。SK-732と重なり合うが先端部は不明。詳細は本文164頁を参照。	原土 a
SP 726	B IX	DI-32	円形の割り形で、幅60cm、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質シルト。に赤い黄褐色砂質土が混じる。	原土 a
SP 727	B IX	DI-32	SK-740主柱穴。SP-672に切られる。詳細は本文120頁を参照。	原土 a
SP 728	B IX	DI-31	SC-751の主柱穴。SK-725に切られる。詳細は本文136頁を参照。	原土 a
SC 729	B IX	DI-31	複数をもつながら南北から東に向かって東西に約1.4mの割り形ラインから反対した整式住居跡。深さ12cm。SC-670・SP-677・678・702・709・SK-713・SB-480に切られ。SC-730を切る。詳細は本文131頁を参照。	原土 a
SC 730	B IX	DI-31	南北に約60cmのびる割り形ラインから想定した整式穴在跡。深さ3cm。SC-670・713・729・SK-725・739・SP-696・698に切られ。SC-729を切る。詳細は本文132頁を参照。	原土 a
SP 731	B IX	DI-31-32	SK-740付近。SK-725に切られる。詳細は本文136頁を参照。	原土 a
SK 732	B IX	DI-31	SK-725の周辺不明跡。北西から南東にびらき割り形ラインを約50mm検出したのみで形状は不明。SK-666・684・SP-683・715に切られる。詳細は本文166頁を参照。	原土 a
SK 733	B IX	DI-31-32	割り形が割然としない土壁。SC-730の造成土壁である可能性あり。SC-729・730・SK-729に切られる詳細は本文167頁を参照。	原土 a
SP 734	B IX	DI-31	SC-751の主柱穴。詳細は本文136頁を参照。	原土 a
SK 735	B IX	DI-31	東北に5cm程の割り形ラインを確認したのみで形状不明。深さ17cm。SK-690・SK-705・SK-713に切られる。詳細は本文167頁を参照。	原土 a
SP 736	B IX	DI-31	埋土色砂質土。赤白褐色擦痕をくぐる。黄褐色砂質土の小ブロックを混じる。剥離段階はSP-683とするが重複のため修理跡に因るため番号を付す。SP-688・SK-693を切る。円径8cm、深さ8cm。	原土 a
SP 737	B IX	DI-31	立柱痕跡を検出。詳細は本文175頁を参照。	原土 a
SC 738	B IX	DI-DI-31	埋土の確認のみで割り形ラインは未確認。表面は小さな凸凹が目立つ。SP-679-680-731・SC-689-729-730に切られる。詳細は本文132頁を参照。	原土 a
SK 739	B IX	DI-31-32	残存長2.7m以上。深さ30cm。柱定め3m前後の崩落土の上部。SP-674・696・705・SK-697に切られる。SP-698・SK-729を切る。詳細は本文168頁を参照。	原土 a
SB 740	B IX	DH-DI-31-32	SP-671・681・687・688・709・727・731で検出されると3×3間の埋立柱建物。SP-689・SC-670・SK-725を切る。詳細は本文135頁を参照。	原土 a
SC 741	B IX	DG-38	調査区を整塑で検出した方形の整式穴在居跡。深さ23cm。詳細は本文133頁を参照。	原土 a
SP 742	B IX	DH-31	SP-712に切る。埋土の整塑記録をとりあげた。	-
SB 743	B IX	DH-36	SP-632・634・635・636で検出される1間×1間の埋立柱建物。詳細は本文141頁を参照。	原土 c
SB 744	B IX	DG-35-36	SP-617・618で検出される埋立柱建物。詳細は本文142頁を参照。	原土 a
SP 745	B IX	DH-32	SK-695に切られる。調査段階では、番号をふっていなかったが、整理段階で番号を付す。残存深25cm、深さ5cm。観察データなし。	-
SB 746	B IX	DG-34	SP-618・649で検出される埋立柱建物。詳細は本文141頁を参照。	原土 a
SC 747	B IX	DH-38	北、東、西は既ににより欠損し形状は不明。円柱状跡あるいは整式穴在作居跡の隣接部を検出。詳細は本文123頁を参照。	原土 a
SC 748	B IX	DG-38	方形あるいは長方形あるいは整式穴在作居跡の隣接部を検出。詳細は本文134頁を参照。	原土 a
SC 749	B IX	DI-II-DI-32	SP-692・693で検出される埋立柱建物。詳細は本文143頁を参照。	原土 a
SC 750	B IX	DH-DI-31	SP-714・720を主柱穴とする整式穴在居跡。SK-711に切られる。詳細は本文134頁を参照。	原土 a
SC 751	B IX	DI-31	SP-680・728・734を主柱穴とする整式穴在居跡。詳細は本文135頁を参照。	原土 a
SC 752	B IX	DI-DI-31	SP-676・689・703・704を主柱穴とする整式穴在居跡。詳細は本文137頁を参照。	原土 a

卷末表2 文京遺跡18次調査出土遺物観察表

件番	遺物 No.	調査 区	出土層位・ 遺構	出土状況	種 類	器 種	形状・表面調整・ 鉢土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
図14	1	AK	DT-44・DU-43・ 44K	望遠跡	埋土	調製品	舟丸	重量52g。	4434	25	図版40-5(牙真)、 40-6(牙真)、 40-7(牙真)
	2	AK	DU-41K	望遠跡	埋土	調製品	圓筒	薄い鋼板を重ねてつくる。重量11g。	4435	26	図版40-8(牙真)、 40-9(牙真)
	3	AK	DS-42K	望遠跡	埋土	調製品	圓筒	2枚の底成。薄い鋼板を重ねてつくる。残存重量7.8g。	4436	26	図版40-9
	4	AK	望遠跡	埋土	鉢・調製品	ペトト全 員?	圓筒の底板を取り曲げ、底面に薄い鋼板を取り付ける。 残存重量1.2g。	4437	25		
	5	AK	DX-41-43K	機械部	石器	打制石器	サクイド型。先端部を削り平ら。平底式。両存重量27g。	4429	26	図版38-2	
図16	1	A区	調査区東半部	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/6ほどの中片。口部は一側底の内外面は横板模ナ。外底面は直線斜め切り盤が残る。	4215	12		
	2	A区	DS-45区	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中片。底部外縁は回転後ナダ。内面は直線ナ。	4216	12		
	3	A区	DR-45K	II-2-①層	土師器	陶片	内外面ともに直線模ナ。	4222	12		
	4	A区	調査区東南隅	II-2-①層	土師器	杯?	全周の1/5ほどの中部破片。内外面ともに丸みが残る。	4217	12		
	5	AK	DU-44区	II-2-①層	水田直上	土師器	杯	全周の1/5ほどの中片。口部は一側底の内外面は直線模ナ。外底面も内面も段差があるが底面調整不明。	4218	12	
	6	AK	DT-42区	II-2-①層	SS-17直上	土師器	杯	全周の1/5ほどの中片。底部外縁は横板模ナ。内外面ともに丸みが残る。	4209	12	
	7	AK	DR-DS-45K	II-2-①層	段落ち都木田 直上	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中部破片。高台部の内外面は横板模ナ。	4223	12	
	8	AK	調査区東東部	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/10ほどの中片の底片。内面は丸みが底面調整不明。	4222	12		
	9	AK	DS-DT-45区	II-2-①層	SS-2直上	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部底面の底片。高台部底面は横板模ナ。内面は丸みが底面調整不明。	4212	12	
	10	AK	調査区東東部	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部底面の底片。高台部底面は横板模ナ。内面は丸みが付けられ。	4221	12		
	11	AK	DX-44K	II-2-①層	水田直上	土師器	瓶	内面と外底面が黒色であるが、焼成不良のための黒色と手付の黒色と青黒色した。全周の1/4前後の底面底面の範囲。外底面は不定方向のナダ。内面は丸みが底面調整なし。	4214	12	
	12	AK	DY-DZ-44-45 区	II-2-①層	SS-23直上	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部～底部の底片。高台部底面は横板模ナ。外底面は不定方向のナダ。内面は丸みが底面調整不明。	4208	12	
	13	AK	調査区東東部	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中台部～底部の底片。高台部底面は横板模ナ。他の部位は丸みが底面調整不明。	4220	12		
	14	AK	DV-42区	II-2-①層	水田直上	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中台部底面の底片。高台部底面は横板模ナ。内面は丸みが底面調整不明。	4202	12	
	15	AK	DS-DT-45K	II-2-①層	SS-2直上	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部～底部の底片。外底面は横板模ナ。内面は丸みが底面調整不明。	4213	12	
	16	AK	DU-42区	II-2-①層	SS-17直上	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中台部底面の底片。外底面は横板模ナ。外底面は不定方向のナダ。内面は丸みが底面調整不明。	4211	12	
	17	AK	調査区東東部	II-2-①層	土師器	瓶	高台部底面の1/4ほどの中台部底面の底片。高台部底面はやや不確定。内底面ともに丸みが底面調整不明。	4223	12		
	18	AK	調査区東東部	II-2-①層	水田直上	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部底面の底片。内底面ともに丸みが底面調整不明。	4206	12	
	19	AK	調査区東半部	II-2-①層	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中台部～底部の底片。高台部底面は横板模ナ。外底面は不定方向のナダ。内面は丸みが底面調整不明。	4219	12		
	20	AK	DY-45区	II-2-①層	段落ち都木田 直上	土師器	瓶	底で4つくり。全周の1/5ほどの中台部底面の底片。外底面は横板模ナ。内面は丸みが底面調整不明。	4207	12	
	21	AK	DU-42区	II-2-①層	SS-17直上	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中台部下半～高台部底面の底片。内底面ともに丸みが底面調整不明。	4210	12	
	22	AK	DV-42K	II-2-①層	黑色土器	瓶	両面土器。外底面は丸みが底面調整不明。内面は部分的にミガ付仕上げの痕跡が残る。	4224	12		
	23	AK	DW-DX-45K	II-2-①層	SS-21直上	黑色土器	内底面。口縁は不確定。外底面は横板模ナ。底部下には出脂痕が残る。内面はミガ付仕上げ。	4233	12		
	24	AK	DS-DT-45K	II-2-①層	SS-2上面	黑色土器	両面土器。外底面は丸みが底面調整不明。内面は部分的にミガ付仕上げの痕跡が残る。	4225	12		
	25	AK	DS-DT-45K	II-2-①層	SS-2直上	黑色土器	内底面。全周の1/5ほどの中台部底面。外底面は横板模ナ。内面は丸みが底面調整不明。	4204	12		
	26	AK	DS-42K	II-2-①層	瓦質土器	甕	肩部の痕跡。外底面は横板模ナ。内面には平行条溝の圧痕が残る。その後、他のア仕上げを行う。	4226	12		
	27	AK	DR-DS-45K	II-2-①層	段落ち都木田 直上	白磁	中国白磁。内底面とも全面施釉。底部外縁は回転ケズリ。	4319	12	図版33-⑦	
	28	AK	DR-DS-41-42 K	II-2-①層	SS-16上面	白磁	中国白磁。内底面とも全面施釉。底部外縁は回転ケズリ。底部下には出脂痕が部分的に付着。	4330	12	図版33-④	
	29	AK	DS-45K	II-2-①層	白磁	中国白磁。内底面とも全面施釉。	4318	12	図版33-②		
	30	AK	DX-43区	II-2-①層	段落ち都木田 直上	白磁	中国白磁。底部下には出脂痕が付着。	4321	12	図版33-⑤	
	31	AK	DY-DU-45K	II-2-①層	段落ち都木田 直上	白磁	中国白磁。底部下には出脂痕が付着。	4324	12	図版33-⑥	

件番	遺物 No	調査 区	出土場所・ 遺構	出土状況	種 別	器 様	形態・器形調整・粘土・焼成などの特徴	遺物 登録番号	コンテナ番号	備考
国16	32	AK DT-42K	II - 2 - ①層	SS-17上面	白磁	碗	浅く、内面底とともに後削。二次的な火熱を受けている。	4323	12	国版33-⑦
	33	AK DW-DX-42K	II - 2 - ①層	青白磁	瓶	合子瓶。口縁端部と瓶底部下半の内面は露胎のままで、他は完結。	4322	12	国版33-⑧	
	34	AK 調査区東半部	II - 2 - ①層	青白磁	瓶?	底はやや陥没しておびただし白磁。内外面ともに後削。大根の入りが見られる。	4322	12	国版33-⑨	
	35	AK 調査区東南部	II - 2 - ①層	瓶底器	瓶	瓶底周辺の破片。外表面は青磁。内面は丸みが進み露胎不規。	4226	12		
	36	AK 調査区東南部	II - 2 - ①層	瓶底器	瓶	瓶底の半一部分の1/4ほどの破片。瓶底の内外面は後ナデ。内底はナデ。外底裏には指紋によるかなり強い横ナデ跡が残されている。	4227	12		
	37	AK DU-DV-45K	II - 2 - ①層	SS-3直上	瓶底器	甕	内底面とともに露胎ナデ。頭の付け根には幅が狭い強い横ナデ跡が現れている。	4228	12	
	38	AK DS-DT-45K	II - 2 - ①層	SS-2上面	瓶底器	甕	内底面とともに露胎ナデ。	4229	12	
	39	AK DT-41K	II - 2 - ①層	木桶表面直上	陶生土器	甕	全頂の1/8ほどの平底破片。内外面ともに丸みが進み露胎不規。	4224	12	
	40	AK 調査区東北部	II - 2 - ①層		陶器	甕	口縁部を凌ぐ、字形に寄り曲げ。上面に2条の螺旋の凹線が残る。口縁と直上部の内面には暗赤褐色の施色を施す。口縁部下部は黒褐色で、頭部外縁は露胎のまま。	4238	12	
	41	AK DS-41-42K	II - 2 - ①層		陶器	甕	扁平な作部の一部を斜めに配置して固定用の穴の孔を穿孔する。下部と上部の一部を施赤褐色の釉を施す。	4237	12	
国21	1	AK DT-45K	SD-8 - 9 + 10 合流部	堆土	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部の破片。高台部底面は横ナデ。地は丸みが進み調整不規。	4282	12	
	2	AK DT-45K	SD-9	堆土下部	黑色土層	塊	四角1/4弱の高台部の破片。内面ともに丸みが進み調整は不明。	4189	12	
	3	AK DX-45K	SD-10	堆土	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部の破片。外表面は露胎ナデ。内面はナデ仕上げ。	4203	12	
	4	AK DX-45-4 - 5 EK	SD-10	溝底	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部～底盤の破片。高台部底面は横ナデ。外底面はナデ。内面はナデ仕上げか。	4188	12	
	5	AK DT-43K	SD-11	堆土	土加器	塊	底付から見えた。全頂の1/7ほどの破片。内外面ともに同様露胎ナデ。	4193	12	
	6	AK DW-DX-43K	SD-12	堆土	土加器	塊	口縁部の小片。内外面ともに同様露胎ナデ。	4199	12	
	7	AK DS-43K	SD-12	堆土	土加器	塊	全頂の1/6ほどの高台部破片。内外面ともに丸みが進み調整不規。	4196	12	
	8	AK DT-43-16K	SD-12	堆土下部	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部～底盤の破片のため、高台部底面は複数ナデ。内面はミガラ仕上げ。	4194	12	
	9	AK DT-43K	SD-12	堆土下部	土加器	塊	高台部周囲の1/8 - 1/7の破片のため、高台部底面は不確定。内外面ともに丸みが進み、調整不規。	4241	12	
	10	AK DV-43K	SD-12 - 25 合流部	堆土	土加器	塊	北側の大粒の難を含むが、地土自体は精選され、赤系のつくり。内面面ともに同様露胎ナデ。	4198	12	
	11	AK DV-43K	SD-12 - 25 合流部	理土	土加器	塊	全頂の1/6弱の破片。内面ともに丸みが進み、調整は対照的でない。	4199	12	
	12	AK DV-43K	SD-12 - 25 合流部	堆土下部	白磁	塊	中田原。	4326	12	
	13	AK DT-43K	SD-12 - SS-14 園水口	堆土	瓶底器	甕	外縁はカキモの調整。内底部の角を指面で押さえ、ナデ仕上げする。	4197	12	
	14	AK DY-45K	SD-24	堆土下部	土加器	塊	全頂の1/6弱の高台部破片。外表面は丸みが進み調整不明。高台内面と内面は不定方向のナデか？	4183	12	
	15	AK DY-45K	SD-24	堆土	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部～底盤の破片。高台部底面は横ナデ。外底面および内面はミガラ仕上げ。	4187	12	
	16	AK DY-42K	SD-24	堆土	土加器	塊	全頂の1/8弱の高台部破片。内外面ともに丸みが進み調整不規。	4185	12	
	17	AK DY-45K	SD-24	堆土	土加器	塊	全頂の1/6弱の高台部破片。外表面は高台部を含めて横ナデ。内面は丸みが進んでいるが、不定方向のナデ仕上げか？	4184	12	
	18	AK DY-42K	SD-24	堆土	黑色土層	塊	内底面・底盤の1/5弱の高台部～底盤の破片。高台部底面は横ナデの撒き。内面はミガラ仕上げ。	4242	12	
	19	AK DY-45K	SD-24	堆土	黑色土層?	塊	内底面・底盤の1/4弱の高台部～底盤の破片。高台部底面は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は丸みが進み調整不規。	4186	12	
	20	AK DT-41K	SD-18	堆土	黑色土層	塊	肩付・底盤。全頂の1/6弱の高台部破片のため、高台部底面はやすべて不確定。内外面ともに、黒色の器表記がほとんど残る。内面は丸みが進み、調整不規。	4200	12	
	21	AK DV-44K	SD-25	堆土下部	土加器	塊	全頂の1/7弱の高台部破片。その他の高台部底面はやすべて不確定。内外面ともに丸みが進み、調整不規。	4191	12	
	22	AK DV-44K	SD-25	溝底付近	土加器	塊	全頂の1/4弱の高台部～底盤の破片。高台部底面は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は丸みが進み調整不規。	4192	12	
	23	AK DV-42K	SD-25	堆土下部	瓦器	塊	全頂の1/6弱の高台部～底盤の破片。内外面ともに丸みが進み調整不規。	4190	12	
	24	AK DY-44K	SD-29	溝底	土加器	塊	全頂の1/8 - 1/7の高台部破片のため、高台部はやや不確定。内外面ともに丸みが進み、調整不規。	4182	12	
	25	AK DS-45K	SS-1 - 2(水口)	堆土	土加器	塊	全頂の1/6弱の高台部～底盤下の破片。外表面は圓板ナデ。	4206	12	

番号	遺物 No.	調査区	出土位置・ 遺構	出土状況	種別	器種	形態・表面調査・ 土層・発達などの特徴	着物登 録番号	コンテ ナ番号	備考	
B021	26	A区	DY-45区	SS-23東側水口	地中下部	土器部	瓦	全周の1/6ほどが高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナギ。	4201	12	
B022	1	A区	DY-42-11・16・ 21区	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	内外面ともに施軸線ナギ。	4229	12		
2	A区	DY-45区	SS-20	耕作土層	土器部	瓦	外側は回転施ナギ。内面は丸が造み調整不明。	4260	12		
3	A区	DY-45区東半部	SS-22	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	全周の1/4強の底盤破片。外面は横ナギ。内面は斜軸線ナギ。外側には混れが生じている。	4226	12		
4	A区	DS-43区	SS-13	耕作土層	土器部	瓦	全周の1/4強の底盤破片。内外面ともに丸が造み調整不明。	4261	12		
5	A区	DW-45区	SS-20	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	高台部周辺の全周の1/6ほどの中段。高台部周辺は横ナギ。内面は丸が造み調整不明。	4258	12		
6	A区	DY-45区東半部	SS-22	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	高台部周辺の1/4強の底盤。外面は横ナギ。内面は丸が造み調整不明。	4254	12		
7	A区	DY-43区	SS-32・33	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	高台部周辺の1/4強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4250	12		
8	A区	DY-44東半部	SS-27	耕作土層下部 ～壁土層	土器部	瓦	高台部周辺の全周の1/4強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4245	12		
9	A区	DY-45区	SS-20	耕作土層	土器部	瓦	高台部周辺の全周の1/2強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4251	12		
10	A区	DY-44区	SS-23	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	高台部～底盤の全周の1/4強の破片。高台部周辺は横ナギ。外側面は丸が造み調整不明。内面は丁寧なナギ仕上げ。	4253	12		
11	A区	DX-43区	SS-32・33	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	高台部周辺の全周の1/5強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4214	12		
12	A区	DW-44区	SS-26	耕作土層	土器部	瓦	開口半一下～高台部周辺の全周の1/4強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4217	12		
13	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	全周の1/4強の高台部～底盤の底盤。高台部周辺は横ナギ。外側面は横ナギ。内面は丸が造み調整不明。	4246	12		
14	A区	DU-43区	SS-14	耕作土層	土器部	瓦	高台部～底盤の全周の1/4強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4249	12		
15	A区	DY-45区	SS-20	耕作土層	土器部	瓦	高台部周辺の全周の1/5強の底盤。内面は丸が造み調整不明。	4252	12		
16	A区	DU-43区	SS-14	耕作土層	土器部	瓦	開口下半～高台部周辺の全周の1/4強の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4243	12		
17	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	ほぼ回転する高台部～底盤の底盤。高台部周辺は横ナギ。外側面も横ナギ。内面は丸が造りよく調節不明。	4249	12		
18	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床 土層	土器部	瓦	全周の1/4強の底盤破片。内外面ともに丸が造み調整不明。	4255	12		
19	A区	DW-44区	SS-26	耕作土層	土器部	瓦	ほぼ回転する底盤破片。内外面ともに丸が造み調整不明。	4257	12		
20	A区	DY-41区	SS-19	耕作土層	土器部	瓦	往々高台～底盤の底盤周辺の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4258	12		
21	A区	DX-40区	SS-22	耕作土層	黑色土層	瓦	往々高台。内外面ともに丸が造み調整不明。	4262	12		
22	A区	DY-43区	SS-33	耕作土層～床 土層	黑色土層	瓦	往々高台。内外面ともに丸が造み調整不明。	4263	12		
23	A区	DS-44区	SS-2	耕作土層	白磁	瓦	中田原。	4331	12	HIM34-②	
24	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	白磁	瓦	中田原。内外面とも全周輪廓で、細かな質人がみられる。	4317	12	HIM34-③	
25	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	白磁	瓦	中田原。内外面とも全面剥離。	4325	12	HIM34-④	
26	A区	DU-42区	SS-17	耕作土層～床 土層	須恵器部	瓦	全周の1/4強の底盤下半～高台部周辺の底盤。高台部周辺は横ナギ。高台部付近付近は強くへらナギし、断面下半は丸棒状な底盤。内面は横ナギ。	4271	12		
27	A区	DX-45-12区	SS-22	耕作土層	須恵器質土器	瓦	高台部～底盤の付近を除く箇所。断面外縁は横ナギ。内面は横ナギ。	4266	12		
28	A区	DZ-45区	SS-23	耕作土層～床 土層	須恵器質土器	瓦	全周の1/4強の底盤下半～高台部周辺の底盤。高台部周辺は横ナギ。高台部付近付近は強くへらナギし、断面下半は丸棒状な底盤。内面は横ナギ。	4256	12		
29	A区	DY-44区	SS-7	耕作土層	須恵器質土器	瓦	全周の1/4強の底盤下半～高台部周辺の底盤。平手巻頭のタキ目が残る。底盤はよく焼けた状態で、表面は粗面。	4267	12		
30	A区	DY-43区	SS-15	耕作土層	須恵器	瓦	身薄部分。内外面ともに横ナギ。	4273	12		
31	A区	DS-45区	SS-2	耕作土層	須恵器	瓦	全周の1/4強の上昇～底盤部破片。口沿から共通の口縁部と判明した。内外面ともに横ナギ。外面上には自然模様が浮く付着。	4272	12		
32	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	須恵器	瓦	内外面ともに横ナギ。	4265	12		
33	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床 土層	須恵器本体	瓦	ほぼ全周の割合状の上昇底盤部。外側は腹側方向の削落によるナギの跡にナギナギ仕上げ。内面には指擦によるナギ調整痕が部分的に残る。	4270	12		
34	A区	DY-42区	SS-17	耕作土層～床 土層	須恵器本体	瓦	全周の1/4強の底盤周辺の底盤。外側はナギと考えられるが、丸が造り済み、判断どしない。内面はナギ仕上げ。	4269	12		
35	A区	DS-42区	SS-14・17周回 壁	須恵器本体	土器部	瓦	全周の1/6ほどが底盤周辺の底盤。底径はやや不確定。内外面ともに丸が造み調整不明。	4267	12		
B023	1	A区	DS-42区	SS-14・17周回 壁	須恵器本体	土器部	瓦	内外面ともに丸が造み調整不明。	4308	13	
2	A区	DU-41-23・24区	SS-17・SD-18周 壁	須恵器本体	土器部	瓦	全周の1/6ほどが断面付近下半～底盤の底盤。内外面ともに丸が造み調整不明。	4306	13		
3	A区	DS-42区	SS-14・17周回 壁	須恵器本体	土器部	瓦	全周の1/6ほどが底盤周辺の底盤。底径はやや不確定。内外面ともに丸が造み調整不明。	4267	13		

探区	遺物 No	調査区	出土位置・ 遺構	出土状況	種 別	器 形	形狀・器面調整・黏土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンサ ル番号	備 考
0523	4	A区 区	DW-43 - 24 - 25 SD-12北 壁 留 跡	町野本体	土師器	壺?	ほぼ全個の高台部破片。外側は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4310	13	
	5	A区 区	DW-43 - 44K SS-26東側壁野	町野本体	土師器	柱状高台 土器	全周の1/3ほどのが高台部近くの破片。外側は荒れが進み調整不明。	4309	13	
	6	A区 区	DX-45区東半部 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどの高台部周辺の破片。外側ともに荒れが進み調整不明。	4289	13	
	7	A区 区	DY-44K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどの高台部周辺の破片。外側は荒れが進み調整不明。	4297	13	
	8	A区 区	DU-42K 周	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどのが高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。内面は変なナナ仕上げ。	4295	13	
	9	A区 区	DW-43K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどの高台部周辺～底部の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4302	13	
	10	A区 区	DU-43K 周	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどのが高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4294	13	
	11	A区 区	DX-45K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	剥離? 半～底部の約1/2の破片。外側ともに荒れが進み調整不明。	4292	13	
	12	A区 区	DU-43K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどの高台部周辺の破片。外側は模ナデ。内面は丁寧なナナ仕上げ。	4296	13	
	13	A区 区	DW-43-34 - 25K SD-12北 壁 留 跡	町野本体	土師器	壺	剥離? 半～底部の全周の高台部周辺の破片。外側は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4281	14	
	14	A区 区	DX-43 - 44K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/3ほどの高台部周辺下部～底部の破片。高台部周辺はやや大きめ。外側ともに荒れが進み調整は無然としないが、外側は模ナデ。	4301	13	
	15	A区 区	DW-45K SS-20 - 21南側 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/6ほどのが高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4303	13	
	16	A区 区	DT-43K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/5ほどのが高台部周辺下部～高台部周辺の破片。外側ともに荒れが進み調整不明。	4291	13	
	17	A区 区	DT-44-21 - Z2区 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/5ほどのが高台部周辺の破片。荒れが進み調整不明。	4290	13	
	18	A区 区	DY - DZ-43K SS-20 - 34南側 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/5ほどのが高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4300	13	
	19	A区 区	DW-45K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/4-1/3の高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4293	13	
	20	A区 区	DU-43K SS-15北側壁野	町野本体	土師器	壺	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。外側は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4299	13	
	21	A区 区	DS-43K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/6ほどの高台部周辺の破片。外側ともに荒れが進み調整不明。	4305	13	
	22	A区 区	DV-43K 周壁跡	町野本体	土師器	壺	全周の1/4の高台部周辺～底部の破片。高台部周辺は模ナデ。内面は丁寧なナナ仕上げ。	4304	13	
	23	A区 区	DV-42K SS-35西側壁野	町野本体	土師器	壺	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。外側は模ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4298	13	
	24	A区 区	DW-43-39 - 25K SD-12南側 周壁跡	町野本体	黑色土器	壺?	四面～底面。外側は部分的にミガキ痕が残る。内面は荒れが進み調整不明。	4313	13	
	25	A区 区	DW-44K 周壁跡	町野本体	黑色土器	壺	四面～底面。外側～外面上部は模ナデ。下部には擦痕痕が残る。内面は外方向へのミガキ上げ。	4311	13	
	26	A区 区	DX-45K SS-22南側壁野	町野本体	黑色土器	壺	内側土器。器の底はやや不規則。外側は模ナデ。内面には部分的にミガキ痕を残せる。	4312	13	
	27	A区 区	DY-44K SS-30 - SD-29 周壁跡	町野本体	白磁	壺	中田原胎。外側ともに全面磨輪。	4316	13	国B34-②
	28	A区 区	DS ~ DU-43K SS-14北側壁野	町野本体	白磁	壺	中田原胎。ほぼ全周の高台部破片。外側は落葉のまま。内面は全面磨輪。剥離下部下面～高台部は横板ヘリケツリ。外側底は回転抹出。内面には擦痕による僅かなナナ仕上げがある。	4315	13	国B34-②
	29	A区 区	DY-42K SS-39南側壁野	町野本体	青磁	壺?	同安泰系青磁。	4415	13	国B34-③
	30	A区 区	DV-45K 周壁跡	町野本体	青磁	壺	徹底系青磁。胎は灰白色。	4414	13	国B34-⑦
	31	A区 区	DT-41K 周壁跡	町野本体	黑泥器	壺	内外面ともに模ナデ。	4314	13	
	32	A区 区	DW-45K 周壁跡	町野本体	土師質土器	剥離片等。器体の無さは不明。内面は模ナデ。内面には部分的にミガキ痕を残せる。	4339	13		
0524	1	A区 区	DW-43区北西 SS-31	床土層	土師器	壺	剥離の約1/3の高台～底盤の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4283	13	
	2	A区 区	DS-42K SS-16	床土層	土師器	壺	剥離の1/3ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4285	13	
	3	A区 区	DV-42K SS-35	床土層	土師器	壺	高台部周辺の1/6の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4280	13	
	4	A区 区	DT-42K SS-17	床土層	土師器	壺	剥離の1/3ほどの高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4276	13	
	5	A区 区	DS-42K SS-16	床土層	土師器	壺	高台～底盤の全周の1/5の破片。高台部周辺は模ナデ。他に荒れが進み調整不明。	4284	13	
	6	A区 区	DY-42K SS-38	床土層	土師器	壺	剥離? 半～底部の全面を占める破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4274	13	

番号	遺物 No.	調査区	出土層位・ 遺物	出土状況	種別	器種	形状・器形調査・歴史・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンサ ル番号	備考	
BK24	7	A区	DW-45区	SS-22	床土層	土器器	碗	側面下平～底部のはば全周の破片。内外面ともに変形が進み調整不明。	4275	13	
	8	A区	DW-45区	SS-33	床土層	土器器	碗	高台周辺の1/4箇の破片。内外面ともに変形が進み調整不明。	4277	13	
	9	A区	DZ-45区	SS-34	床土層	土器器	碗	全周約1/5ほどの高台周辺の破片。内外面ともに変形が進み調整不明。	4286	13	
	10	A区	DX-45・DY-45 区	SS-22	床土層最下部	白磁	瓶	中国白磁。内面と外腹側底部上半まで施釉。底部下平外 面は露胎のみ。	4287	13	DX-45区 SS-22罐 作土層出土地点 (R-254) と提合。 平安。国版34-①。
	11	A区	DY・DZ-43・44 区	SS-30	床土層	白磁	瓶	中国白磁。内面と外腹側底部上半まで施釉。底部下平外 面は露胎のみ。	4288	13	
BK25	1	A区	DW-45区 開挖時	SS-21・SD-10	鉢器	不明	横断面、断面ともにわざと1孔を抜く三角形の鉢片。 蓋付か製作方法の可能性が考えられる。	4466	26	国版40-⑦	
BK26	1	A区	DT・DU-43・44 区	II・2・②解 水田面直付	鉢器	刀子	刃部と柄の大差分が失せたため、刃根の有無は不明。 刃部は鋸齒形で二等边三角形を呈する。	4465	26	国版40-⑥	
	2	A区	DT・DU-43・44 区	II・2・②解 SS-100上面	鉢器	直	鋸齒形が其の形を保つ直状の鉢片の一端を1mmほど直 角に削て鋸形とする。	4463	26	国版39-⑩(写真) 国版40-⑩(X線)	
BK27	1	A区	DU-44区	II・2・②解	土器器	瓶	金剛の1/4～1/5箇の破片。外腹～外底面は変形が進み調整 不明。内面は回転模様ナデ。	4011	10		
	2	A区	DW-41区	II・2・②解	土器器	瓶	金剛の1/4箇の破片。内面は変形が進み調整不明。	4012	10		
	3	A区	DY・DT-43H 区	II・2・②解	土器器	瓶	金剛の1/2箇の破片。内外面ともに変形が進み、調整は 不明。	4004	10		
	4	A区	DS・DT-43・45 区	II・2・②解 SS-108上面	土器器	直	全周約1/3の破片。内面とともに直ナデ。	4086	10		
	5	A区	DV-42・43区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/3の破片。内面とともに直ナデ。	4006	10		
	6	A区	DS-45区	II・2・②解	土器器	直	特に土器は直角がよく現じるが、直でのつくり、外腹は 回転模様ナデ。内面はミガキ仕上げ。にいよい黄褐色の焼き 上がり。	4020	10		
	7	A区	DS-44区	II・2・②解	土器器	直	内面とともに回転模様ナデ、灰白色の焼き上がり。	4017	10		
	8	A区	DS-43	II・2・②解 水田面上	土器器	直	内面とともに変形が進み調整不明。灰白色の焼き上がり。	4023	10		
	9	A区	DT・DV-45区	II・2・②解 SS-113上面	土器器	直	灰白色の焼き上がり。外腹は横ナデ。内面はヘラ状工具 で削り落すような調整痕が残る。	4095	10		
	10	A区	DV～DX-44- 45区	II・2・②解 SS-115上面	土器器	直	外腹は回転模様ナデ、内面は部分的にミガキ板がみられる。	4093	10		
	11	A区	DW-42区	II・2・②解 水田面直付	土器器	直	内面とともに直回転模様ナデ。外腹には直ナデ。	4024	10		
	12	A区	DV-43区	II・2・②解	土器器	直	内面とともに変形が進み調整不明。	4022	10		
	13	A区	渾金区東部	II・2・②解 下部	土器器	直	外腹は対角に削して、調節工具。内面は丁寧な横ナデ仕上 げ。	4021	10		
	14	A区	II・2・②解 SS-110上面	土器器	直	内面とともに直ナデ。	4065	10			
	15	A区	DS-43区	II・2・②解 水田面直付	土器器	直	直でのつくり。背面は回転模様ナデ。直では不規則。	4015	10		
	16	A区	DS-43区	II・2・②解	土器器	直	直でのつくり。背面は回転模様ナデ。内面にはミガキ板が 部分的に見える。やや黄味みをおびた灰白色の焼き上がり。	4018	10		
	17	A区	DS-43区	II・2・②解	土器器	直	回転模様は横ナデ。他は変形が進み調整不明。口縁は やや不規則。	4064	10		
	18	A区	DU-43区	II・2・②解	土器器	直	内面とともに回転模様ナデ？ 灰白色の焼き上がり。	4016	10		
	19	A区	DV～DX-44- 45区	II・2・②解 SS-115上面	土器器	直	全周約1/10下の破片で、直底は不規則。側面外腹は横 ナデ、内面は不規則なナデ。外腹はナデ仕上げのため、切り離し方法が不明。	4068	10		
	20	A区	DT-43区	II・2・②解 水田面直付	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹は変形が進み調整不明。内 面は横ナデ仕上げ。	4008	10		
	21	A区	DS-43区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹は回転模様ナデ、内面はナデ？ 直底は横ナデ仕上げ。	4002	10		
	22	A区	DV-44区	II・2・②解 水田面直付	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹ともに変形が著しく、直 底は不規則。黄褐色の焼き上がり。	3998	10		
	23	A区	DV-44区	II・2・②解 SS-110上面	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。側面外腹は変形が進み調整不 明。内面は回転模様ナデ。	4087	10		
	24	A区	DV-43区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。内外面ともに変形が進み調整不 明。	4013	10		
	25	A区	DS-44区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。器形が歪んでいたため、直底は やや不規則。内面とともに変形が進み調整不明。	4003	10		
	26	A区	DT-43区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。厚でのつくり。内面とともに変 形が進み調整不明。	4007	10		
	27	A区	DT-42区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/1～1/8の破片。外腹は横ナデ。内面はナデ。	3984	10		
	28	A区	DT-42区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10強の破片。高台周辺に後ナデの直跡が残る 以外、器形の変形が進み調整不明。	3990	10		
	29	A区	DT-43区	II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹は変形が進み調整不明。内 面はナデ仕上げか？	3973	10		
	30	A区	DT-43区	II・2・②解 水田面上	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹は高台部を中心として横ナ デ。内面は変形が著しく調整不明。	4363	10		
	31	A区		II・2・②解	土器器	直	全周約1/10ほどの破片。外腹は高台部をや心として横ナ デ。内面は変形が著しく調整不明。	4361	10		

編號	被物 No.	調査 区	出土解説 遺構	出土状況	種 別	器 種	形狀・器面調査・粘土・焼成などの特徵	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
1027	32	A区	DS-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱の破片。内外面ともに焼れが進み、調整不明。	3967	10	
	33	A区	DW-45区	H - 2 - ③層	SS-117上面	土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。外側の高台周辺は焼けた。内面は焼れが進むが、ナデ仕上げか?	4362	10	
	34	A区	DU-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み、調整不明。	3965	10	
	35	A区	DU - DV-43 - 45 区	H - 2 - ③層	SS-110上面	土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調整不明。	4360	10	
	36	A区	DS-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。外側は焼れが進み調整不明。内面はナデ仕上げか?	3971	10	
	37	A区	DS-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内面は調査したまま。内外面ともに焼れが進むが、調査不明。	3969	10	
	38	A区	DT-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。外側は焼けた。内面はナデ仕上げか? 器底が焼れ、剥落でしない。	3994	10	
	39	A区	DV-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査は不明。	3993	10	
	40	A区	DU-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。外側は調査したまゝ。内面はナデ仕上げ。	3980	10	
	41	A区	DT-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。外側は焼けた。内面はナデ仕上げ。	3985	10	
	42	A区	DU - DV-43 - 45 区	H - 2 - ③層	SS-110上面	土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。内面は焼れが進み調整不明。	4073	10	
	43	A区	DT-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。器底が歪んでいるため、底元底径は少しあるか? 外側は調査したまゝ。内面はナデ仕上げ。	3976	10	
	44	A区		H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/3弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調整不明。	4090	10	
	45	A区	DT-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。外側は焼れが進み調整不明。高台～外底面は焼けた。内面はナデ仕上げか?	3970	10	
	46	A区	DT - 42 - 43 - DV-43区	H - 2 - ③層	SS-106上面	土師器	燒	1/12全周の破片。削面外縁～高台周辺は焼けた。内面はナデ仕上げ。	4359	10	国司34-③
	47	A区	DV-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。外側は調査したまゝ。内面はナデ仕上げ。	3981	10	
	48	A区	DS-45区	H - 2 - ③層	水田面焼山崎	土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。高台部～外底面は焼けた。内面は焼れが進み調査不明。	3983	10	
	49	A区	DT-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	3972	10	
	50	A区	DV - DX-44 - 45区	H - 2 - ③層	SS-115上面	土師器	燒	全周の1/2弱ほどの破片。灰白色の焼き上がり。内外面ともに焼れが進み調査不明。	4096	10	
	51	A区	DT-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/5～1/6の破片。外側は調査したまゝ。内面はナデ仕上げ。	3979	10	
	52	A区	DV-44区	H - 2 - ③層	SS-110上面	土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	4085	10	
	53	A区	DS-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/7ほどほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	3974	10	
	54	A区	DU-44-16区	H - 2 - ③層	水田面直上	土師器	燒	全周の1/3の破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	3988	10	
	55	A区	DS-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6の破片。内外面ともに器底が焼れ調査不明。	3985	10	
	56	A区	DV-44区	H - 2 - ③層	SS-110上面	土師器	燒	全周の1/3ほどの破片。	4091	10	
	57	A区	DT-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/3弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進む。外側はナデ仕上げか? 内面は調査不明。	3966	10	
	58	A区	DS-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/7ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	3982	10	
	59	A区	DS-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	3992	10	
	60	A区	DU-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。外側は焼けた。内面はミガキに近い丁寧なナデ仕上げ。	3991	10	
	61	A区	DR - DS-43 - 44 区	H - 2 - ③層	SS-107上面	土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。削面下平はハラ棒工具で焼けた。内面にはごく一部にミガキがみられる。	4084	10	
	62	A区	DS-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6ほどの破片。器底の歪みが著しい。内外面ともに焼れが進み、調査不明。	4014	10	
	63	A区	DS-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに焼れが進み、調査不明。ただし、内面はナデ仕上げの可能性あり。	3973	10	
	64	A区	DS-42区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/4弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み、調査不明。	3989	10	
	65	A区	DV-44区	H - 2 - ③層	水田面直上	土師器	燒	全周の1/6弱ほどの破片。内外面ともに焼れが進み、調査不明。	3987	10	
	66	A区	DV-44区	H - 2 - ③層	SS-110上面	土師器	燒	外側はナデ仕上げによる回転ナデ。	4083	10	
	67	A区	DU-44区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/6ほどの破片。外側は焼けた。外底面はナデ仕上げの方法で、切り離し方法は不明。内面は焼れが進み調査不明。	3997	10	
	68	A区	DR-43区	H - 2 - ③層		土師器	燒	全周の1/3の破片。外側は焼けた。外底面はナデ仕上げの方法で、切り離し方法は不明。内面は焼れが進み調査不明。	4000	10	

標名	遺物 No	調査区	出土部位・ 遺物	出土状況	種類	器種	形状・器面調査・ 土色・成形などの特徴	遺物登 録番号	コンサ ルナンバー	備考
B27	69	A区 DT-43区	I - 2 - ③層		上部器	縦	全周する縦筋。外側は丸みが進み調整不明。内面は凹面による内張りナダ。	3995	10	
	70	A区 DU-44区	I - 2 - ③層		上部器	縦	全周のI-3-I-4の痕跡。かなり厚めのつくり。外側は丸みが進み調整不明。内面は乱層な断面によるナダ。器色の違い上がり。	4001	10	
	71	A区 DS-43区	I - 2 - ③層		上部器	縦	全周のI-4の痕跡。内外面ともに丸みが進み調整不明。	3999	10	
	72	A区 DT-42区	I - 2 - ③層		上部器	縦	器底の芯部は黒色の黒化層に埋まる。	4000	10	
	73	A区 DV ~ DX-44・ 45区	I - 2 - ③層	SS-115上面	黑色土器	縦	内底に凹、外側へ口部周辺は横ナダ。内面はミガキ仕上げ。	4108	10	
	74	A区 DS・DT-42・43 区	I - 2 - ③層	SS-105上面	黑色土器	縦	内底ナダ。外側へ口部周辺は横ナダ。内面はミガキ仕上げ。	4109	10	
	75	A区 DV-43区	I - 2 - ③層	SS-106上面?	黑色土器	縦	内底ナダ。内外面ともにミガキ仕上げ。ただし、外側にはミガキ仕上げは明確に残っていない。	4109	10	
	76	A区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。全周のI-6-I-7の痕跡。器のつくり。高台周辺は横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4109	10	
	77	A区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。器のつくり。全周のI-4-I-5の痕跡。高台周辺は横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4105	10	
	78	A区 DX-45区	I - 2 - ③層	SS-117上面	黑色土器	縦	内底ナダ。厚めのつくり。全周のI-6の痕跡。高台周辺は横ナダ。内面はミガキ仕上げと考えられるが、器面が薄く判別不能。	4106	10	
	79	A区 DT-43区	I - 2 - ③層	木面部直上	黑色土器	縦	内底ナダ。外側は丸みが進み調整不明。内面はミガキあるいはミガキ仕上げ。	4044	10	
	80	A区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。厚めのつくり。外側へ口部周辺は横ナダ。内面は部分的にミガキ面がある。	4103	10	
	81	A区 DS・DT-43・45 区	I - 2 - ③層	SS-108上面	黑色土器	縦	内底ナダ。厚めのつくり。口部周辺は横ナダ。周辺外周面には剥離した多くの残存。内面はハラ状工具でミガキ器の溝跡を残す。	4104	10	
	82	A区 DS-43区	I - 2 - ③層	木面部直上	黑色土器	縦	内底ナダ。非常に薄く、強度された粘土をもつ。全周のI-6などの痕跡。外側は丸みが進み調整不明。内面はミガキ仕上げ。	4045	10	
	83	A区 DV-44区	I - 2 - ③層	SS-110上面	黑色土器	縦	内底ナダ。全周のI-6の痕跡。外側は横ナダ。内面はミガキ仕上げで仕上げていると考えられるが、器面が薄れて熱熱がない。	4102	10	
	84	A区 DU-42区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。全周のI-6などの痕跡。外側は横ナダ。内面はミガキ仕上げか?	4043	10	
	85	A区 DS-43区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。非常によく、強度された粘土をもつ。内面はミガキ仕上げ。周辺外周面には横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4042	10	
	86	A区 DV-44区	I - 2 - ③層	SS-110上面	黑色土器	縦	内底ナダ。全周のI-6の痕跡。内外面ともに丸みが進み調整不明。	4059	10	
	87	A区	I - 2 - ③層		黑色土器	縦	内底ナダ。器のつくり。周辺外周面には横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4100	10	
	88	A区 DT-44-20区	I - 2 - ③層	木面部直上	黑色土器	縦	内底ナダ。全周のI-6の痕跡。周辺外周面には横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4041	10	
E28	1	A区	I - 2 - ③層	木面部直上	白磁	縦	全周横筋。内底と土色ともに像ナダ。	4068	10	
	2	A区 DT-43区	I - 2 - ③層		白磁	縦	内外面ともに像ナダ。全周横筋。	4029	10	
	3	A区 DU-43区	I - 2 - ③層		白磁	縦	中粗土。内底と土色ともに像ナダ。全周横筋。	4027	10	
	4	A区 DT-43区	I - 2 - ③層		白磁	縦	中粗土。内底と土色ともに像ナダ。全周横筋で、内外面にミガキが施されている。	4028	10	
	5	A区 DU-44区	I - 2 - ③層		白磁	縦	中粗土。内底と土色ともに像ナダ。全周横筋。	4025	10	
	6	A区 DT-42区	I - 2 - ③層		白磁	縦	中粗土。内底と土色ともに像ナダ。全周横筋。	4030	10	
	7	A区 DT-43区	I - 2 - ③層		白磁	縦	全周のI-4-I-5の痕跡。周辺外周面には横ナダ。中粗土。周辺外周面には横ナダ。内面は丸みが進み調整不明。	4026	10	
	8	A区 DS-44区	I - 2 - ③層		白磁	縦	器面は摩耗し、部分的に釉が剥がれしている。	4030	10	流入の可能性。 国鉄35-④
	9	A区 DV-43区東手拂	I - 2 - ③層		白磁	縦	中国白磁。全周のI-4-I-5の痕跡。器には細かな入がみがある。	4031	10	
	10	A区 DT-43区	I - 2 - ③層		絆物白磁	縦	内外面に施釉。胎は很重質。内外面ともに横ナダ。	4033	10	
	11	A区 DS-43区	I - 2 - ③層		很重質土器	縦	很重質。口縁部周辺は横ナダ。腹部周辺はリタメ調整型の横筋。内底は有光ナダ。内面はハラ状工具による横ナダ。	4034	10	
	12	A区 DR-44区	I - 2 - ③層		很重質土器	縦	很重質。内底は有光の痕跡。削部下平は横ナダ。内面は不规则の横ナダ。	4170	10	
	13	A区 DS-43区	I - 2 - ③層		很重質土器	縦	外側に指痕によるナダ型製。内面は丁寧な不定方向のナダ仕上げ。	4037	10	
	14	A区 DT-44区	I - 2 - ③層		很重質土器	縦	很重質。内底は有光の痕跡。内面は横ナダ。	4175	10	
	15	A区	I - 2 - ③層		很重質土器	縦	器体の縫合はやや不安定。外側は丸みが進むが、平行垂線タキの後に横ナダ。内面は横ナダ。	4177	10	
	16	A区 DS・DT-42・43 区	I - 2 - ③層	SS-105上面	極重質土器	縦	丸底の底部焼結。底面近くにヒラ基底さび沈着を1条底らす。外側に平行垂線タキを施す。内面は当て其の乱層を押さえ付けるようにして成形したまま。	4174	10	
	17	A区 DU-45区	I - 2 - ③層	木面部直上	頗る厚	厚底。全周のI-7の痕跡。内外面とも横ナダ仕上げ。	4035	10		
	18	A区 DT-42区	I - 2 - ③層		頗る厚	厚底。1/10ほどの痕跡のため、口径はやや不規則。内外面ともに横ナダ。	4038	10		

埠別	遺物 No.	調査 区	出土層位、 遺構	出土状況	性 別	器 様	形状・表面調整・施土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
IIIS28	19	AK	DU-42K	■ - 2 - ③期		直筒器	坏	残存。全面の1/4ほどの破片。内外面ともに横ナデ。	4040	10	
	20	AK	DS-42K	■ - 2 - ③期		直筒器	坏	残存。全面の1/4ほどの破片。内外面ともに横ナデ。	4039	10	
	21	AK	DT-43K	■ - 2 - ③期		直筒器	直	全面の1/4ほどの破片。内外面ともに横ナデ。	4036	10	
	22	AK	DY-45K	■ - 2 - ③期	SS-118.上面	丸	土刷目、薄部の焼け。	4178	10		
	23	AK	DU-43K	■ - 2 - ③期	SS-106.下面	丸牛土器	直	全面に赤褐色粘土質の化粧が剥げを呈す。	4068	10	
	24	AK	DV-44K	■ - 2 - ③期	水田面溝上	弥生土器	鉢	手ぬねの小型品。外側は横ナデ、内面は指痕によるナデ仕上げ。	4048	10	
IIIS32	1	AK	DY-44-2 - 3 - 7 - BK	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。外側は横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	4141	11	
	2	AK	DY-44-2 - 3 - 7 - BK	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調整不良。	4154	11	
	3	AK	DY-44-2 - 3 - 7 - BK	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調査不明。	4131	11	
	4	AK	DV-43区西部半	SD-101	埋土下部	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調整不良。	4371	11	
	5	AK	DV - DW-43K	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調整不良。	4153	11	
	6	AK	DV - DW-43K	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。外側=高台部は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4129	11	
	7	AK	DV-42 - 43K	SD-101	埋土上部	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部下部=高台部の破片。外側は粗曇により横斜めナデ。内面はミガキ痕がごく一部に残る。	4157	11	
	8	AK	DV - DW-43K	SD-101	埋土	土器器	直	底面のほぼ全面の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調整不良。	4145	11	
	9	AK	DV-42-20 - 25K	SD-101	両側張り出し 底部理	土器器	直	全面の1/4~1/5の底部破片。内外面ともに荒れが進み調査不明。	4149	11	
	10	AK	DW - DX-43K	SD-101	埋土下部	土器器	坏	全面の1/4程の破片。外側はナデ、内面は荒れが進み調査不明。	3947	11	
	11	AK	DV-43-13 - 15 - 18 - 20K	SD-101	埋土	白磁	焼	中空白器。高台周辺の破片。外側は粗曇へラケズリで、窓部には全面施釉。	4064	11	
	12	AK	DV - DW-43K	SD-101	埋土	黑色土器	焼	圓筒土器。外側は荒れが進み調整不良。内面はミガキ仕上げ。	4162	11	
	13	AK	DV - DW-43K	SD-101	埋土	黑色土器	焼	内筒土器。底でのつくり。外側は横ナデ。内面はミガキ仕上げの痕跡が部分的に残る。	4167	11	
	14	AK	DV-43-12 - 15 - 18 - 20K	SD-101	埋土	黒色土器	焼	内筒土器。草でのつくり。外側は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4166	11	
	15	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	直	全面の1/4程の破片。器体の荒れが著しい。内面は粗曇による強烈な削痕ナデ。外側は器体の荒れが進み調整不良。	4388	1	
	16	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	直	全面の1/4ほどの破片。内外面ともに粗曇接ナデ。	4150	11	
	17	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	直	全面の1/4ほどの破片。内外面ともに粗曇接ナデ。外側面の切り離し方法が不明。	4152	11	
	18	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。厚でのつくり。外側は横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	4127	11	
	19	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調査不明。	4139	11	
	20	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4ほどの破片。外側=高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4130	11	
	21	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	焼	L型脚間隔による脚ナデ。脚側外側面は脚による押さえの痕にナデ仕上げ。内面は荒れが進むが、ナデ仕上げ。	4367	11 国庫35-①	
	22	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	土器器	直	脚側のほぼ全面の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調査不明。	4144	11	
	23	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	黑色土器	焼	内筒土器。外側は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4169	11	
	24	AK	DW-43区西部 - DX-43北東角	SD-101	埋土	黑色土器	焼	内筒土器。全面1/3程の高台部破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4386	11	
	25	AK	DS-42K	SD-101	埋土上部	土器器	直	全面の1/4ほどの破片。内外面ともに横ナデ。外側面の切り離し方法が不明。	4158	11	
	26	AK	DS-42K	SD-101	埋土上部 - 中 部	土器器	坏	全面の1/4ほどの底部破片。内面と外側に荒れが著しく調査不明。外側は2次的な火熱を受けているためか重塗。	4147	11	
	27	AK	DS-42K	SD-101	埋土中部 - 上 部	土器器	焼	外側は粗曇接ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4160	11	
	28	AK	DT-42区西部半	SD-101	埋土上部	土器器	直	底面のほぼ全面の破片。外側は横ナデ。内面は荒れが進み調査不明。	4143	11	
	29	AK	DS-42K	SD-101	埋土上部 - 中 部	土器器	焼	はさみで切った底部=高台部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調査不明。	4339	11	
	30	AK	DU-42K	SD-101	埋土中部 - 上 部	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。外側は滑面による強い横ナデ。外側面は不完全方向のナデ。内面はミガキ仕上げ。	4122	11	
	31	AK	DS-42K	SD-101	埋土	土器器	焼	全面の1/4~1/7の高台部破片。高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4132	11	
	32	AK	DU-42K	SD-101	埋土中部 - 上 部	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部破片。厚でのつくり。内外面ともに荒れが進み調査不明。	4124	11	
	33	AK	DS-42K	SD-101	埋土上部 - 中 部	土器器	焼	全面の1/4の割合の底部破片。高台部周辺=脚部は横ナデ。内面は漆ナデ仕上げ。	4338	11	
	34	AK	DS-42K	SD-101	埋土中部 - 上 部	土器器	焼	全面の1/4ほどの高台部埋益の痕。内外面ともに荒れが進み調査不明。	4142	11	

標本 番号	遺物 No	調査 区	出土層位・ 道標	出土状況	種 別	形狀・器皿圖案・胎土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
E632	35	A区	DR-42区	SD-101	埋土中部~上 部	土器器	陶	全周に1/4ほどの中高部破片。外表面は細面による低い筋 ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4128	11
	36	A区	DT-42区	SD-101	埋土上部	土器器	陶	全周の1/4ほどの中高部周辺の破片。内外面ともに焼れ が進み調整不鮮明。	4156	11
	37	A区	DT-42区	SD-101	埋土上部	土器器	陶	全周の1/4ほどの中高部周辺の破片。内外面ともに焼れ が進み調整不鮮明。	4155	11
	38	A区	DR-42区	SD-101	埋土中部~上 部	黑色土器	陶	西黒土器。口部は不確定。肩部上半は横ナデ。下半には 指壓痕が多く存在。内面はミガキ仕上げ。	4163	11
	39	A区	DS-42区	SD-101	埋土中部~上 部	黑色土器	陶	内黒土器。全周の1/4ほどの中高部破片。厚でのつ くり。高台部の付け側には浅い低い沈殿が混る。外表面は 焼れが進み調節不鮮明。内面はミガキ仕上げ。	4165	11
	40	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	内外面ともにミガキ。	4370	11
	41	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	外表面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4368	11
	42	A区	DS-42・4・9 区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部下半~底部の破片。高台部周辺は 横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4337	11
	43	A区	DU-42区	SD-101	断面貼り付き 状態	土器器	陶	ほぼ全周の側面に貼り付ける破片。朝霧の内外面は輪轂 の付いた高台部の破片。外表面は不定方向のナデ仕 上げ。内面は器底が焼れ調節不鮮明。	4340	11 図版35-②
	44	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/4ほどの中高部破片。外表面は不定方向のナデ仕 上げ。内面は器底が焼れ調節不鮮明。	4123	11
	45	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部破片。内外面ともに焼れが進み 調節不鮮明。	4125	11
	46	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部~清 底	土器器	陶?	全周の1/3ほどの中高部破片。内外面ともに焼れが進み調 節不鮮明。	4148	11
	47	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部の破片。外表面と内面 ともにミガキ調節。	3863	11
	48	A区	DT-42	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部の破片。内面は不定方向のナデ仕上げ。内面は焼れが進み調 節不鮮明。	4336	11
	49	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部の破片。外表面は横ナデ。内面は焼れが 進み調節不鮮明。外表面はナデ仕上げ?	4151	11
	50	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土器器	陶	口縁部の焼底。外表面は弧形で差し、指窓で口縁部を両面 させ、横ナデを施して仕上げる。	4161	11
	51	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	瓦	陶	内外面ともにミガキ仕上げ。	4164	11
	52	A区	DU-42区	SD-101	埋土下部	瓦	陶	裏面の瓦片	4052	11
	53	A区	DU-42区東半部	SD-101	陶底	土器器	陶	全周の1/10ほどの中高部の破片で、口径は不確定。内外面ともに 焼ナデ。外底面の切欠き部分は不鮮明。	4159	11
	54	A区	DT-42区	SD-101	陶底	土器器	陶	全周の1/10ほどの中高部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。 内面はミガキ仕上げ。	4387	11
	55	A区	DS-42区	SD-101	陶底	土器器	陶	全周の1/10ほどの中高部周辺の破片。外表面は横ナデ。内面は 焼れが進み調節不鮮明。	4140	11
	56	A区	DT-42区	SD-101	陶底	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部下半~底部の破片。内外面ともに 焼れが進み調節不鮮明。	4335	11
	57	A区	DS-42-7区	SD-101	陶底貼り付 き状態	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部の破片。内外面ともに焼れが進み調 節不鮮明。	4333	11 図版35-③
	58	A区	DT-42区東半部	SD-101	陶底	黑色土器	陶	内黒土器。全周の焼底。肩部は横ナデ。肩部下半は 高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4385	11 図版36-③
	59	A区	DS-42区	SD-101	SD-114との合 成底	黑色土器	陶	内黒土器。内面はミガキ仕上げ。	4168	11
	60	A区	DS-42-19・24区	SD-101	SD-114との合 成底	黑色土器	陶	内黒土器。口部周辺は横ナデ。内面はミガキ調節。	4070	11
	61	A区	DS-42-19・24区	SD-101-114 合成底	埋土	黑色土器	陶	内黒土器。全周の1/4ほどの中高部の焼底。肩部外側の上半は横 ナデ。下半は口底に浅い低い沈殿をミガキ。高台部周辺は横 ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4389	11 図版36-④
E634	1	A区	DS-42-22・23 合流部	SD-102-114	埋土	土器器	陶	内外面ともに横ナデ。	4080	11
	2	A区	DS-42-3-7区	SD-102	埋土	土器器	陶	内外面ともに横ナデ。	4309	11
	3	A区	DV-43区東半部	SD-102	埋土下部	土器器	陶	全周の1/4ほどの中高部の破片。内外面ともに二次的な火熱を受け て赤茶。また、背面が焼れ調節不鮮明。	3949	11
	4	A区	DU-43区	SD-102	埋土上部	土器器	陶	全周の1/3ほどの中高部の破片。外表面は焼れが進み調節不 鮮明。	4075	11
	5	A区	DR-43-DX-44区	SD-102	埋土	土器器	陶	全周の1/6-1/7ほどの中高部の破片。内外面ともに焼れが進み調節不 鮮明。底盤の器底芯部には淡黒色の黒化物が残る。	4077	11
	6	A区	DT-43-9区	SD-102-122 合流部	埋土	土器器	陶	1/10ほどの中高部の破片のため、底盤は不確定。外表面は焼れが進 み調節不鮮明。内面は横ナデか?	4076	11
	7	A区	DT-43区	SD-102	埋土上部	土器質土器	陶	全周の1/2ほどの中高部の破片。	4078	11 図版35-⑤
	8	A区	DS-43-22-23 合流部	SD-102-114	埋土	黑色土器	陶	内黒土器。外表面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4081	11
	9	A区	DV-43-25区	SD-102	埋土	黑色土器	陶	内黒土器。内面はミガキ仕上げ。	4074	11
	10	A区	DS-42-4-6区	SD-102	埋土下部	黑色土器	陶	内黒土器。内面はミガキ仕上げ。	4072	11
	11	A区	DX-44-1-2区	SD-102	埋土	白陶	陶	中国白陶。断面は崩落のまま。内外面ともに横ナデ。	4083	11 図版34-⑨
	12	A区	DX-44-1-2区	SD-102	埋土	白陶	陶	中国白陶。断面崩落。細かな入孔がある。	4138	11

神奈 川	遺物 No.	調査 区	出土層位・ 遺構	出土状況	種 別	器 形	形状・部面調整・塗上・施成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考
横34	13 A区	DW-43- DW-44-3区	SD-102	埋土	白磁	直	外腹は落胎のまま。内腹胎軸。	4069	11	
	14 A区	DS-43区	SD-102	埋土上部	直底盤	直	内腹面ともに焼ナゲ、また自然釉が付着。	4079	11	
	15 A区	DT-43区	SD-102	埋土上部	弥生土器	高环	内腹面ともに焼ナゲ。	4082	11	
横35	1 AK	DW-45区	SD-103	埋土上部	土師器	直	全形の1/4弱の破片。外腹及高台部周辺は焼ナゲ。内腹はミガもしくは赤茶丁で支ナゲ仕上げ。	4118	11	
	2 AK	DW-45区	SD-103	埋土上部	土師器	直	全形する部分下部～底部の範囲。側部外腹～高台部周辺は事半ば。外底面には板状圧痕がある。内底面は不定方向のナゲの後に側部内腹に乱雜なナゲ調節。	4341	11	横35-①
	3 AK	DW-45区	SD-103	埋土上部	土師器	直	ほぼ全周の落胎。内外面ともに焼れが進み調整不明。	4112	11	
	4 AK	DU-45区	SD-103	埋土下部	土師器	直	全形の1/2弱の破片。内外面ともに焼れが進み調整不明。	4119	11	
	5 AK	DX-45区	SD-103	東半部、埋土 上部	土師器	直	全形の1/4ほどの破片。外腹は焼れが進み調整不明。内腹は指頭による焼ナゲ。	4117	11	
	6 AK	DU-45区	SD-103	埋土上部	土師器	横状高台 上部	外腹は横ナゲ、内腹は底面による横ナゲ。	4116	11	横35-⑤
	7 AK	DW-45区	SD-103	埋土下部	黑色土器	直	内底土器。外腹と口縁部周辺は焼ナゲ。内腹はミガ仕上げ。	4120	11	
	8 AK	DV-45区	SD-103	埋土下部	黑色土器	直	内底土器。全形の1/3弱の破片。厚でのつくり。内外面ともに次なる火熱を受け、部面が焼れ調節不明。外腹は薄いビニンご色變。	4113	11	
	9 AK	DX-45区	SD-103	埋土	黑色土器	直	内底土器。全形の1/3弱の破片。削断下部の外腹はヘラ式工具で削痕が残る。高台部周辺は焼ナゲ。内腹はミガ仕上げ。	4114	11	
	10 AK	DT-45-1・6区	SD-103	埋土?	白磁	直	全形施塗。内外面ともに焼ナゲ。	4066	11	横35-②。上層 水田壁からの収入 の可能性も高い。
	11 AK	DX-45区	SD-103	埋土	白磁	直	全底施塗。玉緑口縁の下部にはヘラ状工具で小さな段を設ける。	4065	11	横35-①
	12 AK	DS-45-1・6区	SD-103	埋土上部	筑山器	直	口縁部を丸めて横ナゲ調整で成形。	4121	11	
	13 AK	DT-41区	SD-104	西半部埋土	土師器	直	中田白磁。全面施塗。見込み部分に段状の比較を施す。	4137	11	
	14 AK	DS-42区	SD-114	埋土上部	須恵質土器	直	器の側面はやや斜面変。外腹は平行条線タッキ。内腹は焼ナゲ。	4176	11	
	15 AK	DY-45区	SD-119	南部埋土	須恵質土器	直	内腹面ともに焼痕焼ナゲ。紹土は大粒の砂礫が混じり、ややざらついた質感であるので、須恵質土器と判断した。	4171	11	
	16 AK	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	直	外腹は焼ナゲ。内腹はミガ仕上げ。	4110	11	
	17 AK	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	直	全形の1/6ほどの破片。底盤はやや不規則。外唇表面が焼れ調節不良。	4111	11	
	18 AK	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	直	全形の1/2弱の底盤下部の破片。外腹は焼れが進み調整不良。内腹はミガ仕上げか?	4136	11	
	19 AK	DT-42-20区	SD-101・122、 SS-109(清水)	埋土	土師器	横状高台 上部	全形の1/3ほどの表底片。内外面ともに焼ナゲ。外底面には細かな網目状の焼痕がある。	4146	11	
横36	1 AK	DX-DY-44-45区	SX-121	土師器埋附ペ ルト埋土	土師器	直	全形の1/2ほどの破片。外腹面ともに焼ナゲ。外底面には軽微な凹凸り窪みが残る。	4089	11	
	2 AK	DY-45区東半部	SX-121	土	土師器	直	全形の1/2ほどの破片。内外面ともに焼ナゲ仕上げ。外底面には軽微な凹凸り窪みが残る。	3913	11	
	3 AK	DY-45区東半部	SX-121	埋土	土師器	直	側部底手～底部の2/3弱の破片。側部外腹～高台部周辺は焼ナゲ。外底面には板状圧痕が残る。内腹面はミガ仕上げ。	4342	11	横35-⑨
	4 AK	DY-44-23・24区	SX-121	埋土上部	土師器	直	全形の1/4弱の破片。外腹は焼れが進み調整不明。内腹はナゲの質感があるが、判別しない。	4092	11	
	5 AK	DX-DY-44-45区	SX-121	西半部底面	土師器	直	3/4弱の全周部の破片。外腹は焼れが進み調整不明。内腹とごとに内底面には焼けた跡がある。	4391	11	横35-②
	6 AK	DX-DY-44-45区	SX-121	西半部底面	土師器	直	全形の1/4弱の破片。外腹は焼けた焼ナゲ。内腹とごとに内底面には焼けた跡がある。	4390	11	
	7 AK	DY-44-23-24区	SX-121	埋土上部	白磁	直	全底施塗。内外面ともに焼ナゲ。二次的な火熱を受けているためか、釉・焼痕はすんだ色調に変化。	4067	11	横35-③
	8 AK	DX-DY-44-45区	SX-121	東半部、底面 直上	弥生土器	直	内外面ともに焼ナゲ。	4097	11	
横37	1 AK	DX-45区	SS-117	耕作土層	土師器	直	全形の1/4弱の破片。落でのつくり。内外面ともに焼れが進み、内腹の一部にナゲ調整が認められる以外、内腹面は不明。	3907	9	
	2 AK	DT-44区	SS-108	耕作土層	土師器	直	全形の1/10ほどの破片のみ。坂元口径は不確定。内外面ともに内底面の焼れが進み調整不明。	3912	9	
	3 AK	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	直	全形の1/3弱の破片。側部の内腹面は焼ナゲ。外底面には焼痕焼が残る。内底面は斜面で不定方向のヘラタッチ。	4054	9	
	4 AK	DS-43区	SS-108	耕作土層	土師器	直	全形の1/4ほどの破片。内腹には指頭による焼ナゲ焼痕を残す。	3916	9	
	5 AK	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	直	全形の1/4ほどの破片。外腹は焼れが進み調整不明。内腹は不定方向のナゲ仕上げ。	3911	9	
	6 AK	DS-45区	SS-112	耕作土層	土師器	直	全形の1/4ほどの破片。外腹は焼れが進み調整不明。内腹は指痕による不定方向のナゲ。	3915	9	
	7 AK	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	直	全形の1/4ほどの破片。内外面ともに焼れが著しく、調整は不明。	3909	9	

桝番	遺物 No	調査 区	出土場所・ 遺構	出土状況	種 別	器 種	形状・器面調整・胎・成形などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考
1837	8	A区	DW-44区	耕作土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの中片。内外面ともに荒れが著しく調整は不明。	3928	9	
9	A区	DW-44区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/2ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3934	9	
10	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の1/6ほどの中片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3934	9	
11	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/16ほどの中片。底部外面は荒れが進み調整不明。 内面はナマ調整か?	3910	9	
12	A区	DW-44区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	内外面ともに回転模ナマ。	3929	9	
13	A区	DW-44区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	外縁と口縁部前面の一部が黒褐色化。内外面ともに荒れが進み、調整の跡は不明。	3924	9	
14	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	外縁は斜方向の粗底ナマ。斜底底が全面に残る。内面はナマ仕上げ。	4387	9	
15	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	外縁は斜方向の粗底ナマ。粗底底が全面に残る。内面は横ナマ仕上げ。	4358	9	
16	A区	DS-43・44区	SS-108	耕作土層	土師器	壺	内外面ともに荒れて、調整の跡は不明。	3927	9	
17	A区	DT-45区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面は荒れが進み、調整の跡は不明。	3900	9	
18	A区	DT-44区	SS-108	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/2ほどの中片。高台部周辺は段ナマ。外表面は不定方向のナマ。内面は丁寧なナマ仕上げ。	4350	9	
19	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。肅面外縁はハラ状工具ナマ。高台部周辺は段ナマ。内面は丁寧なナマ仕上げ。	4348	9	
20	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面は荒れが進み調整不明。	3937	9	
21	A区	DU-43区	SS-105	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。外縁は横ナマ。内面は荒れが進み調整不明。	4381	9	
22	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/2ほどの中片。外縁は荒れが進み調整不明。内面はミガキ仕上げと考えられるが明瞭しない。	4349	9	
23	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4334	9	
24	A区	DW-44区	SS-116(既述、 より西側)	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3991	9	
25	A区	DS-45区	SS-112	耕作土層	土師器	壺	内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3889	9	
26	A区	DV-45区	SS-117	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面はミガキ仕上げか?	3994	9	
27	A区	DT-45区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/6ほどの中片。薄でづくり。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3901	9	
28	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。やや暗色みをおびた灰白色の焼き上がり。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4055	9	
29	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	黑色土器	壺	全周の約1/4ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面はミガキ仕上げか?	3919	9	
30	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/6ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面は非常に丁寧なナマ仕上げ。	3990	9	
31	A区	DU-45区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/2-1/3ほどの中片。外縁は荒れが著しく調整不明。内面は丁寧なナマ仕上げ。	3953	9	
32	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1-1/2ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4053	9	
33	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。割れ外縁はミガキ、高台部周辺はナマ。内面はミガキ仕上げか?	3891	9	
34	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。外縁は荒れが進み調整は不明。内面は丁寧なナマ仕上げ。	3890	9	
35	A区	DS-43区	SS-107	耕作土層	土師器	壺	全周の約1-1/2ほどの中片。内外面ともに器面が荒れ調整不明。ただし、内面はミガキ仕上げか?	4052	9	
36	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3903	9	
37	A区	DW-44区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。割れ外縁はミガキ、高台部周辺はナマ。内面はミガキ仕上げか?	3893	9	
38	A区	DS-45区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。内外面ともに丁寧なナマ仕上げ。	3917	9	
39	A区	DW-44区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。内外面ともに回転模ナマ。	3918	9	
40	A区	DU-45区	SS-113	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。外縁は回転模ナマ。内面はナマ?	3902	9	
41	A区	DU-45区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/4ほどの中片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3895	9	
42	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3899	9	
43	A区	DW-44区	SS-109	耕作土層	土師器	壺	ほぼ全周の鏡片。割れ外縁～高台部は回転模ナマ。内面はナマ調整。	4051	9	
44	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	壺	全周の約1/5ほどの中片。割れ外縁～高台部は回転模ナマ。内面は不定方向の丁寧なナマ仕上げ。	3955	9	

博認 番号	遺物 No.	調査 区	出土層位・ 遺構	出土状況	種別	器種	形状・器種西施・施土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備考	
8037	45	A区	DS-43K	SS-108	耕作土層	土器部	土鍋	外腹には側面膨が多くの現る。内腹は壁ナダ。	3930	9	
46	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	黑色土器	壺	内底土器。外腹は荒れが進み調査不明。内腹には部分的にミガキ跡があられる。	3925	9		
47	A区	DX-44-12-17- 18-22-23K	SS-116	耕作土～床土 層	白色土器	壺	内底土器。全周の1/4ほどのが高台部窪。高台部窪辺は焼ナダ。内腹はミガキ仕上げ。	4395	9		
48	A区	DS-44K	SS-108	耕作土層	黑色土器	壺	同黒土器。薄でつくりで、底土も移設が混じらない程度粘土を含む。外腹はナダ。	3923	9		
49	A区	DS-43K	SS-108	耕作土層	黑色土器	壺	同黒土器。外腹は同傾斜ナダ。内腹には部分的にミガキ痕が残る。	3926	9		
50	A区	DT-44K	SS-109	耕作土層	黑色土器	壺	同黒土器。全周の1/4ほどのが底部窪。外腹は焼ナダ。外底面は不定方向のナダ。	3920	9		
51	A区	DT-45K	SS-113	耕作土層	黑色土器	壺	同黒土器。全周の1/3ほどのが底部窪。外腹は焼ナダ。外底面は不定方向のナダ。	3921	9		
52	A区	DS-43K	SS-108	耕作土層	白陶	壺	中粗目陶。全腹張り。外腹は同傾斜ナダ。内腹は見込み足に沈殿物1条ある。	4056	9		
53	A区	DT-44K	SS-109	耕作土層	?	?	内腹面ともに自然剥が付着。燒ナダ仕上げ。	3922	9		
54	A区	DS-44K	SS-108	耕作土層	直腹器	壺	内腹の1/3～1/2の底片。外腹は燒ナダ。内腹は丁寧なナダ仕上げ。	3931	9		
55	A区	DS-43K	SS-108	耕作土層	丸瓦	?	表面がわざかに残る。	4061	9		
8038	1	A区	DS-43K	SS-107・108 窓跡	窓跡本体	土器部	直	全周の1/5ほどの破片で、器体の歪みもあり、口径は不確定。内腹面ともに焼ナダ。	4397	9	
2	A区	DY-45K	SD-101窓跡 窓跡	窓跡本体上部	土器部	直	全周の1/4の底片。外腹は同軸傾斜ナダ。内腹は焼れが進むがナダ。	3948	9		
3	A区	DX-44-13- 18-15K	SD-102・SS-115 窓跡	窓跡本体	土器部	直	全周の1/4～1/5の底片。内外腹ともに焼れが進むと調査は不明。	3946	9		
4	A区	DX-44-1・2区 窓跡	SD-101・102 窓跡	?	土器部	环	全周の1/2弱の底片。器体の歪みが著しい。内腹とともに焼れが進み調査不明。ただし、内腹は同軸傾斜ナダか？	4396	9		
5	A区	DX-44K	SD-102・SS-116 窓跡	窓跡本体	土器部	环	全周の1/3ほどの底片。内外腹ともに焼れが進むと調査の課題は不明。	3950	9		
6	A区	DV-45K 要復元	SD-102・SS-113 窓跡	窓跡本体	土器部	环	全周の1/7ほどの底部窪邊の破片。側部外腹は焼ナダ。内腹はナダ仕上げ。	4398	9		
7	A区	DT-43K	SD-102・SS-109 窓跡	窓跡本体	土器部	直	内腹面ともに同軸傾斜ナダ。	3943	9		
8	A区	DT-42K	SD-103・SS-105 窓跡	窓跡本体	土器部	直	全周の1/3ほどの底片。外腹は同傾斜ナダ。内腹は焼れが進み調査不明。	3944	9		
9	A区	DR-45K	SD-103・SS-107 窓跡	窓跡本体	土器部	环	全周の1/2弱の1円形凹高台の底片。外腹は複合工具を用いた強烈の焼ナダ。内腹は同軸傾斜ナダ。	4399	9		
10	A区	DY-45K	SD-119・街衝 窓跡	窓跡本体上部	土器部	壺	内腹面ともに焼ナダ。	4366	9		
11	A区	DS-42・43K	SD-102・ SS-114窓跡	窓跡本体	土器部	壺	器体はもう少し歪みが急か？ 外腹は同軸傾斜ナダ。内腹はヘラタケリの底面にナダ仕上げ。口縁部内面にヘラケリ痕が退廃的的に残る。	3956	9		
12	A区	DY-45K 窓跡	SD-103・SS-117 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/3ほどの底片。外腹面と内腹には同軸傾斜ナダ。器體は焼れのため、調査不明。	3937	9		
13	A区	DZ-45K	SD-119・街衝 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	高台部が少しがくらす。窓跡本体窓辺をナダ仕上げ。外底面を不定方向の振動によることナダ調整で仕上げる。内腹は丁寧なナダ。	3934	9		
14	A区	DU-43K	SD-106- SD-102窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/3強の腰窓下～底部の破片。内外腹ともに焼れが進み調査不明。	4343	9		
15	A区	DT-42K	SD-122- SS-106窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/5ほどの底片。外腹はナダ。外底面は不定方向のナダ調整。内腹はミガキ仕上げ。内底面の一部には擦痕によるナダ調整がみられる。	3936	9		
16	A区	DT-43K	SD-102-SS-106- 107窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/4弱の底片。外腹は同軸傾斜ナダ。内腹は不定方向の丁寧なナダ仕上げ。	3938	9		
17	A区	DS-42K	SD-101-114窓 跡	窓跡本体	土器部	壺	ほぼ全周の高台部～底部底片。内外腹ともに焼れが進み調査不明。	4344	9	図版35-珍	
18	A区	DU-43K	SD-101-SS-106 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/3～1/4の底片。窓跡は見れているが、ナダ調整か？ 内腹面は丁寧なナダ仕上げ。	4347	9	SK-123様上高土の 裏板と報告。	
19	A区	DT-42K	SD-122- SS-106窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/3～1/4の底片。外腹は見れているが、ナダ調整か？ 内腹面は丁寧なナダ仕上げ。	3935	9		
20	A区	DX-44K	SS-115-116 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/6ほどの底片。内外腹ともに焼れが進むと調査不明。	3940	9		
21	A区	DU-43K 窓跡	SD-106-SD-102 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/5ほどの高台部窓辺の底片。高台部窓辺は焼ナダ。内腹はミガキ仕上げ。	4346	9		
22	A区	DX-44K	SS-115-116 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/4～1/3の底片。外腹は焼れが進み調査不明。内腹は丁寧なナダ仕上げ。	4059	9		
23	A区	DX-44K	SS-115-116 窓跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/4弱の底片。器腹も焼れ調査の詳細は不明。	3960	9		
24	A区	DU-45K	SD-103- SS-110窓跡	窓跡本体下部	土器部	壺	全周の1/4弱の底片。器腹も焼れ調査の詳細は不明。	3951	9		
25	A区	DV-45K	SS-110-115窓 跡	窓跡本体	土器部	壺	全周の1/4ほどの底片。外腹面は同軸傾斜ナダ。内腹は丁寧なナダ仕上げ。外底面は不定方向のナダ調査。	3952	9		

件番	遺物 No	調査区	出土位置・ 遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・ 胎土・施成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備考	
1638	26	AK	DT-44区	SS-108・109 周囲帯	越町本体	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに器皿が曳れ、調整不明。	3939	9	
	27	AK	DU-45区	SD-03・SS-110 周囲帯	越町本体下部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。外面は曳れが著しく調整不明。内面はミガキもしくは丁寧なナデと考えられるが、判然としない。	3941	9	
	28	AK	DV-45区	SD-03・SS-117 周囲帯	越町本体	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。外面は曳れが著しく調整不明。内面は丁寧なナデと判定されるが、ナデ仕上げ。	3954	9	
	29	AK	DU-43区	SD-106・SD-102 周囲帯	越町本体	土師器	壺	全周の1/3弱の成片下部～底部の破片。内外面ともに曳れが著しく調整不明。	4345	9	
	30	AK	DX-44区	SD-02・SS-116 周囲帯	越町本体	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに曳れが著しく調整不明。	3942	9	
	31	AK	DR-45区	SD-03・SS-107 周囲帯	越町本体	土師器	壺	内外面ともに擦痕による成形後にナデ。内面には擦れが薄く付着。	3957	9	
	32	AK	DU-43区	SD-101・SS-099 周囲帯	越町本体	黑色土器	壺	内底土器。口縁部周辺～内面はミガキ仕上げ。腹部外側は丁寧なナデ。	3945	9	
	33	AK	DX-44-1・2区	SD-101・102 周囲帯	越町本体	黑色土器	壺	内底土器。全周の1/3弱の高台部周辺の破片。外側～高台部周辺はナデ。内面はミガキ仕上げ。	4133	9	
	34	AK	DX-44区	SD-102・SS-116 周囲帯	越町本体	黑色土器	壺	内底土器。全周の1/3弱の破片。高台部周辺はナデ。内面はミガキ仕上げ。	4400	9	
	35	AK	DT-44区	SS-108・109 周囲帯	越町本体	瓦器	壺	器皿の口のため、往々やや不確定。	3961	9	
	36	AK	DS-42区	SD-101・ SS-114周囲帯	越町本体	便器	便器	便器成片のため、往々やや不確定。	3962	9	
	37	AK	DT-43区	SD-122・SS-106 周囲帯	越町本体	陶生土器	壺	平底の成片。全周の1/4弱の成片。外側にはL字状工具で捺し上げたような痕跡が部分的に残る。その後、ナデ仕上げ。	3958	9	
	38	AK	DX-44区	SD-102・SS-116 周囲帯	越町本体	陶生土器	壺	陶生の上げ土器。周縁部外側はL字状工具でナデ仕上げ。底部周辺はナデ。内面はナデ仕上げ。	4066	9	
1639	1	AK	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。周縁部の上部～内面は刮削ナデ。器皿下部はL字状工具で押さえつけたようなナデ跡。外側はナデ仕上げ。	3859	9	
	2	AK	DU-43区	SS-106	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに回転擦ナデ。外縁部はナデ仕上げのため、切り落し方法は不明。	3855	9	
	3	AK	D7-44区	SS-109	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに回転擦ナデ。	3858	9	
	4	AK	DS-44区	SS-108	床土層下部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに回転擦ナデ。	3856	9	
	5	AK	DU-44区	SS-110	床土層	土師器	壺	外側は回転擦ナデ。内面は曳れが著しく調整不明。	3873	9	
	6	AK	DU-44区	SS-109	床土層	土師器	壺	内外面ともに曳れが著しく調整の評価は不明。	3872	9	
	7	AK	DT-45区	SS-113	床土層	土師器	壺	内外面ともにナデ。	3871	9	
	8	AK	D7-44区	SS-109	床土層	土師器	壺	口縁部周辺はナデ。新都外側はヘア状工具でナデ。内面はミガキ仕上げ。	3875	9	
	9	AK	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	壺	口縁部は部分的に磨んでいる。内外面ともに回転擦ナデ。	3929	9	
	10	AK	DX-44区	SS-117	床土層	土師器	壺	外側は回転擦ナデ。器皿は曳れで調整は不明。	3867	9	
	11	AK	D7-44区	SS-109	床土層	土師器	壺	内外面ともに曳れを含むナデ。	3870	9	
	12	AK	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片のため、底径はやや小確定。もう少し大きくなるか。新都外側は回転擦ナデ。他の部分は曳れが著しい調整不明。	3861	9	
	13	AK	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに曳れが著しく調整不明。	3857	9	
	14	AK	DS-43区	SS-108	床土層下部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。器皿は曳れで調整は不明。	3858	9	
	15	AK	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/4～1/3弱の成片。内外面ともに回転擦ナデ。外底部はナデ仕上げのため、切り落し方法は不明。	3866	9	
	16	AK	DU-43区	SS-110	床土層	土師器	壺	全周の1/2弱の成片。外側は曳れが著しく調整の詳細不明。内面はナデ。	3854	9	
	17	AK	DS-43区	SS-107東半部	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに曳れが著しく調整不明。	4071	9	
	18	AK	DV-44-4区	I-2-4-3	耕作土層～床土層	土師器	壺	全周の1/4弱の成片。外側は刮削擦ナデ。高台部の付け根には長いヘア状工具でついた波状の溝が盛る。内面は丁寧な不確定方向のナデ仕上げ。	3964	9	
	19	AK	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/4～1/3弱の成片。外側は回転擦ナデ。内面はナデ仕上げ。	3865	9	
	20	AK	DT-43区	SS-105	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内面は曳れが著しく調整不明。	4355	9	
	21	AK	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/3～1/4弱の成片。外側～高台部周辺は回転擦ナデ。内面はナデ調査。	3862	9	
	22	AK	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。高台部周辺はナデ。内面はナデ仕上げ。	4354	9	
	23	AK	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。外側はナデ調査である以外、器皿の曳れが著しく調整不明。	3868	9	
	24	AK	D5-43区	SS-108	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。外側は回転擦ナデ。内面は曳れが著しく調整は不確としないが、ナデ仕上げか。	3869	9	
	25	AK	DU-44区	SS-110	床土層	土師器	壺	全周の1/3弱の成片。内外面ともに曳れが進む。外側は回転擦ナデか？	3874	9	

種類	遺物 No.	調査区	出土層位・ 遺物	出土状況	種 別	器 形	形狀・器面調査・粒土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
III39	36	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの破片。内側は器底は回転模ナゲ。外底面はサザ。内面は焼けが進み焼成性不明。	3864	9	
27	A区	DS-44区	SS-108	床土層	土師器	壺	外側は器底の焼れが進み調査不明。内側はナゲ仕上げ。	3868	9		
28	A区	DU-44区	SS-109	床土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに回転模ナゲ。外底面はナゲ仕上げ。	3886	9		
29	A区	DT-45区	SS-113	床土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの破片。外面～外底面は焼ナゲ。内面はミガキ仕上げ。	4057	9		
30	A区	DT-45区	SS-109	耕作土層～床 土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの破片。内側面とともに焼れが進み調査不明。	3906	9		
31	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/4ほどの破片。裏部外蓋は植ナゲ。内面は植ナゲ仕上げ。	4333	9		
32	A区	DU-45区	SS-113	床土層	土師器	壺	内面は器底の全周の1/4ほどの破片。内外面ともに焼れが進み調査不明。	4356	9		
33	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床 土層	土師器	壺	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに焼れが著しく調査不明。	3892	9		
34	A区	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	壺	全周の1/5ほどの破片。器底が焼れ、別個外蓋に回転模ナゲを施していることを確認できるだけである。	3887	9		
35	A区	DX-44-12・17・ 18・22・23区	SS-116	耕作土層～床 土層	土師器	壺	全周の1/12ほど破片。外蓋は回転模ナゲ。内面はミガキ仕上げ。	3896	9		
36	A区	DT-43区	SS-109	床土層	土師器	土壺	内面とともに焼ナゲ。口縁部下部に回転模が集中して残る。	3878	9		
37	A区	DW-44区	SS-115	床土層	黒色土器	壺	内面と器底の全周の1/5ほどの破片。高台部底面は植ナゲ。内面はミガキ仕上げ。	4402	9		
38	A区	DT-45区	SS-113	床土層	黒色土器	壺	内面と器底の全周の1/5ほどの破片。器底が焼れ、別個外蓋に回転模ナゲを施していることを確認できるだけである。	4403	9		
39	A区	DW-44区	SS-115	床土層	黒色土器	壺	内面と器底の全周の1/5ほどの破片。内面は植ナゲ仕上げ。	4401	9		
40	A区	DR-44区	SS-107	耕作土層～床 土層	黒色土器	壺	内面と器底の全周の1/5ほどの破片。内面はミガキ仕上げ。	3922	9		
41	A区	DU-43区	SS-110	床土層	瓦器	壺	外蓋は黒色なナゲ。内面は丁寧なミガキ仕上げ。壁紙には焼け上がり。	3866	9		
42	A区	DS-44区	SS-108	床土層	灰陶質土器	壺?	焼けから土器と考えた。全周の1/5～1/6ほどの破片。	3876	9		
43	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床 土層	瓦	瓦	瓦の端片。瓦片との接合面で欠損。	3933	9		
44	A区	DY-45区	SS-119	耕作土層～床 土層	灰陶器	壺	内外面ともに回転模ナゲ。	4172	9		
45	A区	DR-44区	SS-107	床土層～耕作 土層	灰陶器	壺	無頭蓋の壺。口径13.2cmで復元したが、既定口径は12.2～13.2cm。内面とともに回転模ナゲ。	3879	9		
46	A区	DS-44区	SS-108	床土層下部	灰陶器	壺または 壺?	外蓋は繩文期の平行魚鱗タキ模をタキ模調整で削ぎ。内面には中心円形に当たる痕が残る。	3884	9		
47	A区	DS-43区	SS-108	床土層	粘生土器	輪台付 鉢	小型品。内面ともに擦痕によるナゲ。	3881	9		
48	A区	DT-44区	SS-109	床土層	粘生土器	壺?	外蓋がミガキ仕上げのため窓の訂版部と割離。	3883	9		
49	A区	DS-44区	SS-108	床土層下部	粘生土器	壺?	内面ともに植ナゲ。	3885	9		
50	A区	DS-44区	SS-108	床土層	粘生土器	輪台付 鉢	内面ともにナゲ仕上げ。輪台接合部と内底面には粘土被りのための接合跡が残る。	3882	9		
51	A区	DS-45区	SS-112	床土層	粘生土器	壺	全周の1/4ほど破片。外側の調査は、底部底面を削離で押さえている以外、器底の焼れが進み不明。内面はナゲ。	3877	9		
III40	1	A区	DS-43区	II・2・3层	石器	打製石器	サカイコトヌケ・基盤を尖端。現存重量12.6g。	4419	26		
2	A区	DT-45区	SD-103・SS-109 四輪町	石器	磨製石器	丁	内面削。刃面、残存重量13.3g。	4423	26	国臨38-③	
3	A区	DS-44区	SS-109	耕作土層下部	石器	磨製石器	刃面削。刃面、刃面はこげが著しく、中央部は大きく欠損。重量74.7g。	4422	26	国臨38-⑤	
4	A区	DU-44区	SS-110	床土層	石器	敲打具	平面品。残存重量112.4g。	4430	26	国臨39-①	
III43	1	A区	DT・DU-42・43 区	SK-201	埋土層下部	土師器	壺	全周の1/4ほど破片。外側は焼れが進み調査不明。内面は不規則方向のナゲ。	4392	11	国臨36-⑨
2	A区	DU・DV-43区	SK-202	東半部埋土	土師器	壺	全周の2/3ほど破片。内外面ともに回転模ナゲ。外底面の切り離し方法は焼れが進み不明。	4393	11	国臨36-⑩	
3	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	土師器	壺	全周の1/3～1/2ほど破片。内外面ともに回転模ナゲ。外底面は焼けた。切り離し方法は不明。	3733	8		
4	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	小片のなかに複数の窓孔や不規則。内面ともに回転模ナゲ。外底面はナゲ仕上げされ、切り離し方法は不明。	3761	8		
5	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	全周の1/3ほど破片。内外面ともに回転模ナゲ。その張り内底面には鋸歯状に沿うナゲを部分的に施す。	3734	8		
6	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	内外面ともに回転模ナゲ。外底面は回転・ラ・タッピング。	3666	8		
7	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	器底が焼けているが、内面ともに回転模ナゲか?	3716	8		
8	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	内面ともに回転模ナゲ。	3721	8		
9	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	土師器	壺	外底は焼けた。内面は焼れが進み調査不明。	4376	8		
10	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	内面ともに回転模ナゲ。外底面は回転・ラ・タッピング。	3718	8		
11	A区	DV-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	全周の1/4ほど破片。内外面ともに焼れていない。内面の一部では回転模ナゲの跡をわずかに観察できる。	3717	8		
12	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	壺	内面は回転模ナゲ。内底面は不定方向のナゲ。	3711	8		

井戸番号	調査区	出土解説・遺物	出土状況	種類	器種	形状・特徴説明・歴土・從成などの特徴	出土登録番号	コンサルタント番号	備考
13	A区 DW-44区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。外側は回転模ナメ。内面は割裂模ナメ。	3724	8	
14	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。外側ともに回転模ナメ。	3668	8	
15	A区 DW-44区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。頭部外側～高台部周辺は模ナメ。外底部と内底部は荒れかた込み模様不明。	4373	8	
16	A区 DW-44区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。外側は回転模ナメ。内面は1ガリ仕上げ。	3669	8	
17	A区 DW-44区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中片。内面は裏が裏のみ脚跡不明。口縁部周辺は模ナメ。頭部外側は指添による模ナメ。頭部下部の高台部周辺は回転ヘラケグリ。高台部は模ナメ。	4379	8	
18	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕。	3709	8	
19	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕。	3706	8	
20	A区 DW-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。蓋でのつくり。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕。	3707	8	
21	A区 DW-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。内外面ともにミガキ削痕。	3708	8	
22	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。全周の1/4ほどの中片。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕。外底部の中央はナメ仕上げ。	3737	8	
23	A区 DW-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。全周の1/4~1/5の高台部。内面はミガキ削痕。外側は回転模ナメ。	3763	8	
24	A区 DW-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕。	3725	8	
25	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。全周の1/6の後片で、表合径は不確定。高台部付近は1/4でよく剥離ナメ。内面はミガキ削痕。	3714	8	
26	A区 DW-44区	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。全周の1/6の後片。外側は回転模ナメ。内面は薄手に丁寧なナメ仕上げ。	3703	8	
27	A区 DW-44区	SD-308	埋底付埋土	土師器	瓶	全周の1/5ほどの中片で、底径はやや不確定。内外面ともに回転模ナメ。外底面は不定方向の指添によるナメ仕上げ。	3727	8	
28	A区 DW-44区	SD-308	底ブロック内	土師器	瓶	頭部～底端部は回転模ナメ。	3713	8	
29	A区 DW-44区底内	SD-308	底ブロック内	土師器	瓶	全周の1/3~1/2の後片。内外面ともに回転模ナメ。	3731	8	図版36-②
30	A区 DW-44区底内	SD-308	底ブロック内 (底蓋し状態で出土)	土師器	瓶	完形品。内外面ともに回転模ナメ。	3732	8	図版36-③
31	A区 DW-44区底内	SD-308	底ブロック内	土師器	瓶	ほぼ全周の破片。頭部外側～高台部周辺は模ナメ。特に高台部周辺はナメが強め。外底部中央はナメ。内面はミガキ削痕が部分的に残る。	4374	8	
32	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	内外面ともに回転模ナメ。	3729	8	
33	A区 DV-44区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/10~1/6片で、口径は不確定。内底面ともに回転模ナメ。外底面は切り離し方法不明。	3728	8	
34	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	全周の1/3ほどの中片。内外面ともに回転模ナメ。	3725	8	
35	A区 DV-43区	SD-308	埋土	土師器	瓶	外底部周辺は回転模ナメ。内面はミガキ。	3726	8	
36	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	口縁部内外面は回転模ナメ。頭部はミガキ仕上げ。	3670	8	
37	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	内底面ともに蓋面を覆う剥離模様不明。	3667	8	
38	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。頭部内外面は回転模ナメ。内底面にはなるべく不定方向のナメ。外底面はミガキ仕上げのために切り離し方法は不明。	3735	8	
39	A区 DV-43区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。内外面ともに回転模ナメ。外底面は頭部ヘラ切り離しの後にナメ。	3723	8	
40	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。外側は回転模ナメ。内面はミガキ削痕と思われるが、表面が見られないこと。しない。	3722	8	
41	A区 DV-43区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/6~1/7の中片。頭部外側～高台部周辺は模ナメ。内面は見られるが剥離模様としないが、ナメか?	4375	8	
42	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土中層	黑色土器	瓶	内黒土器。外側は頭部付近が回転模ナメ。頭部の調整は見当が地獄。内底面は定口径はやや不確定。内面はミガキ仕上げ。	3765	8	
43	A区 DV-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。定口径はやや不確定。外側は回転模ナメ。内面はミガキ仕上げ。	3762	8	
44	A区 DW-44区	SD-308	埋土	黑色土器	瓶	内黒土器。全周の1/4ほどの中片。外側は回転模ナメ。内面はミガキ。	3736	8	
45	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	土師器	瓶	全周の1/4ほどの中片。剥離が進み、定口径は7.9~8.5cm。内外面ともに回転模ナメ。	3679	8	
46	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	土師器	瓶	内外面ともに回転模ナメ。	3720	8	
47	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	土師器	瓶	内外面ともに回転模ナメ。	4377	8	
48	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	土師器	瓶	口縁部周辺は模ナメ。頭部外側は指添による模ナメで、脇筋上にはかかる凹凸がある。内面はミガキ仕上げ。	4378	8	
49	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	土師器	瓶	内外面ともに回転模ナメ。	3715	8	
50	A区 DV-44区底内	SD-308	埋土下層	黑色土器	瓶	内黒土器。非定口径はやや不確定。外側は回転模ナメ。内面はミガキ仕上げ。	3766	8	
51	A区 DW-42区	SD-308	微底付埋土	土師器	瓶	非定口径はやや不確定。内外面ともに回転模ナメ。外底面は回転ヘラ切り離し。	3719	8	
52	A区 DU-43区	SD-308	埋土	土師器	瓶	全周の1/3ほどの中片。頭部外側～高台部周辺は模ナメ。外底面は不定方向のナメ。内面はミガキ仕上げ。	4372	8	

辨認 No	遺物 名	調査 区	出土場所・ 遺構	出土状況	種 別	器 様	形狀・表面調査・黏土・焼成などの特徴	遺物登 録番号	コンテ ナ番号	備 考	
BB43	S3	AIX	DU-43K	SD-208	埋土下部	土器	柱状高台 上部	全周の1/4ほどの破片。内外縁ともに削輪痕ナデ。	3712	8	
54	AIX	DU-44K	SD-208	埋土	陶器	杯	耳环の受け取面の破片。内部とともに回転痕ナデ。	3742	8		
55	AIX	DU-44K	SD-208	埋土	陶土器	甕	口縁先端部が傾斜して上方にわずかに立ちあがげる。内外縁ともに削輪痕ナデ。	3741	8		
56	AIX	DU-44K	SD-208	埋土	陶土器	甕	外縁は二次的な火熱を受けて赤変し器底が変色調整不明。内部にはナデ。脚状の底部内面は削れで押さえてナデ。	3740	8		
57	AIX	DU-44K	SD-208	埋土中層	陶土器	甕	平底。内部とともに丸みがある。底部内面は削れ痕が部分的に残っている。	3739	8		
58	AIX	DU-44K以西	SD-208	埋土下層	陶土器	深鉢	壊れ、器底が歪んでいるためか、口縁部は若干くわ抜つている。外縁は其底全周。内部には細密な溝の削れ痕が残る。	3745	8		
59	AIX	DU-44K以西	SD-208	埋土中層	陶土器	深鉢	壊れ、外縁は乱屈なケズリ。内部には幅2~3mmのナデ。剥離痕が残る。	3746	8		
BB44	1	AIX	DT-DU-42K	SK-201	南半部埋土上部	石器	敲打具 20.1g	円盤形の砂岩内面の周縁に敲打痕が残る。残存重量10.1g。	4432	26	国版39-③
	2	AIX	DT-DU-42K	SK-201	南半部埋土上部	石器	磨石	円盤形の砂岩内面の周縁に削離痕が残る。また一部には削離痕が残る。残存重量10.0g。	4433	26	国版39-④
BB45	1	AIX	DT-DU-42-03K	SK-201	北半部最下層	鉄器	棒状鉄器	先端は縱方向に走った削状執拗。断面は丸丸方形を呈す。重量4.1g。	4456	26	国版39-⑩
2	AIX	DT-DU-42-03K	SK-201	北半部最下層	鉄器	不規	断面が方角を呈する棒状執拗。残存重量13.3g。	4467	26		
3	AIX	DV-44-7K	SD-208	鉄器	刀子?	刀子?	前面の刃部を鋸る。刀子の柄の可能性が考えられる。残存重量3.8g。	4460	26	国版40-①(写真), 国版40-②(×写)	
4	AIX	DV-44-15K	SD-208	鉄器	槌状	槌状	叩きの跡が複数。残存重量13.6g。	4464	26	国版40-④	
5	AIX	DV-44-25K	SD-209	埋土下部	鉄器	鎌	残存重量11.4g。	4457	26	国版40-⑤(写真), 国版40-⑥(×写)	
6	AIX	DV-44-25K	SD-209	埋土下部	鉄器	刃	残存重量41.9g。	4462	26	国版40-⑦(写真), 国版40-⑧(×写)	
BB46	1	AIX	DV-44-19-19K	SD-209	埋土	土器	柱	内部縁とともに変形が著しく調整不明。	3781	8	
2	AIX	DV-44-45K	SD-209	埋土上部	土器	塊	内部縁とともに変形が著しく、外縁は部分的に削離が見られる。調整不明。	3767	8		
3	AIX	DV-44-45K	SD-209	埋土	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3776	8		
4	AIX	DV-44-45K	SD-209	埋土上部	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。底部外縁は削離痕ナデ。高台部近辺は削離痕ケズリ。高台部は外ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	4381	8	国版36-⑨	
5	AIX	DV-44-45K	SD-209	埋土上部	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。底部外縁は削離痕ナデ。高台部は外ナデ。内部にはミガキ仕上げと考えられるが、然然としない。	4383	8		
6	AIX	DV-44-7	SD-209	埋土	黑色土器	塊	肩出・直縁、全面の1/5ほどの後灰。側部外縁・高台部周辺は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	4382	8		
7	AIX	DV-44-19-24K	SD-209	埋土	瓦器	瓦	外縁は丸く削りこむ。調整不明。	3780	8		
8	AIX	DV-44-45K	SD-209	埋土中部	土器	塊	全体の1/7ほどの破片。内縁部と外縁部には削離痕ナデ。外縁はナデ仕上げのため、切欠き仕上げは不明。	3766	8		
9	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	土器	塊	外縁は削離痕ナデ。内部は変形が著しく調整不明。	3778	8		
10	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	土器	塊	口縁部は削離痕ナデした後、側部外縁をミガキ仕上げ。内部はナデ仕上げを考えるが、変形が著しい性質としない。	4384	8		
11	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	土器	塊	浮でつくりで、動土も砂粒を含まず粘連されている。外縁は丸く削りこむ。調整不明。内部には削離痕ナデ。	3779	8		
12	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3769	8		
13	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口径はやや不整然。口縁部内面は削離痕ナデ。側部の外縁部はミガキ仕上げ。	3774	8		
14	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口縁部外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3773	8		
15	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口縁部外縁は削離痕ナデ。側部外縁は丸く削りこむ。内縁、内部にはミガキ仕上げ。	3771	8		
16	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口縁部外縁は削離痕ナデ。側部の外縁部はミガキ仕上げ。	3848	8		
17	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口縁部内面は削離痕ナデ。側部は内外縁ともにミガキ仕上げ。	3775	8		
18	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3772	8		
19	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3783	8		
20	AIX	DU-44K	SD-209	埋土中部	黑色土器	塊	内部縁、口縫は金網の破片。側部外縁・高台部周辺は削離痕ナデ。内縁にはミガキ仕上げ。	4380	8	国版36-⑨	
21	AIX	DW-44-45K	SD-209	埋土下部	土器	塊	外縁は削離痕ナデ。内部にはミガキ仕上げ。	3777	8		
	22	AIX	DX-45K	SD-209	埋土	陶土器	甕	口縁部周辺は削離痕ナデ。強いてナデのため、口縁下端は丸く削りこむ。口縁内面には強ナデに先行するハラツキ痕が現れる。側部外縁は削離痕ナデ。内縁にはヘア状の凹凸が付く。	3784	8	
BB47	1	AIX	DX-44K	II - 2-⑤層	土器	塊	内縁とともに回転痕ナデ。	3691	6		
2	AIX	DV-45K	II - 2-⑤層	SS-312上面	土器	塊	側部外縁に部分的にミガキ調査痕が現る。内縁～口縁部周辺は削離痕ナデ。	3804	6		
3	AIX	DU-44K	II - 2-⑤層	SS-308上面	土器	塊	小径のため内縁は不規則。内縁ともに回転痕ナデ。	3687	6		
4	AIX	DW-45K	II - 2-⑤層	土器	塊	内縁ともに回転痕ナデ。	3689	6			
5	AIX	DU-44K	II - 2-⑤層	SS-311上面	土器	塊	内縁ともに回転痕ナデ。	3690	6		